

機械仕掛けの カンパネラ



YUIKO MIZUHARA
瑞原唯子

それは、今にも雪が降りそうな、冷たく静謐な夜だった。

「う……ん……」

坂崎七海（さかざきななみ）は布団の中で寝返りを打ちながら、ぼんやりと眠りの海から引き戻される。どこからか大きな物音が聞こえた気がした。いつも朝まで熟睡している彼女にとって、就寝中の物音に気付いて目を覚ますなどめずらしいことだ。

時計を見ると、深夜零時をまわっていた。

おとうさんがお仕事から帰ってきたのかな——常夜灯のみがともる薄暗い中、眠い目をこすりながらもぞもぞと布団を這い出した。冷えた部屋の寒さにぶるりと身震いしつつ、一緒に寝ていた大きなイルカのぬいぐるみを引きずり、小さな手でリビングへ通じるふすまを開ける。

「……だれ？」

ぽかんと見上げた七海の口から、白い息が上がる。

正面に立っていたのはまったく知らない男だった。ガラス越しの月明かりが彼を背後から照らし出す。今までに会った誰よりも高い身長、見たこともない煌びやかな金髪、そして海を思わせる深い青の瞳。まるでテレビの中から抜け出たかのようで、現実味が感じられない。

足を踏み出すと、何か濡れたものを踏んだように感じて目を落とす。そこには黒っぽいぬめりのある水たまりが広がっていた。引きずっていたイルカのぬいぐるみも下の方が浸かっている。水たまりは正面の男にまで続いており、その足元にもうひとりの男性がうつぶせに倒れているのが見えた。

「おとうさん？」

よく似ていたのでそう呼びかけたものの反応がない。不安になるが、足を濡らす黒っぽい水たまりが気持ち悪くて、進むことも戻ることもためらってしまう。うろたえたまま立ちつくすことしかできない。

そのとき、ふいに吐き気を催すような生臭いにおいがして顔をしかめる。何が起こっているのかわからないながらも、何かとんでもないことが起こっていることを感じ取り、縊るように見えず知らずの男を仰いだ。

何の音もしない静寂。

淡い月明かりに照らされた色彩のない景色の中で、金色の髪と青色の瞳だけが不自然なほど鮮やかに色づき、神秘的な光を放っている。そして手は黒っぽいものでぬらりと濡れ、その長い指先からはきらりと輝く赤い雫が滴り落ちた。

その美しく残酷な光景は、幼い七海の脳裏に鮮烈に焼き付いた。

第1話 回り始めた復讐の歯車

「こいつだッ！！」

ガタッ——七海は朝食中、テレビの情報番組に映し出された似顔絵を見て目を見張り、食べかけのトーストを手にしたまま弾かれたように立ち上がった。その拍子にコップを倒してオレンジジュースをこぼしたが、気になどしてられない。

テレビに駆け寄り、食い入るように見つめる。

そこには、鉛筆で描かれた若い男性の似顔絵と、ブレザーを着た美少女の顔写真が並んで映っていた。美少女は橘財閥会長の孫娘だという。そして彼女を誘拐したのが似顔絵の男で、橘会長により三億円の懸賞金がかけられたと、男性レポーターが興奮ぎみに説明している。

七海はその似顔絵と記憶の男を脳内で比較した。似顔絵は鉛筆描きなので色まではわからないが、すっきりとした輪郭、キリッとした目元、甘すぎない二重まぶた、きれいな大きめの瞳、すっと通った鼻筋、まっすぐに結ばれた薄い唇、そして各パーツの配置——そのどれもが記憶の男と一致していた。

「お父さんを殺したのこいつだよ！」

振り返って、黙々とトーストを咀嚼している拓海に訴える。

父親を殺した直後の男にばったりと出くわしたのが四年と数か月前。それ以来、お父さんの敵を取るんだ、あの男に復讐するんだと心に決め、そのためだけに生きてきた。一日たりとも忘れたことはない。

「あの男は金髪だとか言ってなかったか？」

「そんなのカツラとかどうにでもなるよ！」

「まあ、それはそうだが……」

拓海は言葉を濁し、無表情を崩すことなく残り少ないコーヒーを口に運ぶ。

いままで行方どころか手がかりのひとつも掴めなかったのだから、あっさりこいつだと言われても信じられないのかもしれない。そうでなければこんなに落ち着いてはいられないはずだ。

真壁拓海（まかべたくみ）は、身寄りがなくなった七海の保護者である。

そもそもは殺された七海の父親・坂崎俊輔（さかざきしゅんすけ）の高校の同級生であり、友人であり、そして仕事の同僚でもあった。七海よりもずっと昔から俊輔と一緒にいたのだ。

だから、彼が犯人を憎む気持ちはおそらく七海に負けていない。いまは二人の共通の目的となっているが、最初に俊輔の敵を取ろうと言い出したのは彼である。あのときのまなざしはきっと一生忘れないだろう。

テレビでは、橘財閥会長がレポーターからの質問に答えていた。

誘拐犯から身代金などの要求はまだ来ていないこと、懸賞金は警察ではなく独自の判断だということ、孫娘を無事に保護するのが目的だということ、誘拐犯の顔は実際に身内が見ていることなど、淀みなく話している。

このひとの家族は知っているんだ。本当にいるんだ。お父さんを殺した男が——具体的な話を聞くにつれて存在が現実味を帯びてくる。七海の鼓動はドクドクと苦しいくらいに早鐘を打ち始めた。

「このおじさんに聞きに行かなきゃ」

「七海、落ち着け」

「落ち着いてなんかられない！」

反抗的に言い返すと、拓海の切れ長の目がわずかに細められて鋭さを増した。じっと七海を見つめ、言い含めるようにゆっくりとした静かな口調で切り出す。

「いいか、七海、行方がわからないから三億円の懸賞金をかけてるんだ。そのおじさんに聞いたところで何もわかりはしない。少なくとも今の段階では」

「そっか……」

言われてみればもっともな話である。興奮していた気持ちが急速にしぼみ、しゅんとうなだれた。食べかけのトーストを皿に置き、台所から布巾を持ってきてこぼしたオレンジジュースを拭き取る。

「その男が見つかったら行動を起こそう。ただし自分ひとりで勝手に行動するな。焦って動いてもろくなことにならない。せっかくの手がかりをふいにするだけだ。いいな？」

「うん」

あの男が父親を殺した犯人だという七海の言い分を、一応は信じてくれたようだ。そのことにすこしほっとする。もちろん焦る気持ちはあるが、今は待つしかないということくらいもうわかっている。

七海は冷えたトーストをかじりながら、再びテレビに意識を向ける。

もう中継は終わり、スタジオでコメンテーターたちが誘拐の目的について議論していた。いまだに要求がないのであれば金銭以外が目的ではないか、橋財閥に何らかの要望を認めさせるつもりかもしれない、あるいは少女自体が目的ということも考えられる、とそんな内容だ。

似顔絵の男についての手がかりがあればと思ったのだが、残念ながら憶測ばかりで役に立つ情報は無い。落胆しているうちに、アナウンサーの仕切りで別の話題に変わってしまった。

拓海がシャワーを浴びているあいだに、七海は食器を洗う。

それはこの家に引き取られたときに与えられた役割である。といっても嫌々やっているわけではない。すこしでも役に立てるならと喜んで引き受けていた。いまの七海にできる恩返しはこのくらいしかないのだから。

「ちゃんと勉強するんだぞ」

「はい」

いつものように、玄関で革靴を履いている拓海とそんなやりとりをする。

彼はこれから出勤だ。亡き父親と同じく警察に勤めているそうだが、警察官でも刑事でもないという。それ以上のことは家族にも言えないらしい。何日も帰ってこなくても怪我をしても

、何も教えてもらえない。

できることといえば、心配や不安を胸に秘めつつ笑顔で見送ることだけだ。革靴を履き終えた彼に、にっこりとして黒いビジネスバッグを手渡し、ひらひらと小さく手を振りながら言う。

「行ってらっしゃい、パパ」

といっても、もちろん彼は父親ではない。

家ではたいてい拓海と名前と呼んでいるが、おかしな誤解や詮索をされてはいけないので、外ではパパと呼んで親子を装うよう言いつけられている。玄関口でも誰かに聞かれているかもしれないのでそうしていた。

拓海は小さく頷き、ビジネスバッグを片手に静かに扉を開けて出ていった。

七海は玄関の鍵を閉めてリビングに戻った。

勉強しなければならないことはわかっているものの、とてもそんな気になれない。胸がざわついて落ち着かない。隅のキャビネットへ小走りで駆けていくと、その上の大きなイルカのぬいぐるみを手に取り、ぎゅっと抱きしめた。

それは、幼いころ父親がプレゼントしてくれたものだ。

当時は寝るときも抱きしめているほど気に入っていた。父親が殺されたあの夜も——血溜まりの中を引きずったせいで、尾びれから横腹にかけて血で汚してしまった。いまでも大きな黒いしみがついたままである。

しかし、その血塗れの汚れがあったからこそ、あの夢を見ていたかのような光景が現実だと確信できた。五感で感じた生々しさを忘れずにいることができた。そのため常に目の届くところに置いてきたのだ。

「お父さん、もうすこし待ってね」

父親を殺した男に関しては、早く見つかれと祈ることしかできない。

だから自分はそのあいだに精一杯の準備をしておこう。居場所がわかっただけですぐに行動を起こせるように、絶対に失敗しないように、いままで以上に熱心に真剣に取り組もう。そう決意する

ぬいぐるみを抱いたまま引き出しから鍵を掴み、キャビネットからオルゴールを取り、洋間から地下へ続く秘密の階段を駆け下りていく。そして手にしていた鍵で突き当たりの扉を開けると、パチンとスイッチを押して蛍光灯をつけた。

そこにあるのは広々とした射撃場だ。

マンションの地下にどうしてこんなものがあるのかは知らないが、拓海が専用で使っているようだ。七海もここで彼に射撃を教えてもらっている。一年ほど前からはひとりでの練習も許可されていた。

隅の机にイルカのぬいぐるみとオルゴールを置くと、スニーカーを履いて軽く準備運動を行う。射撃の反動で体を痛めないためにも必要だという。ほんのり体が温まるくらいがちょうどいいらしい。

準備運動を終えると、射撃に入る。

たくさんの拳銃の中からいつも使っているものを取る。手の小さい七海にも扱いやすい小型のものだ。安全点検をしてから装弾すると、人間の上半身をかたどった的に銃口を向け、まっすぐ両手を伸ばして引き金に指をかけ、狙いを定める。

バン——。

指を引いた瞬間、反動で手が上にはじかれてのけぞり、尻もちをつく。思わず顔をしかめるが、すぐに立ち上がって食い入るように的を確認した。

「やった！」

顔のほぼ中央にあたる部分に小さな穴が空いていた。本当は眉間を狙ったのですこし外しているものの、十分に許容範囲と言える。実戦なら、撃たれた相手はきっと即死しているだろう。

もう一度、しっかりと丁寧に構えて同じ的を撃つ。今度はよろめいだけで尻もちはつかなかったが、銃弾は的中しなかった。ギリギリ頭の端をかすめている。これでは致命傷になり得ない。

七海はあまり筋力がなく、片手で撃つことも連続して撃つこともできない。それゆえ絶対に狙いを外すわけにはいかないのだ。一撃必中。そうでなければ仕留めることは格段に難しくなる。

一発ごとに手を休めながら、装弾済みの二十発を撃つ。

そのうちの十六発が狙いに近いところに当たっていた。以前と比べるとだいぶ当たるようにはなっているものの、実戦には心許なく、決行の日までにもっと命中率を上げなければと思う。

ただ、数発撃つだけで手が痛くなる有り様なので、猛練習は難しい。拓海にも無理はするなと言われていた。手を痛めると完治するまで休まなければならず、かえって腕がなまってしまうのだ。

もどかしい気持ちはあるが、仕方がない。

ひとまず拳銃を戻し、小さく息をついて隅の椅子に腰を下ろした。手にはまだすこし痺れたような感覚が残っている。拓海なら二十発連続で撃ってもへっちゃらなのに、とすこし溜息をついた。

無言のまま椅子にもたれて休みつつ、横目を流す。

そこにあるのはイルカのぬいぐるみと木製のオルゴールだ。ひとりで射撃練習をするときはよくこの二つを持ち込んでいる。イルカのぬいぐるみは父親との記憶に、オルゴールは拓海との約束に繋がっていた。

そっと指を伸ばして、繊細な模様が彫られたオルゴールの木蓋を開ける。一拍の間のあと、優しくまるやかでなおかつ力強さを感じさせる音色が、興奮を掻き立てる旋律を奏で始めた。

ラ・カンパネラという曲が流れるこのオルゴールは、拓海のものである。

お父さんの敵を取ろう——彼が言い聞かせるようにその話をするときはずっと、このオルゴールを流していた。理由はわからないし、尋ねたこともないが、彼にとっては何か特別な意味があるのかもしれない。

ただ、もう言い聞かせる必要がないと判断したのか、ここ一年はめっきりそういうこともな

くなっていた。それでも今のようにひとりで射撃練習をするときは、自主的に聴くことにしているのだ。

それだけで否応なく記憶が引きずり出される。

遺体安置所で呆然としていたことも、その手を拓海が握ってくれたことも、敵を取ろうと言ってくれたことも、拳銃の扱いを丁寧に教えてくれたことも、初めて拳銃を撃った時のことも。

心臓がぎゅっと締めつけられて鼓動が早鐘を打ち、じわじわと汗がにじんできくる。目をつむり、気持ちを落ち着けるようにゆっくりと呼吸したあと、強いまなざしで真正面を向いた。

絶対に、あいつを殺すんだ——。

脳裏に浮かぶのは手を血で染めた金髪碧眼の男。その頭の真ん中に銃弾を撃ち込むことを想像する。脳内ではこれまで数えきれないほど殺してきた。それをこの手で現実にするのだ。

曲が終わり、余韻を響かせてオルゴールが止まる。

よし、と気合いを入れて椅子から立ち上がると、再び拳銃を手に取り、すっかり慣れた手つきで弾倉を交換する。そして無機質な人型に敵である男の姿を重ねて、銃口を向けた。

おまえはお父さんのカタキ——！

激しい怒りによる気持ちの昂ぶりを感じながら、グッと奥歯を食いしばる。手元がぶれないよう足に力をこめると、照準を定め、標的を見据えたまま引き金を引いた。

第2話 曖昧な誘拐事件

「もう、いつになったら見つかるんだよ」

あれから三週間、毎日欠かさずテレビや新聞で動向をチェックしていたが、誘拐犯が見つかったという情報はなかった。この誘拐事件を取り上げることはあっても、三億円に踊らされる人々の話など、有益な内容とはいえないものばかりである。

その日の朝も、トーストをかじりながらテレビの情報番組を見ていた。しかしながら無関係な事件や芸能ニュースばかりで、誘拐事件については何もない。いつものように口をとがらせてぶつくさと独りごちる。

拓海は最初の日からずっと関心の薄そうな様子を見せていた。七海が進展のなさに不満をもらしても同調することはないし、テレビで誘拐事件を取り上げていてもちらりと横目を向けるくらいだ。いまも七海の文句を聞き流して黙々とトーストを食べている。

『えっ？』

かすかにマイクが拾った、女性の聞き返すような声がテレビから聞こえた。

それを皮切りにスタジオがひそかに慌ただしくなった。女性アナウンサーが横から差し出された紙に目を落とすと、これまでの流れを打ち切り、すっと背筋を伸ばして無感情で真面目な面持ちになる。

『橘財閥会長の孫娘が誘拐され、犯人と思われる男に三億円の懸賞金がかけられた件で、これより橘会長の緊急会見が行われますので中継いたします』

直後、映像が切り替わり橘会長が映し出される。

七海は大きく目を見開き、一瞬遅れてガタッと椅子を弾き飛ばさんばかりに立ち上がった。ついにあの男が見つかったということだろうか。口を半開きにしたまま瞬きも忘れるほどテレビを凝視する。

橘会長は報道陣に向かって端然と一礼すると、お忙しい中お集まりいただきましてとお決まりの挨拶を始めた。そう長いものではなかったのだろうが、気持ちの急いでいる七海にはとてつもなく長く感じられた。握りしめる手のひらに汗がにじむ。

一通りの挨拶が終わり彼がその場で腰を下ろすと、本題に入る気配を感じて一気に緊張が高まった。無意識のうちに体がこわばり奥歯を噛みしめる。

『私たちは犯人と思われる男に三億円の懸賞金をかけ、皆様に協力を仰いできましたが、只今をもちまして終了とさせていただきます。これまで捜索に力をお貸しくくださった皆様には深く感謝し、御礼申し上げます』

バシャバシャという音とともに無数のフラッシュが焚かれた。テレビ越しでもまぶしさを感じるくらいに。レポーターたちは競うように勢いよく挙手をしていた。

『お孫さんが無事保護されたということですか？』

『そう思っていていただいて結構です』

進行役の男性に当てられた若い女性レポーターが質問し、橘会長がざらりと答える。すぐさま他のレポーターたちが再び我先にと挙手をした。

『あの似顔絵の男は逮捕されたのでしょうか？』

『申し訳ないがノーコメントとさせていただきます』

『それでは世間が納得しないと思いますが』

『では問題は解決したとだけ申し上げておきます』

『懸賞金を手にした人はいるのでしょうか？』

『残念ながら有益な情報は寄せられておりません』

『では懸賞金は……』

『三億円はしかるべき公益団体に寄付いたします』

次々と上がる質問に端的な答えが提示されていく。しかし、七海の知りたいことは濁されたまままだ。怪訝に眉をひそめて首をひねりながら、向かいでコーヒーを飲んでいる拓海に振り向いた

。

「あの男、見つかったってこと？」

「はっきりしないな。誘拐犯を捕まえて孫娘を保護したのであれば、おそらく今ごろは警察に留置されているはずだ。だが誘拐犯が自ら孫娘を解放したのであれば、いまだに行方が掴めていない可能性もある」

拓海は横目でテレビを見ながら答える。

それを聞いていた七海の顔は次第に曇っていく。警察に逮捕されていたらどうやって殺せばいいのかわからない。いや、それよりも行方さえ掴めていない方がよほど困った事態といえる。

だとしてもまったく手がかりがないわけではない。少なくとも孫娘はこの誘拐犯と接触しているのだ。何らかの交渉をしたのであればその家族も。いずれにせよグダグダと考えているだけでは始まらない。

「とにかく話を聞きに行こうよ！」

「そうしたいが住所がわからない」

「え……、そんなあ」

予想外の展開に思わず泣きそうな声になる。こんな記者会見を行うくらいだから簡単に行けると、誰でも会えると、何となくではあるがそう思い込んでいた。縋るように拓海を見ると、彼はことりとマグカップを置いて無表情のまま言葉を継ぐ。

「調べてみるから待ってろ」

「うん！」

ほっと安堵して元気よく頷く。

失念していたが拓海は警察に勤めているのだ。相手の素性はわかっているのだから、住所を調べる方法などいくらでもあるだろう。きっとすぐに見つけられる。そう考えると一気に気持ちが浮上してそわそわしてきた。

「七海、まずちゃんと食べる」

「はあい」

すぐにでも射撃場に向かいたかったが、我慢して席につき、残りのトーストを大急ぎで口に押し込む。あわてるな、ちゃんと噛め、と叱られつつ食べ終えたものの、結局、拓海を見送るまで

は射撃場に行けないことに気が付いた。

いつもどおり、拓海がシャワーを浴びているあいだに食器を洗う。テレビの情報番組はいつものまにか別の話題に変わっていた。しばらくして出勤の準備を整えた拓海が自室から出てくると、七海も彼について小走りで玄関に向かう。

「気持ちはわかるが、勉強を疎かにするなよ」

「わかってる」

革靴を履くために屈んだ背中を見ながら、言葉を交わした。

あの男の似顔絵を見た日から気持ちは射撃場に向いているが、勉強を忘れたわけではない。気乗りしないながらも毎日欠かさず勉強している。ただ時間と分量はすこし減ったかもしれない。

「いってらっしゃい」

革靴を履いて振り返った彼にビジネスバッグを手渡すと、ごまかすように笑顔を見せてひらひらと手を振る。彼は何か物言いたげな顔をしていたが、しかし何も言わないまま扉を開けて出ていった。

ひとりになるとすぐにイルカのぬいぐるみとオルゴールを抱えて鍵を取り、一目散に地下の射撃場へと駆け降りていく。そしていつものように隅の机にぬいぐるみとオルゴールを置くと、スニーカーを履いて紐をきつく結び直した。

まず準備運動がてら三十分ほどランニングをしてから、腕立て伏せ、腹筋、背筋、スクワット、ハンドグリップを行う。本当はすぐにでも射撃の練習をしたいが、拓海に言われて体力と筋力の増強に取り組んでいるのだ。その方が結果的に射撃の命中率も上がるらしい。しかし――。

「あー、もうほんと疲れるっ！」

彼の作成したトレーニングメニューを終えるころには、いつも汗だくになっていた。手足を投げ出して冷たい床に寝そべり、大きく息を吐く。続けて射撃練習をしなければならないのに動くのさえ億劫である。

こんなときはやはりあれで気分を高めるしかない。視線をめぐらせてオルゴールの存在を確認すると、気合いを入れて立ち上がり、隅の椅子に腰を下ろして繊細な木彫りの蓋を開ける。

ゆっくりと流れ出す旋律と音色。

数えきれないほど聴いてきたが飽きることはない。耳にするだけで様々な記憶と感情が引きずり出される。同時に、興奮が呼び覚まされて体中に力が湧き上がる。父親を殺したあの男の顔を、煌びやかな金髪を、鮮やかな青の瞳を、血に濡れた手を、そこから滴り落ちる雫を、はっきりと思い浮かべて憎悪をみなぎらせる。

——七海、お父さんの敵を取ろう。

——お父さんを殺した男を殺すんだ。

——七海のこの手で殺すんだ。

頭の中でガンガンと打ちつけるように鳴り響く拓海の声。オルゴールの音色と絡み合い不協和

音を奏でる。そう、あの男だけは必ずこの手で殺さなければならない。七海のたったひとりの大切な家族を惨殺したのだから。

お父さん……。

ゆるりと横を向き、血で汚れたイルカのぬいぐるみを視界に捉えると、ふいにこみ上げるものを自覚してわずかに目を細めた。手を伸ばし、そのぬいぐるみを腕の中に抱え込んで瞼を閉じる。目の奥でじんわりと熱い涙がにじむのを感じた。

やがてオルゴールのドラムが止まり、しんと静まりかえる。

七海はゆっくりと一呼吸し、強気なまなざしを真正面に向けて立ち上がった。イルカのぬいぐるみを机に置いて足を進め、いつもの拳銃を手にとって装弾し、人型の的を睨むように見据えて銃口を向ける。

立ち止まってる場合じゃない——。

遠くない未来、いつかこの手であの男を殺しに行く日のために。そしてそのとき後悔しないために。ただ眉間に銃弾を撃ち込むことだけを考えて引き金を引いた。

第3話 見えない真意

「橘の住所、まだなの？」

「そう急かすな」

二か月が過ぎてても、橘の住所はわからないままだった。

三億円の懸賞金を取り下げられた翌日から、すくなくとも一日一回は尋ねているが、拓海の返事はいつもつれないものだった。焦る様子さえ見られない。ただ淡々と否定の言葉を繰り返すだけである。

誘拐事件に関連した報道は、今ではすっかり下火となっているが、記者会見から数日はかなり盛り上がりを見せていた。誘拐事件の顛末を伏せられて不完全燃焼だったのだろう。様々な憶測をめぐらせて事件を読み解こうとしていたようだ。

七海の見た番組では、お家騒動というのが最有力として挙げられていた。後継者争いや遺産相続をめぐる問題などで、橘会長と対立する側が実力行使に出たのではないかと。その場合、身内あるいはその知人の犯行という線が濃厚らしい。

あと、実は駆け落ちだったのではないかという説もあった。橘会長が交際を反対したところ駆け落ちしてしまったので、その二人を探し出すために、もしくは懲らしめるために、誘拐されたと偽って懸賞金をかけたのではないかと。

どちらにしても、あの似顔絵の男は橘家と何かしら関係があるということだ。素性も掴んでいるに違いない。もう和解しているのであれば居どころも把握しているかもしれない。

橘会長に訊けば、何らかの情報は得られる。

その確信があるにもかかわらず、住所がわからないから会いに行けないなど、くやしくてもどかしくて落ち着かない。けれど七海にはどうすることもできない。せいぜい毎日あきらめずに拓海をせつつくくらいだ。

「ねえ、本当に調べてるの？」

「仕事の空き時間にな」

「本当にまだわからないの？」

「ああ」

拓海は食べかけのトーストに目を落としたまま答えると、マグカップのコーヒーを一口飲んだ。

「七海、いまは仕事が忙しいんだ。もうしばらく待ってくれ」

「うん……」

仕事が忙しいというのは嘘ではないように思う。このところ帰宅はいつも七海が寝たあとだし、今日も土曜なのに仕事に行くという。けれど、何か逃げているように感じるのは気のせいだろうか。

彼が冷静なのはいつものことだが、お父さんの敵を取ろうと七海に言い聞かせていたときの、あの力強いまなざしがまったく見られなくなった。それどころか、この話をしているときは目を

合わせてもくれないのだ。

結局、今朝も顔を上げることなく席を立ち、シャワーを浴びに行ってしまった。七海は釈然としない気持ちのまま、その背中を横目で追いながら、食器を集めて流しに運んでいった。

泡立てたスポンジで皿を洗いながら、もやもやと考える。

橘の住所を調べるのに行き詰まっているだけなら仕方ないが、そもそも調べていないのだとしたら。調べたくないのだとしたら。彼の様子からするとありえなくはないと思うが、理由がわからない。

復讐をあきらめた——？

ふいに浮かんだ答えを認めたくなくて、顔を曇らせる。

そういえば、父親を殺されたあの日からずっと敵を取ろうと言い続けてきた彼が、一年ほど前から口にしなくなっていた。七海に自覚が芽生えて必要なくなったと解釈していたが、もし気が変わっていたのだとしたら。

ずっと共通の目的で結ばれた仲間だと思っていたのに、どうして。裏切られたように感じてギリと奥歯を食いしばる。そうと決まったわけではないが、その可能性があるのなら、ただじっと待っているわけにはいかない。

食器を洗い終えて、水を止める。

濡れた手をタオルで拭いながら、自分ひとりで何ができるだろうと思案をめぐらせる。住所を調べようにもどうすればいいのか見当もつかない。やはりどうにかして拓海に協力してもらうしかないように思う。でも、普通に頼んでも今までのようにごまかされるのがオチだ。

何か弱みを握れば言うことを聞いてもらえるかも——ふと思いついたその考えに鼓動が速くなり、胸が苦しくなる。こんな脅迫みたいな真似をして後悔しないだろうか。けれど、そんなことを言っていたらいつまでたっても敵が討てない。

拓海がシャワーから出てくるまでに、まだ時間はある。

表情を引きしめ、くるりと身を翻してざっとあたりを見まわす。拓海の部屋はいつも鍵がかかっているので入れない。探れるとすれば、リビングに掛けてあるスーツの上着くらいだ。確かあの内ポケットには黒い手帳が入っているはず。ときどき家でも広げながら電話をするのを見かけていた。

はたして、内ポケットには手帳があった。

何か弱みになるようなことが書かれていないか、手早くめくりつつチェックする。しかし目につくのは断片や暗号のようなものばかりで、内容はほとんど理解できなかった。考えてみれば、知られてはまずいことをそれとわかる形で書くはずがない。溜息を落とし、もうあきらめようと思いつつも手が止まらず一枚めくると。

「え、これ……!？」

そこには「タチバナ」という文字と住所らしきものが斜めに走り書きされていた。大きく息を飲んだが、考えている時間はない。すぐに電話の横に置いてあるメモ帳を一枚引きちぎって書き

写すと、上着の内ポケットに手帳を戻した。

「いってらっしゃい、パパ」

いつもどおり玄関でひらひらと手を振りながら見送る。拓海も不審に思いはしないだろう。案の定、手帳を盗み見たことに気付きもせず、扉を開けて出ていった。

七海は玄関に立ったまま、ジャージのポケットに手を差し入れ、書き写した紙切れをそっと取り出した。住所は東京23区内。あの橘だと断言することはできないものの、それ以外に考えられない。

どうして教えてくれなかったの？

復讐をあきらめたわけではなかったのだろうか。でもわざと教えなかったのなら、七海に行かせるつもりはないということだ。拓海が何を考えているのかわからない。だからこそ、迂闊に問いただすわけにもいかない。

僕ひとりでここへ行ってこよう――。

七海に外出が許されている時間は、土日祝の日中と、平日の午後三時から日沈までだ。今日は土曜なので午前中から外出しても問題ない。日が沈むまでに帰れば知られることもないだろう。

さっそく白いTシャツとデニムのショートパンツに着替え、ショルダーホルスターを装着し、手入れして装弾した愛用の拳銃をそこにおさめる。さらにその上からブルゾンを重ねてキャップを目深にかぶると、唇を引きむすんだ。

「お父さん、行ってくるね」

血で汚れたイルカのぬいぐるみをギュッと抱きしめて、元に戻す。

絶対にあの男の居どころを聞き出してくるんだ。そしてこの手で殺すんだ――強い決意を胸に、まぶしい日射しが降りそそぐ外へと飛び出していった。

第4話 立ちはだかる悪魔

「おじさん、この住所に行つて」

七海はタクシーに乗り込むなり、住所の書かれたメモを運転手に差し出してそう告げた。中年の運転手はメモに目を落としたあと、どこか心配そうな面持ちでちらりと振り向く。

「ボク、ひとりかい？」

「お金なら持ってるよ」

七海がそう答えると、運転手はバツが悪そうに苦笑して車を走らせ始めた。

めったに見られない車窓からの景色が面白くて、窓にかぶりついてひたすら眺めているうちに、目的の場所についた。思ったよりも時間が掛からなかった気がする。七海の住んでいるところとは別の区だったが、そう遠くなかったのかもしれない。

「ありがと、おじさん」

運転手に告げられた料金を支払い、タクシーを降りる。

正面には七海の背丈よりはるかに高い門が立ちはだかっていた。門柱には橘と表札が掛かっているのも間違いはない。門の向こうには手入れされた立派な木々と白亜の洋館が見える。まるでイギリスやフランスの貴族が住んでそうな屋敷だ。

表札の下にインターホンらしきものがあったのでボタンを押してみた。だが、屋敷が遠くてチャイムが鳴っているのかよくわからない。聞こえてるのかなあ、と思いながら連打していると、ほどなくして男性の声で応答があった。

『はい』

「橘会長っていうテレビに出てたおじさんいる？」

『失礼ですが、お約束はございますでしょうか』

「約束？ そんなのしてないけど」

『会長はお約束がなければお会いになりません』

「じゃあ、誘拐された滞っていうお嬢様でいいよ」

『申し訳ありませんがお引き取りください』

「あ、ちょっと！」

プツッと応答が切れた。

それから何十回とインターホンを連打したが反応はない。

「もうっ！」

インターホンの応答内容から橘会長の家であることは間違いのないようだ。拓海の手帳を盗み見までしてようやくここまでたどり着いたというのに、門前払いでノコノコ帰るわけにはいかない。

こうなれば、もう強行突破しかないだろう。

自分の身長より高い鉄製の門を掴んでよじ登り始める。何度か失敗したあと、身軽さを活かしてどうにか上までたどり着いた。安堵の息をつき、向こう側に飛び降りようとしたそのとき。

「ひゃっ！」

柵の細いところに掛けていた足を滑らせ、意図せず向こう側に落ちた。かぶっていたキャップもはずみで地面に落ちる。

「いったあ……」

とっさに庇ったおかげで頭は打たなかったが、背中を打ちつけてしまった。顔をしかめながら手で押さえて呻いていると——あっというまにスーツを着た大人の男たちに取り囲まれた。

「これほどけよ！ ほどけたら！！」

七海は後ろで手首を縛られ、足首も縛られ、屋敷の一室に芋虫のように転がされた。幸い絨毯が敷かれているのでさほど痛くないが、そういう問題ではない。じたばたしながらありったけの声を張り上げて喚き立てる。

しかし、七海を縛り上げた初老の執事は何の反応も示さない。代わりに隅で腕組みしながら眺めていた若い男が近づいてきた。その顔立ちは例の誘拐されたお嬢様と驚くほどよく似ている。年頃も同じくらいに見えるのできょうだいかもしれない。

彼は七海の前でしゃがみ、寸分の隙もない探るようなまなざしでじっと見下ろす。下手なことを言えば取り返しのつかないことになる。七海はぞくりと背筋が冷たくなるのを感じながら直感的にそう思った。

「君の名前は？」

「……………」

「学校はどこ？」

「……………」

「親の連絡先」

「……………」

どれも答えてはいけない質問だ。父親の敵と繋がりがあるかもしれない相手に、素性を知られるわけにはいかない。わずかに目をそらして唇を引き結び、無言を決め込んでいると、彼はわざとらしく大仰に溜息をついた。

「自分の名前も連絡先も言おうとしない、そのうえこんなものまで持ってるんじゃあ、いくら子供でも見過ごすわけにはいかないよねえ」

そう言いながらポケットから拳銃を取り出す。それは警備員に取り押さえられたときに奪われた七海のものだ。奪い返したいが、手足をきつく縛られたこの状況ではどうすることもできない。くやしくてありったけの怒りをこめて睨みつける。

「返せよ、泥棒！」

そう囁みつくが、何がおかしいのか彼はクスッと笑った。

「確かに、僕は泥棒だけどね」

「開き直ってないで返せよ」

「銃刀法違反って知ってる？」

「……………」

七海は眉を寄せた。許可なく銃を持つことは法律に違反するから、誰にも見つからないようにしろと、幼いころから拓海に言い聞かされてきた。だからブルゾンの下のホルスターにおさめて見えないようにしていたのに――。

痺れを切らしたのか、彼は脇に控えている執事に振り向いて声を掛ける。

「ねえ、櫻井さん。警察の電話番号ってわかる？」

「今回は緊急事態ですし、110番でよろしいかと」

「ああ、なるほどね」

いつのまに用意したのか執事がすっと電話の子機を差し出すと、彼は当然のように受け取り、すこしもためらうことなく片手でボタンを押し始める。

「待って！！」

彼の手が止まった。七海は全身から汗が噴き出すのを感じながら、これ以上ないほど必死に頭をめぐらせて言い訳を探す。

「あ……えっと……それ、おもちゃだよ？」

「へえ、そうなんだ」

彼はまじまじと拳銃を眺める。反対の手に持っていた電話の子機は執事に返していたので、もう警察に連絡する気はないのだろう。どうにかごまかせたとひそかに安堵したが――。

「最近のおもちゃってすごいね。安全装置までついてるんだ」

そんなことを言いながら彼は安全装置を外している。パッと見てわかるものでもないのにどうして。啞然としていると、七海の眉間に冷たい銃口がグリッと突きつけられた。その感触に一瞬で背筋が凍りつく。

「引き金を引くとどうなるんだろう。火薬の空砲？ それともBB弾？」

彼の人差し指に力がこもる。

七海はヒッと息を飲んだ。

「やめてそれ本物っ！！！」

絹を裂くような叫び声を上げて顔をそむけ、ギュッと目をつぶり、歯を食いしばり、全身に力を入れてこわばらせる。が、いつまでたっても何も起こらない。おそるおそる瞼を震わせながら薄目を開けていく。

彼はもう七海に銃口を向けていなかった。しかし拳銃はしっかりと握ったままだ。それを七海の目の前でちらつかせて尋ねる。

「これ、どこで手に入れたの？」

「……さっき道ばたで拾った」

さすがに無理のある答えだと自分でも思った。きっちりホルスターまで装着しているのに、拾ったなどと言っても誰も信じはしないだろう。また拳銃を突きつけられるのではとビクビクしながら、彼の反応を窺う。

「僕、スパイ映画とか結構好きなんだよね」

「……………？」

「一度やってみたかったんだ、手荒な尋問」

彼はそう言うと、わけがわからず眉をひそめている七海を見ながら、形のいい唇にうっすらと不敵な笑みを浮かべた。

「やっ……も、やめ、て……あ……ひっ、っ、っ、うはははははははっ！」

七海は息もたえだえに絨毯敷きの床をのたうちまわっていた。彼は膝立ちで跨がり、脇腹や腰など容赦なく次から次へとくすぐってくる。手足が縛られているので逃げることも防ぐこともできない。

「正直に答えないかぎり、やめないよ」

「答える！ ちゃんと答えるから！！」

自分がくすぐりに弱いなんて今の今まで知らなかった。それなりに我慢強い方だと自負していたが、これ以上は耐えられない。冗談抜きで気が狂う。下手をすれば死んでしまうかもしれない。

やっとかすぐる手が止まった。

七海は脱力してくたりとなったまま呼吸を整える。だが、いつまでたっても彼が七海の上からどく気配はない。そろりと目を向けると、彼は跨がったまま手をついてこちらに身を乗り出し、組み敷くような体勢でじっと覗き込んできた。目に掛かっていた七海の前髪をそっと指先で流しながら、唇に微笑をのせて言う。

「正直に答えるなら、警察には特別に黙っててあげる」

七海は息を詰めて真上の彼を見つめたまま、こくりと頷く。

「まず名前を教えて」

「七海」

「フルネームだよ」

「……坂崎七海」

もはや七海には素直に答える以外の選択肢はない。くすぐられるわけにも警察沙汰になるわけにもいかないのだ。声にはありありと不満がにじんでしまったが、彼が気にする様子はない。

「あの拳銃はどこで手に入れたわけ？」

「うちの射撃場から持ってきた」

「家が射撃場を経営してるってこと？」

「そうじゃなくて専用の射撃場」

その答えを聞くなり彼は怪訝に眉をひそめた。すこしのあいだ無言で何か考え込んでいたが、やがて気を取り直したように質問を続ける。

「ここへ来た目的は？」

「三億円の懸賞金をかけてた誘拐犯、あいつの居どころを教えてもらおうと思ったんだ。ここしか手がかりがなかったし……ねえ、あんたでも誰でもいいから知ってるなら教えてよ」

散々な目に遭ったのだから、せめて当初の目的を果たさないと割に合わない。こうなったらなりふり構わず食らいつこうと決める。

彼はほとんど表情を動かさないまま、眼光を鋭くした。

「その人とどういう関係？」

「あいつが僕のお父さ……」

そこまで言いかけてハッと口をつぐんだ。父親の敵だから殺したい——こんなことを言ったら、知っていても教えてもらえない可能性が高い。どうしようかと冷や汗をにじませながら思案し、そして。

「僕のお父さんかもしれないんだ！」

どうにか取り繕ったが、全然似ていないのに無理があったかもしれない。彼もさすがに驚いたらしく目を大きくしていた。

「本当に？」

「うん」

心を見透かすようなまなざしにドキドキしながら嘘をつく。

彼は上半身を起こして立ち上がると、ジーンズのポケットから折りたたみ式の携帯電話を取り出し、親指で素早くいくつかのボタンを押してから耳に当てた。

「武蔵？ ……うん、元気だよ」

ほどなくして電話の向こうの誰かと話し始めた。

「何かさ、自分の父親は武蔵だって言ってる子供が来てるんだけど……わざわざ電話してまでそんなつまらないウソ言わないよ……それは前も聞いたし疑ってるわけじゃない……十歳くらいかな……うん、それは僕だってわかってる。でも100%ないとは言い切れないよね……じゃなくて」

どうやら武蔵という電話の相手が誘拐犯らしい。

やっところまできた——七海はどくどくと鼓動が高鳴るのを感じた。痛いくらい胸が締めつけられて体中が熱くなる。けれど今はまだ悟られるわけにはいかない。必死に感情を抑制して何でもないふりをする。

しかし聞かれたくないことがあるからか、彼は電話で話を続けながら部屋をあとにした。七海は床に転がされたまま置き去りにされたが、ひとりではなく櫻井という執事も残っている。下手なことをしないよう見張っているのだろう。

しばらくして彼が戻ってきた。すでに通話を終えているらしく携帯電話は手にしていない。執事と小声ですこし話をしたあと、絨毯敷きの床に横たわる七海の前に再びしゃがんだ。

「いいよ、連れて行ってあげる」

「えっ……誘拐犯のところへ？」

「行きたくない？」

困惑する七海に、彼は意味ありげな笑みを浮かべて挑発する。

本当に連れて行ってくれるのであれば、願ったり叶ったりだ。ようやく父親の敵を取ることができるのだ。けれど——七海はどことなく不穏なものを感じて身構える。頭の中に警鐘が鳴り響くが、それでもせっかくの好機をふいにすることはできない。

「連れてって」

覚悟を決めると、彼をまっすぐ睨むように見据えてそう答えた。

第5話 四年半ぶりの殺人犯

「ふざけんな！」

七海は新鮮な空気を吸い込むと、トランクを開けて真上から覗き込んできた男に思いきり食ってかかった。顔に陰が落ちているので表情まではよくわからないが、うっすらと不敵な笑みを浮かべているように見える。その背後にはどんよりとした鈍色の空が広がっていた。

おそらく目的地の近くに着いたのだろう。

誘拐犯のところに連れて行ってくれるというので頼んだら、手足を縛られたまま車のトランクに放り込まれ、ひたすら二時間ほど走ってここまで連れてこられたのだ。手厚くもてなされることを期待していたわけではないが、まさかこんな非人間的な仕打ちを受けるとは思わなかった。

トランク内には一応やわらかい毛布が敷かれていたが、それでも何度も体をぶつけるとけっこう痛い。特に最後の方は傾斜はあるしガタガタだし散々だった。手足を縛られているため身を庇うこともできず、為すがまま打ちつけられるしかないのだ。

「こんなところに放り込むなんて荷物扱いかよ！」

「君は拳銃所持で不法侵入した不審者だよ。自覚ある？」

そう言うと、彼は七海を米俵のように肩に担ぎ上げた。彼の背中側に七海の頭が逆さ吊りになる。

「ちょ……落ちるっ！ 落ちるから！！」

「そう思うなら暴れないで」

怯える七海に冷たく言い放ち、そのまま歩き始める。

最初は無理だと思ったが、しっかり腰と脚を抱えてくれているので意外と安定している。おとなしくさえしていれば落とされることはなさそうだ。この運ばれ方については甚だ不本意だがあきらめるしかない。

あまり顔を動かさないよう横目でちらちらとあたりを窺う。鬱蒼と茂る木々や草花、舗装されていない細道くらいしか目に入らない。その細道を、彼は躊躇のない足取りでずんずんと進んでいく。後ろからは執事の櫻井が無表情でついてきていた。

しばらく木々のあいだの細道をたどっていくと、山小屋が現れた。

彼は七海を担いだまま鍵を開けて勝手に入っていく。そして突き当たりの扉を開けて中に進むと、七海を板張りの床に下ろした。転がされたのではなく座らされただけ、今までよりも丁寧な扱いといえるだろう。

七海はぐるりと見まわす。

すっきりとしたシンプルな部屋。ダイニングテーブルと椅子、ソファくらいしか目立つ物はない。テレビすら見当たらない。ただ隅の台所だけは充実しているようだ。七海のいるところからすべてが見えるわけではないが、それでも食器や食材、こまごまとした道具などが小綺麗に置かれているのがわかる。

窓の方に目を向けるとベランダに人影が見えて息を飲んだ。後ろを向いているので顔まではわ

からないが、すらりとした背格好は父親を殺した男にとってもよく似ている。頭は金髪ではなく黒髪だが染めているのかもしれない。

きっと、あいつだ——。

ドクドクと痛いくらいに鼓動が速くなる。まともに息もできない。

こちらに気付いたのかベランダの男が振り向いた。その顔を見て七海はごくりと唾を飲んだ。間違いなくあのとき脳裏に焼き付いた顔だ。すっきりとした輪郭、精悍な目元、まっすぐ通った鼻筋、薄い唇、そして鮮やかな青の瞳。すべてが一致する。

「わざわざ来てもらって悪いな、遙」

「この子だよ。武蔵のことお父さんって」

ベランダの男はガラス戸を開けて部屋の中に入り、七海をここに連れてきた若い男と言葉を交わすと、七海の前で片膝をついた。宝石のような青の双眸が真正面から七海を捉える。

瞬間、吐き気のするような血の匂い、なまぬるいべとりとした感触、底冷えするような鮮烈な青の瞳、どす黒い血に濡れた大きな両手——五感を伴う記憶が脳裏を駆けめぐった。体の芯が冷たくなりゾクリと身震いする。

「おまえ、俺が父親だっていう根拠は何かあるのか？」

「お……おまえなんか父親じゃない！ 父親なもんか！」

「は??」

「おまえはお父さんのカタキだ！！」

ぶわっと涙をあふれさせながら身を乗り出して突っかかるが、手足を縛られていたためバランスを崩してしまい、みっともなく倒れかかったところを彼に受け止められる。カッとして思いきりその手首に噛みついたものの、致命傷どころか血のにじむ程度の傷にしかならなかった。

「拳銃返して！ こいつ殺さなきゃ！！」

「違法なものを返せるわけないでしょ」

七海をここに連れてきた若い男——遙に振り向いて訴えたが、彼は冷やかにそう答えるだけだった。その後ろに控えている執事も無反応である。

「じゃあ台所からナイフ持ってきて！」

「残念だけど殺人も違法だからね」

「こいつが先にお父さんを殺したんだ！」

「江戸時代なら仇討ちできたけどさ」

激昂する七海とは対照的に、遙は何を聞いても動じることなく淡々と言い返す。

くやしい、くやしい、くやしい！！

長年、殺してやろうと思っていた男が目の前にいるのに何もできない。顔をぐちゃぐちゃにしてただ見苦しく泣いているだけだ。あまつさえその男に抱き留めてもらっているなど、屈辱で頭が沸騰しそうになる。

ごめん、拓海——。

こんなはずではなかった。いったいどこでどう間違ってしまったのだろう。勝手な行動はするなど散々注意されていたはずなのに、言うことをきかずに突っ走ってこんな結果になるなんて、

あまりに申し訳なくて彼に顔向けできない。

「なあ、遥……この子の名前、なんて言ったっけ？」

「坂崎七海。自称だから本名かどうかはわからない」

「坂崎……」

二人が自分について話すのを、七海はぼろぼろと涙を流してしゃくり上げながら聞いていた。正直に本名を答えたのに信じられていなかったようだが、口を挟む気にはなれない。泣き疲れたせいか心も体もぐったりと憔悴していた。

ふいに、七海を抱く手に力がこもる。

怪訝に思って彼を見上げるとひどく険しい顔をしていた。ゾッとするくらいに。忘れていたわけではないが、この男は殺人犯なのだとあらためて認識させられて、いまさらながらすこし怖くなる。

「遥、来たばかりなのに悪いが櫻井さんと帰ってくれ」

「どういうこと？」

「この子と二人で話をしたい。事情はあとで話す」

「……わかった」

この殺人犯と、二人きり——？

七海は青ざめる。そういえば、父の敵として命を狙っていることを本人の前でぶちまけてしまった。冷静に考えればあまりにも軽率だ。このまま何事もなく解放してくれるとはとても思えない。

救いを求めるように遥を見上げたが、彼は本当に七海を置いて帰ろうとしていた。当然ながら執事も一緒である。二人とも七海に声をかけようもしない。

「じゃあ、何かあったら必ず連絡して」

「ああ」

遥は軽く右手を上げ、執事の櫻井を従えて部屋から出て行く。

「ちょっと待って、置いてかないで！！！」

七海は懸命に叫びながら、体をむちゃくちゃに振って武蔵の手を振りきり、板張りの床を芋虫のように這いつくばっていく。しかし遥たちが戻ってくることはなかった。無情にも玄関の閉まる音が遠くに聞こえ、絶望して動きを止める。

「そんな……」

眉根を寄せておそろおそろ背後の武蔵に振り向く。彼は噛まれて血のにじんだ手首をじっと無言で見つめていたが、ふいに七海を一瞥すると、ジーンズのポケットから細長いものを取り出してシャキッと開いた。

ナイフだ——！

露わになった銀色の刃が鈍い光を放った。彼はそれをちらつかせながら七海の方へと足を進めてくる。あのときの父親と同じように、七海もナイフで刺し殺すつもりなのかもしれない。

逃げたいのに凍りついたように体が動かなかった。それでも必死にふるふると首を振って拒絶の意を示すが、彼の動きが止まることはない。ナイフを構えて、七海に跨がり覆いかぶさるよう

に身を屈めてくる。

「うわああああああ！！！」

七海の絶叫が、他に誰もいない二人きりの山小屋に響き渡った。

第6話 憎むべき父の敵なのに

「遥が手荒なことをして悪かった」

武蔵と呼ばれていた男は、七海を縛っていた両手両足の縄をナイフで切ると、神妙な面持ちでそんなことを口にした。その声からも、表情からも、申し訳ないという感じがにじみ出ている。

てっきりナイフで刺し殺されるとばかり思っていた七海は、啞然として彼を見上げる。手首には噛みついたあとがくっきりとついていて、お父さんの敵だ、殺さなきゃ、などと喚いて噛みついた相手を解放するなんて、いったい何を考えているのだろうか。

しかし、自由になったからといって目の前の男を殺せるとは思えない。唯一の武器である拳銃はあの若い男に取り上げられてしまった。体格差を考えると、捨て身でかかっていったところでどうにもならないだろう。

それがわかっているから警戒もしないで拘束を解いたのかもしれない。だからといってこのまますんなり帰してくれるとも思えない。ふたりきりにしてくれと頼んでいたのだから何か思惑があるはずだ。

眉間にしわを寄せてつらつらとそんなことを考えていると、彼がふいに目の前にしゃがんできてビクリとした。思わず顔をこわばらせながら、床についた手をひそかに握り、身構える。

「どこか痛いところはないか？」

「別に、ない……」

たとえひどい怪我をしていてもこの男に告げるつもりはない。しかしながら幸いにも実際に怪我といえるほどのものはなかった。縛られていたところがヒリヒリするし、車のトランクでぶつけたところがすこし痛い、その程度である。

彼は深い海をたたえたような瞳でじっと七海を見つめた。

「坂崎七海……」

確認するようにフルネームを呼ばれてついと眉を寄せる。父親の敵である男に名前を呼ばれるなんて不快でしかない。しかし、彼は反抗的なまなざしを気にする様子もなく言葉を継ぐ。

「おまえの父親は坂崎俊輔だな？」

「えっ……知ってるのか？」

「ああ、俊輔には良くしてもらった」

「だったらなんで殺したんだ！！」

カッと頭に血がのぼり、こぶしを握りしめながら声を荒げる。

彼は動じることなく真顔のままうっすらと目を細めた。

「七海は俺が殺したと思ってるんだな」

「あのときおまえを見たんだぞ！！！」

「七海、おまえのその目で何を見た？」

問われなくても、その光景は毎日のように思い返している。

大きな血溜まりの中に倒れていた動かない父親。その傍で月明かりに照らされて立つ金髪碧眼の男。髪の色こそ違うものの、顔の造作も、背格好も、瞳の色も、目の前にいる男と同じである

。彼の手はべったりと赤黒い血で染まっていた。

記憶をたどるにつれて激しい憎悪が湧き上がる。目の前に父親を殺した張本人がいるのでなおのこと。言い逃れるつもりかもしれないが取り合う気はない。誰が何と言おうと七海ははっきりと目撃したのだから。しかし——。

「刺したところを見たわけじゃない、違うか？」

「……………」

言われてみれば確かにその瞬間は見ていなかった。だからといって彼が犯人でないとはとても思えない。決定的な場面を見られていないから言い逃れられる——そんな舐めたことを考えているなら大間違いだ。

「だから殺してないって言いたいのか？」

「さあ、どうだろうな」

てっきり肯定するものとばかり思っていたのに、彼は目を伏せてふっと曖昧な笑みを浮かべた。どういうつもりか知らないが随分と思わせぶりだ。何となく馬鹿にされているように感じて苛立ちがつのる。

「ごまかそうたって無駄だ！」

ぐうぐう——。

大声を張り上げると同時に、おなかも盛大に鳴った。

「あ……」

あまりに間の抜けた醜態にぶわっと顔が熱くなる。きっとゆでだこのように真っ赤になっているだろう。おろおろとうろたえながら目を泳がせていると、武蔵はくすっと小さく吹き出した。

「もうお昼だいぶ過ぎてるもんな。何か作ってやるよ」

「……敵からの施しなんて受けない」

「堅いこと言うな。腹が減っては戦ができぬ、だろ？」

それまでとは別人のような人なつこい笑顔でそう言うと、仏頂面の七海を宥めるようにぼんぼんと頭に手をのせ、ずっと台所の方へ向かっていった。

トトトトン、グツグツ、ジュウジュウ——。

七海はべたりと床に座ったまま、台所に立っている武蔵の後ろ姿を眺めていた。彼が軽快に動きまわるにつれていろんな音がする。そして次第に食欲をそそるいいにおいがしてきた。堪え性のない七海の腹は、さきほどからずっとぐうぐう鳴りっぱなしだ。

「七海、できたぞ」

ダイニングテーブルに二人分の食事を準備して、武蔵が声をかける。

こいつはお父さんの敵なんだ——七海はおいしそうな食事を目の当たりにしてぐらりと決意が揺れるが、それでも行くまいと唇を引き結んで耐える。しかし。

「な、作っちゃったんだから食べてくれよ。もったいないだろう？」

「……………」

目の前にしゃがんで笑顔でそうされると無視できず、促されるまま腰を上げてしまった。彼

からの施しを受けるわけじゃない、もったいないから食べてあげるだけ、と自分に言い訳をしながら、ダイニングテーブルの用意された席に着く。

そこには湯気の上がるミートソーススパゲティ、ポタージュ、彩りのいい生野菜のサラダが並んでいた。まるでレストランで出されるようなきれいな盛りつけだ。その見た目も、漂うにおいも、すごくおいしそうでごくりと生唾を飲む。

「毒なんか入れてないから心配するな」

武蔵は何気ない調子でそう言い、先に食べ始める。

毒を入れる可能性なんて考えもしなかった。そう言われると逆に気になってしまいが、七海の正体を知ったばかりで準備の時間はなかったはずだ。フォークを取り、不器用な手つきでおそるおそるスパゲティを口に運ぶ。

「……おいしい！」

途端、目を丸くして感嘆の声を上げた。

大好物であるコンビニのスパゲティにも引けを取らない。いや、比べものにならないくらいおいしい。ミートソースが濃厚で深みがあり、麺も硬すぎず柔らかすぎず食べごたえがある。何より出来たてほやほやで熱いくらいなのがいい。

「こんなおいしいの初めて食べた！！」

「そりゃ良かった」

武蔵はくすりと笑った。

七海は脇目もふらず一気に平らげると、すっかり満足して自然に顔をほころばせた。氷の融けきっていないグラスの水を飲んで一息つき、正面の武蔵に目を向ける。ちょうど彼も食べ終わったところのようだった。

「ねえ、僕をここに連れてきた遥って人、武蔵とどういう関係？」

「親戚だ」

何となく気になっていたことを尋ねてみると、彼はさらりと答えてくれた。

誘拐犯と被害者の家族という間柄にしてはやけに親しそうに見えたが、そういうことかと納得した。いつかテレビで言っていたとおりの家騒動だったのかもしれない。懸賞金を取り下げたときにはもう和解していたのだろう。

そうであれば、橘の協力は期待できない。

ひとりで来ようにもここがどこかさえわからない。それならいまこの機会に目的を果たすのが得策だろう。おいしい昼ごはんを食べさせてもらったばかりで気が引けるが、敵は敵だ。武蔵を殺さないことには復讐が終わらないのだから。

どうしようかと思案をめぐらせているうちに、武蔵が後片付けを始めた。てきぱきと食器を集めて流しで洗う。七海はその隙だらけの後ろ姿を眺めながら、今なら何かで殺せるのではないかと思ったが、ちょうどいい武器が見つけれなかった。

「今日はもう帰れ。送っていくから」

後片付けを終えて戻ってきた武蔵は、どこにあったのか七海のキャップを手渡ししながら言う。

だが、七海としてはそんな一方的な指図を承服できるはずがない。

「嫌だ、武蔵を殺さなきゃ帰らない」

「拳銃がないのにどうやって殺すんだ？」

「それは……あ、じゃあ包丁貸してよ」

「自分を殺すための道具を誰が貸すかよ」

「……………」

当然だ。自分で探そうにも簡単に探させてくれるとは思えない。冷静に考えるとやはり不可能ではないかという気がしてきた。だからといって、このまま何もせず引き下がるなんて絶対にしたくない。

「いったん帰った方がいいんじゃないか？」

「帰ったら二度と会えないかもしれないだろ」

「俺は逃げないけどな」

「でも僕はここがどこかもわからないんだぞ」

「ああ……」

彼は大きく身を乗り出してテーブルの隅に置いてあったメモ帳を取ると、さらさらと何かを書いてちぎり七海に差し出した。

「俺の携帯番号と住所」

その紙切れには、確かに電話番号と住所らしきものが書いてあった。

「一応、秘密にしてるから誰にも教えるなよ。ただな、ここに来るには山を歩かないといけなし、住所があってもたどり着くのは難しい。用があるときは電話してくれれば迎えに行く」

「……わかった」

逃げるんじゃない、戦略的撤退だ。七海は自分自身にそう言い聞かせて納得させる。いまここで当てもないのに居座るより、態勢を整えて出直した方がいいだろう。連絡先さえわかればいつでも来られるのだから。

「でも送ってくれなくていい。自分で帰る」

「この辺じゃタクシーも捕まらないぞ？」

「……………」

そういえば、ちらりと見た感じではずいぶん山の方で、周辺に住宅などは見当たらなかった。七海は奥歯を噛みしめてうつむき、テーブルの上でぎゅっとキャップを握りしめる。

「家を知られたくないなら、近くの駅で降りしてやるから、な？」

他意のなさそうな優しい口調。

そこまで配慮してくれるのなら頼ってもいいかもしれない。というかひとりで帰れないのなら頼らざるを得ない。不本意だという気持ちをあらわにしながらこくりと頷き、付言する。

「でもトランクに押し込まれるのは嫌だからな」

「安心しろ、そもそもトランクなんてないから」

「えっ？」

七海がきょとんとすると、彼は思わせぶりに口の端を上げて目を細めた。

緑の生い茂る木々のすきまから木漏れ日が落ちている。無数の細い光が降りそそぐ様はとても幻想的だ。昼下がりの陽気の心地よさと、澄んだ空気のさわやかさに、七海は張りつめた気持ちが風いでいくのを感じた。

山小屋を出て連れてこられたのは大型バイクの前だった。それを目にして、ようやくトランクがないという彼の言葉を理解した。

「これをかぶれ」

武蔵はそう言ってヘルメットをひとつ投げてよこす。彼自身がかぶるのを見て、七海も素直にキャップを脱いでかぶった。武蔵のはフルフェイスで七海のはハーフタイプだ。子供用なのか七海の頭にちょうどいいサイズである。

「乗れるか？」

「バカにするな」

すでにバイクに跨がっている武蔵の服を掴み、ステップに足をかけ、不格好ながらもどうにか後部座席に跨がった。武蔵は七海の手を取って自分の腰にまわさせる。七海は自然と広い背中に寄りかかることになり、その体温を感じてドキリとした。

「しっかり掴まってるよ」

「……今度は絶対に殺すから」

「ああ、待ってる」

本気にしていないのか、武蔵は軽く応じてエンジンをかけた。

ボン——小さくない音と振動が体に伝わってくる。そのときすこし車体が傾いてずり落ちそうになり、あわてて彼の腰にまわした手にぎゅっと力をこめる。行くぞという声が聞こえて頷くと、二人を乗せたバイクはゆっくりと山道を走り出した。

第7話 積み重なる疑惑

「おかえりー」

ダイニングテーブルに教科書や参考書を広げて勉強していた七海は、玄関の開く音が聞こえて拓海がリビングに入ってくると、待ち構えていたように明るい笑顔を向けて声をかけた。

ああ、と彼は若干の疲れをにじませて応じると、コンビニの袋をテーブルの端に置いて自室に向かい、ビジネスバッグだけを置いてすぐに戻ってきた。いつもと何ら変わりのない彼の様子にひそかに安堵する。

あのあと武蔵には最寄り駅からふたつ手前の駅まで送ってもらい、そこから電車に乗って帰った。家に着いたのは日が沈みかけるころである。後をつけられていないか何度も周囲を確認したが、そういう気配はなかったので大丈夫だろう。

できれば、父親の敵に会ったことは内緒にしたい。

黙っていれば、拓海は外出したことさえ気付かないはずだ。ましてどこで誰と会ったかなどわかりようがない。それでも尋ねられたときのために一応の筋書きは用意した。まるきりの嘘ではないというのがミソである。

心配なのは愛用の拳銃をとられてしまったことだ。さすがにこればかりは説得力のある言い訳が思いつかない。ただ、拳銃はたくさんあるので、ひとつくらいなくなっても気付かないかもしれない。それに望みをかけるしかないだろう。

七海が勉強道具を片付けているあいだに、拓海は向かいに座り、コンビニの袋から大きめの容器をふたつ取り出した。そのうちのひとつを七海に手渡す。大好物のミートソーススパゲティだ。熱いというほどではないがまだ十分にあたたかい。

「どうした？ いつもなら大喜びするのに」

「喜んでるよ！」

拓海に尋ねられ、七海は慌ててはしゃいでみせる。

いつもは受け取るなり目を輝かせて大喜びするのだが、今日は武蔵の家で食べたスパゲティのことをふと思い出し、ぼんやりしてしまった。不審に思われて追及なんかされたらまずい。いつもどおりにしなければとあらためて気を引きしめる。

拓海はジャケットを脱いで椅子の背もたれにかけ、ネクタイを緩めながら、七海がパッケージのビニールを破いて蓋を開けるのをじっと見ていた。まるで不審な様子がないかを探るかのよう。しかし七海はあえて無邪気に気付かないふりをした。

「いただきます！」

使い捨てのプラスチックのフォークで、たっぷりソースを絡めたスパゲティを口に運ぶ。七海の大好物はいつもと変わらない味でおいしかった。けれど——武蔵の作ったものの方が何倍もおいしいと思ってしまった。

拓海の前でこんなことを考えているとまた訝られてしまう。わかってはいるが、いまさら意識

しないようにするのもなかなか難しい。せめて表情には出ないように、いつも以上にはしゃぎながら笑顔を作ってごまかした。

「七海、勉強はちゃんとしているのか？」

「うん、してるよ」

食事を終えてペットボトルのお茶を飲んでいると、拓海が話を振ってきた。正直、今日は夕方まで外出していたので時間はだいぶ少ないが、一応勉強したので嘘ではない。そう思いつつも内心すこし気まずく感じていた。

そんな七海を、拓海は片手でペットボトルを持ったままじっと見つめる。

「今度、抜き打ちテストをするからな」

「抜き打ちテスト？」

「点数が悪ければ射撃場出入り禁止だ」

「そんなぁ！」

七海はガタリと立ち上がり、テーブルに両手をついて勢いよく前のめりになる。

「あの男を殺さなきゃいけないのに！」

「だったら、ちゃんと勉強すればいい」

「勉強してても点数悪いことあるよ！」

「結果が出なければ意味がない」

返す言葉を見つけられず、七海はギリと奥歯を噛みしめてうつむいた。テーブルについた自分の小さな手を見つめながら、爪が食い込むくらいに握っていく。

拓海は静かにペットボトルを置いた。

「七海、おまえに勉強させるのは生きていくために必要だからだ。決して意地悪しているわけじゃない。わかるな？」

「うん……」

いつも言われているので、彼がそういう考えだということはわかっている。そして七海も彼が言うならそうなのだろうと納得している。だから気が進まないなりに勉強してきたつもりだ。

しかし、今回だけは射撃場を使わせないための方便ではないだろうか。だとしたら抜き打ちテストも卑怯なくらい難しいかもしれない。あの手この手で復讐どころではない状況に追いやられそうな気がする。

こうなったら、テストの前に終わらせるしかない――。

あしたにでもさっそく武蔵に連絡をとって会いに行こう。もちろん拳銃を持って。使い慣れたものは橘家で奪われてしまったが、同じ型の拳銃はまだあったはずだ。使用感がすこし違うかもしれないが何とかなるだろう。

「どうした？」

「ん、テスト頑張らなきゃって思っただけ」

怪訝な拓海の声に、七海はとっさにニコッと笑ってそうごまかした。

「おやすみなさい」

シャワーを浴びて歯磨きをしてリビングに戻ってきた七海は、ダイニングテーブルでコーヒーを飲んでいる拓海に軽く挨拶をして、自室に向かう。

「七海」

その声に足を止めて振り向くと、拓海が無表情でブルゾンとキャップを差し出してきた。帰ってすぐに脱いでラグの上に放置していたものだ。

「脱ぎ散らかすなと言っているだろう」

「ごめんなさい」

トトトと小走りで受け取りに行ったが、彼は手を放さず、じっと七海の目を見つめて尋ねる。

「今日、どこかに出かけたのか？」

「うん、二駅向こうのコンビニまで」

「何か買うものがあったのか？」

「どら焼きが食べたくなっただけ」

「そうか」

七海はどきどきして手に汗がにじむのを感じたが、ブルゾンとキャップから彼の手が放れると、信じてもらえたのだとひそかに安堵の息をついた。念のため嘘の筋書きを考えておいて良かったと心から思う。

筋書きは自然なものだったと自信を持っている。近所の店には行かないよう拓海に言いつけられているので、いつも何駅か離れたところまで出かけているのだ。今日は武蔵にバイクでその駅まで送ってもらったあと、実際にコンビニでどら焼きを買って帰ったのだから矛盾もない。

「じゃあ、おやすみなさい」

「ああ、おやすみ」

七海は受け取ったブルゾンとキャップを抱きかかえ、自室へ駆けていった。

煌々とした蛍光灯の下。

ひとりになった拓海は握っていた左手をゆっくりと広げた。手のひらにはボタンよりやや大きいくらいの黒い物体が載っている。七海の脱ぎっぱなしのブルゾンを手にとったとき、偶然内ポケットに貼り付けられたそれに気付いて取っておいたのだ。

拓海はそれが何なのかを知っている。

無表情のまま、まだ熱い飲みかけのコーヒーの中にぽちゃんと放り込む。静かに揺らぎながら沈んでいく黒い影を見下ろすと、わずかに眉をひそめ、テーブルに置いた手をゆっくりと握りしめていった。

「ん……??」

七海はぼんやりと目を覚ましてすぐに違和感を覚えた。

怪訝に思いながら眠い目をこすって上体を起こし、そこではっきりと異変に気付く。自分のものとは違うふかふかの布団、広いベッド、格調高そうな家具、見たこともない綺麗な部屋——パジャマこそいつものものだが、ここがどこなのか見当もつかない。確か、拓海におやすみなさいと挨拶をして、自分の部屋の自分の布団で寝たはずなのに。

「七海……起きたのか……？」

すぐ隣から眠そうな声が聞こえてビクリとする。振り向くと、Tシャツ一枚の拓海が体を起こすところだった。この広いベッドで一緒に寝ていたらしい。

「ここどこ？ どういうこと？」

「都内のホテルだ。事情があってしばらくここで暮らさなければならない。きのう七海が寝たあとで急に決まってな。起こすのも可哀想でそのまま連れてきてしまった。すまない」

ところどころ濁されたようなはっきりとしない説明に、七海は眉をひそめる。

「事情って？」

「すまないが話せない」

「仕事関係ってこと？」

「……まあな」

仕事に関する事柄はたとえ家族であっても話せない。拓海がそういう職業についていることは心得ている。どんな事情なのかわからないと落ち着かないが、いくら尋ねても無駄なのであきらめるしかないと思う。

「わかった。拓海も一緒なんだよね？」

「ああ、いつもどおり仕事には行くが」

「そっか……」

知らない場所にひとり残される心細さに思わずしょんぼりするが、拓海は気付いているのかいないのか無表情のまま淡々と畳みかける。

「七海はこの客室から出ないでくれ」

「えっ、なんで？」

「詳しくは言えないが、七海のためだ」

これもさきほどの事情に関係しているのだろうか。ドラマなどでは危険な仕事をしていると家族まで狙われたりするが、そういうことなのかなと当たりをつける。

「じゃあ、ごはんはどうするの？」

「あれかルームサービスだな」

拓海が『あれ』と言って指さしたテーブルの上には、クッキーやポテトチップス、バームクーヘンなど日持ちのする菓子類が山盛りになっていた。自宅にあった買い置きをそのまま持ってきたのだろう。もともとそのほとんどが七海のおやつか昼食用である。

「ルームサービスはわかるか？」

「ううん」

拓海はサイドテーブルの電話とファイルを取り、七海に見せながら説明する。フロントに電話をしてメニューを頼むと持ってきてくれるらしい。夕食も、拓海の帰りが遅いときは自分でルームサービスを頼めと言われた。

「勉強道具はその紙袋に入ってるから、ちゃんと勉強しろよ」

「うん」

拓海は抜かりなかった。勉強があまり好きではないので内心ひそかに落胆する。そういえば抜き打ちテストの前に武蔵に会いに行こうと思っていたが、ここから出られないのでは無理だ。射撃練習もできない。

まさか、そのために——？

橘の住所を知っていたのに隠していたり、射撃場を出入り禁止にしようとしたり、最近の拓海は復讐を阻もうとしているようにしか思えなかった。同様に、ホテルに連れてきたのも強制的に復讐から遠ざけるためではないだろうか。

一瞬、そんな疑念が頭をかすめてドキリとしたが、いくらなんでも考えすぎだと思い直す。ホテル暮らしなどいつまでも続けるわけにはいかないのだから、一時しのぎにしかならない。そんなことくらい頭のいい拓海ならわかるはずだ。

「いつまでここで暮らさなきゃいけないの？」

「まだわからない。長引かせないつもりだが」

「うん」

長引かせないということであれば、やはり仕事絡みの事情と考えていいだろう。

武蔵に会いに行くのも、射撃練習も、数日のおあずけですむのなら我慢できる。もどかしいが下手に騒ぎ立てても怪しまれるだけだ。自宅に戻れる日がくるのをおとなしく待っていよう——七海はひそかにそう決めて、ひとり小さく頷いた。

朝食は、拓海がルームサービスを頼んだ。

コンチネンタルブレックファストという聞いたこともないメニューだが、実際に運ばれてきた品々はわりと一般的なものだった。ただ、数が多い。トーストとオレンジジュースの他に、クロワッサンなどの変わったパンも数種あり、またヨーグルトやフルーツ盛り合わせもついている。食後にはホットチョコレートまで出てきた。普段トーストとオレンジジュースだけの七海にとっては、かなり豪勢な朝食だった。

朝食を終えると、拓海はシャワーを浴びて仕事に出かける準備をし、扉付近でスリッパから革靴に履き替える。その後ろで、七海はいつものように履き終えるのを待ち、預かっていたビジネスバッグを手渡した。

「行ってらっしゃい、パパ」

他に聞いている人はいないが、自宅ではないので念のためそう呼んだ方がいいと判断した。彼

も賛同してくれたのか軽く頷き、行ってくると控えめな声で言って客室をあとにした。

「わあ……」

ひとりになると、七海は客室の中を見てまわった。

寝室、リビングルーム、バスルーム、お手洗いと部屋が分かれていて、そのどれもが自宅よりはるかに広がった。家具も内装もやたらと華やかではあるが、調和がとれているためかうるさくなく上品さが感じられる。まるで豪邸に迷い込んでしまったかのようで落ち着かない。

リビングルームには、朝食時に使ったダイニングテーブルのほかに、社長室にありそうな重厚感のある執務机もあった。残念ながら勉強するのに不便はなさそうだ。包み込まれるようなやわらかいソファもあるので、疲れたときはここでのんびりお菓子を食べるのもいいだろう。

バスルームはお風呂とは思えないほど明るく開放的な雰囲気だった。外に面した側がガラス窓になっているためにそう感じるのだろう。洗面台には歯ブラシやヘアブラシ、カミソリ、化粧品などたくさんの小物が用意されている。備え付けのドライヤーは家のものよりずっと立派だった。

タオルは大きなものから小さなものまで棚に山積みになっていた。どれも厚みがあってふかふかで手触りがとてもやわらかい。薄っぺらくごわごわしたものしか知らなかった七海は、そのタオルに顔をうずめてひとりではしゃいでいた。

「すごっ！」

窓の外に目を向けると、大都会の壮観な景色がはるか遠くまで広がっていた。驚くくらい地上が遠くてかなりの高層階であることが窺える。外を見ているうちに新鮮な空気に当たりたくなかったが、窓には鍵どころか取っ手もないため開け方がわからず、ひとまずはあきらめるしかなかった。

寝室の隅にはふたつの古びた紙袋が置いてあった。大きな紙袋には七海の着替えが山盛りに詰められていたので、その中からいつものジャージに着替える。隣の小さな紙袋には教科書などの勉強用具一式が入っていたが、一目見てそっと紙袋の口を閉じた。現実から逃げるようにそそくさと寝室をあとにする。

「あ、そっか」

射撃練習は無理でも体力作りならここでもできる。鏡に映ったジャージ姿の自分を見てそのことに気づき、七海はすぐさま広いリビングルームでランニングを始めた。下は絨毯敷きなので素足でもまったく問題はない。ランニングのあとはいつものトレーニングメニューをこなしていく。

やっと見つけたんだ——。

絶対に父親の敵を殺して復讐を果たす。拳銃もオルゴールもイルカのぬいぐるみも手元にないが、そのくらいで意欲が薄らぐほどこれまでの積み重ねは軽くない。むしろ敵の所在を突き止められたことで、これまでにないくらい気持ちが高揚していた。

その日の夜。

拓海は自宅マンションの扉をそっと開けて、拳銃を片手に中に入る。暗くひっそりとした部屋を、警戒しながらひとつひとつ確認していったが、どうやら誰もひそんではいないようだ。押し入れやクローゼットも調べたので見逃しはないだろう。リビングの蛍光灯をつけてから拳銃をホルスターにしまう。

お世辞にもきれいとはいえない散らかった部屋。自宅を出る前とほとんど変わらないが、微妙に物の位置や向きが違っている。特に入口付近は。かなり慎重に元に戻そうとした努力が窺えるものの、完璧ではない。

やはり侵入者がいた。

脱ぎ散らかしたシャツ、靴下、上着、無造作に散らばった新聞、雑誌——侵入者には単にだらしなだけの部屋に見えていただろうが、すべて拓海が自宅を出る前にあえて置いた物だ。その位置も形状もきっちり記憶していた。

引き出しや押し入れの中にも動かしたあとがあった。やはりきちんと元に戻そうとしたようだが、それでも揃え方など微妙な違いが見てとれる。ただし無くなっている物はなさそうだ。現金にも預金通帳にも手はつけられていない。

単なる窃盗犯ならこのわかりやすい現金を見逃すはずはない。何より、動かしたものを元に戻すなど時間の掛かることをするとは思えない。する理由がない。盗むだけ盗んで早々に退散した方が捕まるリスクは低いはずだ。

拓海の自室と射撃場には入られた形跡がなかった。鍵をかけていたからだろうか。あるいは必要がなかったからだろうか。射撃場への入り口はわかりにくいので、侵入者が見つけられなかった可能性もある。

相手が誰なのか、目的は何なのか。それがわかるまで警戒が必要だ。

きのう、七海のブルゾンにGPS発信機が付けられていた。コンビニに行ったと話していたが、様子がおかしかったのもそれだけではない気がする。誰かと接触してそのとき発信機を付けられたのではないだろうか。

七海が拓海を売るような真似をしたとは考えていない。ただ、本当に隠しごとをしているとすれば何かしらの理由があるはずだ。やみくもに問いただしたところで素直に話すとは限らない。まずは慎重に調べて手がかりだけでも掴む必要がある。

拓海を狙っているのなら、子供という弱点を利用してくるのは当然と言える。こういう懸念があったので、なるべく七海と一緒に外を歩かないようにしていたのだが、その気になれば同居人がいることくらい突き止められるだろう。

いや、拓海ではなく七海本人が目当てということもありうる。外界との接点がほとんどないうえ存在自体が秘匿されている彼女を狙うとすれば、犯人はあの男以外に考えられないが——。

まさか、本当に？

その場に立ちつくしたまま深く眉根を寄せて考え込む。そして戸棚のオルゴールに目を向けると、誘われるように手を伸ばして木彫りの蓋を開けた。鈍く光る黄金色のドラムがゆっくりとまわり、せつなくも胸を高鳴らせる美しい旋律を奏で始める。

きっと、永遠に変わりはない。

飽きるほど聴いたはずのその音色にじっと耳を傾ける。やがて最後の一音をはじいてオルゴールのドラムが止まり、再び静寂が訪れると、奥歯を噛みしめたままそっと震える瞼を下ろした。

第9話 墓石に刻まれた名前

七海はゆっくりとふすまに手をかけて開いていく。

その向こうに何があるか知っているので止めようとするが、体は言うことをきいてくれない。またしてもあの光景を見なければいけないなんて。イルカのぬいぐるみを掴む手に縋るように力をこめる。

徐々に明るく開かれていく視界に映るものは、眩いばかりの月明かりに照らされた血溜まりと、その中で血まみれになって横たわる父親と、傍らでべっとりと手を血に染めて立ちつくす男――。

「……だれ？」

そう尋ねるものの、いまとなってはもう誰だか知っている。

踏み出した足は血溜まりをぬるりと踏みつけた。まだほんのすこしあたたかい気がする。きっと血が流れてからそれほど時間は経っていない。思考は冷静に働いても、その恐ろしく現実味のある感触に否応なく感情は揺さぶられる。

「おとうさん？」

呼びかけても反応はない。指先も脛も唇もピクリとも動かなかったので、このときにはすでに事切れていたと考えるのが自然だろう。漂う生臭さは単に血の匂いというだけではなかったのかもしれない。

正面では鮮やかな青色の瞳がじっとこちらを見つめている。その瞳の色も顔立ちもまぎれもなく武蔵そのものだ。彼は血溜まりを踏みしめながら近づいてくると、赤黒い血に染まった手のひらを七海の目の前に伸ばし――。

「うわあああああ！！」

七海は絶叫して飛び起きた。頭から、顔から、体から、全身が汗ぐっしょりになっている。心臓はドクドクと痛いくらいに収縮し、体中が脈打っているかのように感じる。自分の血がめぐる音もうるさいくらいに聞こえた。

「どうした、七海？」

「あ……」

隣の拓海が体を起こしてじっと覗き込んできた。暗がりでは表情までははっきりと見えないが、そのまなざしはどことなく心配そうに見える。七海はすこし落ち着きを取り戻した。

「平気、夢を見ただけ」

あの日から幾度となく繰り返し見ている夢。

そのうち夢の中で夢だと認識できるまでになった。だから悲しかったりくやしかったりして涙ぐむことはあるが、こんなふうに飛び起きることはなくなっていた。なのに今日はどうしてこうなってしまったのか。

理由はわかっている。夢の最後がいつもと違って初めて見るものだったからだ。いつもは武蔵がじっとこちらを見ているところで終わる。実際の記憶もなぜかそこでぷつぷつと途切れていた

。

しかし、今日の夢には続きがあった。

それが現実にあったことなのか単なる夢なのかはわからない。もし現実なら、あのとき武蔵に何かされていたということになるが、いくら何でもそんな重大なことを忘れていたとは思えない。やはりただの夢でしかないのだろうか。

あっ——。

ふいに、ふわりと包み込むように抱きしめられて現実に引き戻された。衣服越しに伝わってくる優しいぬくもりに、こわばった心がほどけていくのを感じる。幼いころに悪夢でうなされたときもよくこうしてくれていた。

「まだ朝まで時間がある。寝よう」

「うん」

拓海に促されて再びもぞもぞとベッドに横になる。横になってからも彼はゆるく抱いてくれていた。七海の目にじわりと熱い涙がにじみ、ぐすっと小さくすすり上げてつぶやく。

「あいつ、やっぱり殺さなきゃ」

「ああ、殺そう」

なだめるように背中に大きな手が置かれる。そのあたたかさに安心し、甘えるように彼の胸元に顔を付けて眠りにつく。

「すまない……」

頭上にぽつりと落とされたその言葉は、七海の意識には届かなかった。

「ねえ、まだ帰れないの？」

「もうすこし待ってくれ」

七海はコンチネンタルブレックファストを食べながら、向かいの拓海に問いかけるが、彼の返事はいつもと同じように素気ないものだった。むうっと唇をとがらせながら眉を寄せて睨んでも、彼はまったく意に介さない。

ホテル暮らしを始めて一週間。

当初は数日程度だと思っていたのにいまだに帰れていない。ホテルの食事はとてもおいしいし、客室係が隅々まで掃除をしてくれるし、タオルもシーツも毎日替えてくれるし、自宅よりはるかに気持ちよく過ごせるが、七海には大切な目的がある。いつまでもこんなところでのんびりしているわけにはいかないのだ。

やはり復讐から遠ざけるためにここに閉じ込めているのではないか。そんな疑念が頭をもたげる。橘の住所についてもまだ調べがつかないと嘘を言い続けている。拓海は恩人だし感謝しているが、彼が何を考えているのかわからなくてもやもやする。その不安定な気持ちと焦りがあんな夢を見させたのかもしれない。

「……………」

七海は無言でクロワッサンをもぐもぐとかじりながら、思案をめぐらせた。

「いってらっしゃい、パパ」

「ああ」

七海はいつもどおりビジネスバッグを手渡し、仕事に向かう拓海をひらひらと手を振りながら見送った。その明るい笑顔の下に、彼には絶対に見せられない本心と決意を押し隠して。

ごめん、言いつけ破っちゃう——。

拓海の足音が遠ざかり聞こえなくなったのを扉越しに確認すると、さっそく出かける準備を始めた。Tシャツとデニムのショートパンツに着替え、ブルゾンを羽織り、キャップをかぶる。

客室を出るなど言われている以上、拓海から軍資金をもらうわけにはいかなかったが、幸いあちこちのポケットに現金が入ったままになっていた。小銭だけでなく千円札や五千円札も何枚かある。

しかし、残念なことに靴はどこを探しても見つからなかった。七海が寝ているあいだにそのまま連れてきたので忘れていたのだろう。あるいは、ここに閉じ込めるためにあえて持ってこなかった可能性もある。

だからといってあきらめるつもりはない。スリッパのまま、やたらと天井の高い豪華なロビーを抜けて堂々と外に出る。ときどきホテルの従業員や通行人などが気付いてチラチラと見ていたが、誰も咎めはしなかった。

武器、どうしようかな——。

本当は自宅に戻って拳銃を取ってくるつもりだったが、鍵がなかったのだ。靴と同じく自宅に置いてきたのだろうと思う。拳銃などそこらへんで売っているわけがないし、売っていたとしても手持ちで足りるはずがない。

代わりに近くの百貨店で丈夫そうな果物ナイフを買った。これでも急所を狙えば十分に殺せるのではないかと考えて。ただスリッパ履きで襲いかかるのは難しいと判断し、安いスニーカーを買って履き替えた。

それから公衆電話を探しまわり、駅構内の隅にひっそりと置かれた緑色のそれを見つけると、手持ちの十円玉をすべて投入して武蔵に電話をかける。携帯番号を書いたメモは手元にはないが、もらったときに語呂合わせで記憶していた。

『はい』

数回の呼び出し音のあと、男性の声で短い応答があった。武蔵の声に似ているが確信は持てない。

「えっと……武蔵？」

『その声は七海か？』

「うん」

七海がほっとしたのと同時に、電話の向こうの彼も安堵の息をついているようだった。

『連絡がないから心配してたぞ』

「外に出るなって言われてたから」

『……いまは大丈夫なのか？』

「うん」

もし拓海の仕事関係で狙われているのなら危険かもしれないし、無断でホテルを抜け出してきたことは大丈夫といえないが、そんなことまで話す必要はないだろう。軽く受け流して本題に入る。

「あのさ、一緒に行きたいところがあるんだけど」

『ん？ 父親の敵を取るんじゃないのか？』

「その前にそこで話がしたいんだ」

以前は父親の敵を殺すことしか考えていなかった。けれどその父親の敵である武蔵を知り、父親に良くしてもらったという話を聞いてからは、謝罪させたい、後悔させたい、罪悪感に苛まれてほしいと思うようになった。ただ殺すだけでは気がすまない。

「遠いのか？」

「港区の青山なんだけど、わかる？」

『ああ、じゃあバイクで迎えに行く』

いまどこにいるのかと問われて駅名を告げると、東口で待つように言われた。

二時間近くかかるらしいが、特にすることもなし下手をして道に迷っても困るので、防護柵に腰掛けて行き交う人々を眺めながらぼんやりと待つ。空はうっすらと灰白色に曇っている。ふと今日の天気予報は曇りのち雨だったことを思い出し、急に心配になった。

「悪い、待たせたな」

空はだいぶ雲が厚くなってきているが、まだ雨は降っていない。

武蔵はまっすぐ七海の前にバイクで乗りつけ、フルフェイスのシールドを開けてそう言うと、子供用のヘルメットを投げてよこした。七海はキャップを脱いでポケットに押し込み、代わりにそのヘルメットをかぶると、彼の後ろに跨がって腰に腕をまわす。広い背中はこのまえと同じようにあたたかかった。

「青山方面に向かえばいいんだな？」

「うん、近くなったら道案内する」

武蔵は多くを訊かずに七海の望むままバイクを走らせる。目的の場所までそれほど時間はかからなかった。バイクを駐車場に止めてそこからは徒歩で向かう。七海は歩きながらキャップを取り出してかぶった。

武蔵の表情は硬かった。

駐車場にも途中の道にも看板が出ていたので、どこに向かっているのか、そこに何があるのか、おおよそのことは察しているに違いない。それでも何も言わずに七海とともに歩いている。

二人並ぶのが難しいくらいの細い階段を上りきると、小高い丘の上に出た。開けた視界の先には様々な墓標が壮観なまでに並び、遠くにはうっすらと霞んだ海も見え、ほんのすこし潮の匂いが漂っているように感じる。

七海は整然と並んだ墓のあいだを迷いなく進んでいった。そして、ひとつの墓石の前で足を止めてそれと向かい合う。キャップの下で長めの前髪が風に吹かれて揺れた。武蔵も隣に並んで同じ墓石を見つめていたが、そこに刻まれた名前に気付くとハッと目を見開いた。

「七海って、えっ、おまえ……？」

「そうだ、お父さんと僕のお墓だ」

「どういうことだ？」

俊輔の墓であることはここに来るまでに察していただろうが、七海の名前まで刻まれているとは思わなかったのだろう。ひどく混乱している様子が見てとれる。それを横目で見ながら、七海は体の横でグッとこぶしを握りしめていく。

「あのときお父さんを殺した犯人をはっきりと目撃したから、僕も殺されるかもしれないって、お父さんの親友が僕を守るために死んだことにしてくれた。それからずっと学校にも行かないで隠れて暮らしてきたんだ」

その声はいつしか涙まじりになっていた。

隠れて暮らすといっても、家の中にいるかぎりには自由に過ごすことができたし、買い物に出ることも条件付きで許可されていた。父親の敵を取るという目的に向かって、拓海の援助を受けつつ充実した生活を送ってきたと思う。

それでも決して寂しくなかったわけではない。拓海が仕事に行っているあいだはひとりぼっちだ。学校に通うという当たり前のことが許されず、友達を作ることもできない。何より大好きな父親はもうどこにもいない。

ザッ、とコンクリートの地面を蹴って武蔵と間合いを取ると、ショートパンツの背中側に挟んでおいた果物ナイフを取って鞘を抜き去り、あらわになった刃先をまっすぐ腕を伸ばして彼に向ける。

「おまえはお父さんを殺した！　そして僕も殺した！！」

そう叫ぶと、堪えていた涙が大粒の雫となり頬を伝い落ちた。一瞬、視界が霞んだが正面の彼からは決して目を離さない。ナイフを持つ手が震え出し、それを抑えようともう片方の手を添えてしっかりと両手で握る。

武蔵は顔を曇らせながらも逃げようとせず、じっと七海を見据えた。

「七海、おまえの父親を刺したのは俺じゃない」

「いつまでそうやって言い逃れるつもりなんだ！！」

「事実だ。それだけは信じてくれ」

「お父さんの前で無実だって胸張って言えるか？！」

そう問い詰めると、彼はひどく気まずそうな面持ちになり、困惑を露わにしながら視線を落とした。

「ある意味、俺が殺したようなものかもしれないが」

「ある意味って何だよ！！」

七海の中でブチッと何かが切れた。

「要するにおまえが殺したってことだろ！　なんで素直に認めないんだよ！　反省させたかったけどもういい殺してやる！　僕のこの手で殺さなきゃいけないんだ！　おまえを殺さないかぎり終わらないんだ！」

ワアアアアアッ！！！！

ぶわっと涙をあふれさせて泣きじゃくりながら、ナイフを振り上げて大きく踏み込み、彼の心臓めがけてあらん限りの力で振り下ろす。

ズッ——。

鈍い感触がしたが、すんでのところ胸には刺さっていない。彼が素手のまま刃を掴んで止めたのだ。曇りのない新品の刃が手のひらに深く食い込み、赤い鮮血が止めどなく滴り落ちている。

七海はハッと我にかえり、はじかれたようにナイフから手を放して後ずさった。三步もいかないうちに小石に足を取られてバランスを崩し、コンクリートに尻もちをつく。

カラン、と正面に血まみれの果物ナイフが落ちた。

ごくりと唾を飲み、座りこんだままおそるおそる視線を上げていく。そこには手を真っ赤に染めた武蔵がゆらりと立っていた。薄曇りの中、青の瞳が不自然なほど鮮やかに色づき異様な輝きを放っている。まるであの冬の日のように。

ゾクリと背筋が震えて総毛立つ。

逃げたいのにまるで腰を抜かしたように動けない。開いた足のあいだにぼたぼたと血が滴り、ほのかに血なまぐさい匂いを感じると同時に、赤くぬらりと濡れた手が目の前に伸びてきて——

「ひっ……！」

七海は喉を引きつけて意識を手放した。

七海はぼんやりと目を開いた。

そこは常夜灯のみのともる薄暗い部屋だった。それでも見覚えのない部屋だということはわかる。拓海と暮らしているマンションでもなければ、拓海と泊まっていたホテルの客室でもない。

どうやら七海はベッドに寝かされているようだ。もぞりと体を起こして一通り部屋を見まわしてみる。ベッドの他にはソファとローテーブルくらいしかない。そのローテーブルには七海が着ていたブルゾンとキャップが置かれていた。

あっ——。

それを見てようやく何があったのかを思い出した。武蔵を父親の墓に連れて行き、果物ナイフで刺し殺そうとしたが、逆にそのナイフを奪われてしまった。そして血濡れの真っ赤な手で迫られて——それからの記憶がない。

布団をまくって自分の体を確認する。衣服や肌のところどころに血がついているが、どこも怪我はしていないようだ。脚がついているので幽霊というわけでもない。おそらく血は武蔵のものではないかと思う。

ベッドから降りると靴下のまま扉の方へ歩いていき、ドアノブに手をかける。そのとき扉の向こうからうっすらと声が聞こえてきた。音を立てないようそっと顔を寄せて耳をすます。

「それでは、お大事にしてください」

「ありがとうございました」

ここではないどこかの扉がパタンと閉まり、足音が遠ざかる。

ひとつは聞き覚えのない声だが、話の内容からすると医者ではないかと思う。礼を述べたのは橘家にいた遥とかいう若い男のようだ。ふう、と小さく溜息をつくのが聞こえた。

「あんまりバカなことしないでよね」

「ッ!!! おい、怪我してんだぞ!」

「自業自得」

遥と話をしているのは武蔵だ。七海のナイフを掴んで手のひらが切れたので、医者を呼んで治療してもらったのだろう。思ったよりも元気そうで、残念なような安心したような複雑な気持ちになる。

「なんでわざわざ素手でナイフの刃を掴んだわけ? 相手が手練れならともかくただの子供だよ? 攻撃をよけてナイフを叩き落とすとか、鳩尾に一撃入れて気絶させるとか、背後にまわって羽交い締めにするとか、武蔵なら他にいくらでもやりようがあったよね」

「……………」

沈黙が落ち、七海もそのまま体をこわばらせて息を詰めた。すこしでも物音を立てれば盗み聞きしていることが知られてしまう。息苦しくなってきたころ、ギュッとかすかな音がして遥の声が続いた。

「まさか、殺されてあげようとか考えてたわけじゃないよね?」

「そうははっきりと思ったわけじゃないが……すこし迷った」

「バカじゃない？ そんなので罪滅ぼしになると思ったわけ？」

「自己満足だってことはわかってる」

呆れたような遥の声と、疲れたような武蔵の声。

刺してはいないが自分が殺したようなもの——墓の前で聞いた武蔵の言い分を思い出す。やはり俊輔を殺したという自覚は持っているのだろう。だが、刺していないという話は信じていいのかわからない。

「だいたい武蔵のせいだなんて確証はないよね」

「でもあのタイミングじゃ、他に考えられない」

武蔵はそう反論して吐息を落とす。

「俺を逃がした直後だぜ。組織なのか個人なのかはわからないが、公安の人間が犯人と考えるのが自然だろう。国家に対する裏切り行為になるなら、秘密裏に始末されたとしても不思議じゃない」

七海は眉を寄せる。

武蔵を逃がしたから国家に対する裏切り行為？ 始末された？ 急に話が難しくなり頭がこんがらかってきた。武蔵は悪いことをして警察に捕まっていたのだろうか。それを警察に勤めていた父親が逃がしたのだろうか。

七海の知るかぎり、父親は決して悪事に荷担するような人間ではない。犯罪者の脱走に手を貸すだなんて絶対にありえない。だから、武蔵が勝手なことを言っているだけで事実ではないはずだ。

「あの子のこと、すこし調べただけど」

「……何でそんな勝手なことするんだよ」

「橘にも無関係じゃないからね」

遥が口にした『あの子』とはおそらく七海のことだろう。扉に耳を寄せたまま、ドクドクと鼓動が速くなるのを感じつつ息をひそめる。

「あの子がいま一緒に暮らしてるのは公安の人だよ」

「何だって？」

「それも国家機密に関わる仕事をしてるみたいだね」

「そうか、そいつが俊輔を殺したんだとしたら……」

「拓海はそんなことしない！！」

頭の血管がぶちぎれそうなほどの激情に駆られて、気付けばバタンと扉を叩きつけるようにして飛び出していた。革張りのソファに並んで座っていたふたりを全力で睨み、こぶしを握り、喉に痛みを感じながらも声のかぎり訴える。

「拓海はお父さんのたったひとりの親友だった！ お父さんが殺されてひとりになった僕を引き取って、犯人から守ってくれた！ わざわざ僕を死んだことにまでしてくれて！」

「それがおかしいんだよ」

遥は冷やかに七海を一瞥し、ゆったりと背もたれに身を預けながら腕を組む。

「たとえば武蔵が犯人だとして、鉢合わせたその場で君の口を封じるならわかるけど、いったん逃げたあとで君の命を狙うのは無意味だ。捕まる危険を冒してまですることじゃない。普通に考えれば、犯人の目撃情報はすでに警察に話しているだろうからね」

そう言われれば――。

あのあと警察で犯人のことを聞かれた覚えがある。何を話したかは記憶にないが、聞かれるまま素直に答えたのではないだろうか。当然、犯人の容姿についても話しているはずだ。

「そのくらい公安の人間ならわからないはずがないのに、どうして君を死んだことにする必要があったんだろうね。人ひとりを死んだことにするって相当大変なことだよ。おかしいと思わない？」

「それは、拓海が慎重だから……」

「その慎重な人が、当時と同じマンションに君を住まわせておくのはどういう了見？ 本当に狙われてるなら引っ越した方がいいと思わない？ いくら戸籍を改竄して死亡したことにして、同じマンションに出入りしていたら簡単に見つけられるよ」

「そんなの……わからないし……」

次第に声が小さくなる。

事件当時、七海たち親子は拓海と同じマンションに住んでいた。七海たちは二階で拓海は一階である。つまり、部屋は二階から一階に移ったものの、事件後も同じマンションに住み続けているのだ。

彼がどのように考えているのかは知らない。彼なりの考えがあって同じマンションに住み続けたのかもしれないし、あるいは七海と同じように疑問を感じていなかっただけかもしれない。

けれど――。

最近、拓海が復讐を妨害するような行動をとっていたことを思い出す。七海が誤解しているだけかもしれない。でもそうでなかったとしたら。そして七海を引き取ったことに何か別の目的があるのだとしたら。

そんなことはない。

そんなはずはない。

自分の思考を打ち消すようにふるふると首を振る。そもそも父親の敵を取ろうと七海に言ったのは拓海なのだ。銃の扱いだって教えてくれた。偽装のためにそこまで面倒なことをするとは思えない。

「真壁拓海が君のお父さんと同じ仕事をしていたのなら、武蔵とも面識あるかもね」

遥はそう言うところから一枚の写真を取り出した。写っているのは拓海なのだろう。それを無言でぴらりと隣の武蔵に掲げて見せる。

「あ、こいつ俺を捕まえたやつだ」

見た瞬間、彼は迷いなくそう言い切った。

遥は写真をガラスのローテーブルに置き、ずっと七海の方に差し出す。案の定そこには拓海の姿があった。スーツを身につけているので、通勤中か仕事中に隠し撮りされたものと思われる。

「真壁拓海が武蔵を捕まえたということなら、当然、彼は武蔵のことを知っていたはずだけど、

君はそういう話を聞いていた？」

「……………」

拓海は武蔵の似顔絵を見ても知っている素振りはみせなかった。けれど、それは仕事上のことだから言えなかつただけかもしれない。そう、仕事に関することは家族にも話せないと父親も言っていた。何もおかしいことじゃないと必死に自分に言い聞かせる。

そんな七海をじっと見つめながら、遙は言葉を継ぐ。

「真壁拓海は君のお父さんと親友で同僚だったんだよね。それならなおさら気付いたとしてもおかしくないよね。君のお父さんが武蔵を逃がしたことに」

「お父さんが犯罪者を逃がしたりするもんか！」

七海はカッとして言い返した。いくら順序立てて説明されても信じない。そんな頑なな気持ちで遙を睨みつけるが、彼は冷静に受け止めて訂正する。

「武蔵は犯罪者じゃないよ」

「悪いことをしたから捕まったんだろう？」

「この国にとって都合が悪かつただけ」

「都合が悪いつてどういうことだ？」

「存在自体が国家機密みたいなものかな」

「意味がわからないんだけど」

七海が怪訝に眉をひそめると、遙は説明を重ねる。

「小笠原近くの海底の国で、僕たちとは別の進化をたどつたもうひとつの人類つてところ。その詳細についてはまだほとんど把握していないし、脅威でもあるから、扱いについては慎重になっているんだと思う。今のところ存在を公表する気はないみたいだね」

「……………」

何か余計にわからなくなつた気がする。

そもそも本当のことなのだろうか。あまりに現実離れしていてまるで映画か小説のようだ。煙に巻くつもりではないかという考えが頭をよぎつたが、ごまかすのならもうすこし信憑性のある話をするように思う。

「七海」

それまで黙つていた武蔵が重々しく口を開いて顔を上げた。その左手にはまぶしいくらいにまっしろな包帯が巻かれている。ふとナイフを掴んで血まみれになつた手を思い出し、七海はぞわりと身震いした。

「俺はさらわれた姪を捜すためにこの国に来たんだ。他にも神隠しのように消えた子供が何人もいて、調べていくうちに、どうやらこの国の仕業じゃないかとわかつてな。俊輔はその話を信じて俺を逃がす手筈を整えてくれた。俊輔がいなかつたら何もできないまま犬死にしてた。だからあいつには本当に感謝している」

「……姪は見つかつたの？」

「ああ、数か月前に無事保護した。いまはこの橘の家にいる」

最初に武蔵と会つたとき、俊輔に良くしてもらつたと言つていたことを思い出す。もし彼が不

当に拘束されていたのなら、そして姪を救うという事情があるのなら、父親が同情して逃がすというのもわかる気がする。

武蔵たちの話をすべて嘘だと断じることはできないが、だからといって無条件に信じることもできない。武蔵を信じれば拓海を疑うことになってしまう。何が真実で何が嘘なのか考えれば考えるほどわからなくなってきた。

「ねえ、真壁拓海にも話を聞いてみようか？」

七海が頭を悩ませていると、遥は意味ありげな笑みを浮かべてそう提案した。ゆったりと革張りのソファから立ち上がり、七海の前まで足を進め、じっと奥底まで見透かすように双眸を覗き込む。

「彼が真犯人かどうかはわからないけど、何か隠しているのは確かだと思う。君も気になってることがあるんじゃない？ だったらこの際すべてはっきりさせようよ」

「……いいよ、そうしよう」

七海は静かに答え、挑む思いで強気に見つめ返した。

「僕は、拓海を信じてるから」

七海の復讐を妨害していたことは事実だとしても、さすがに父親を殺した真犯人だなんてことはありえない。絶対に。揺らぐ不安な気持ちを無理やり奥深くに押し込んで、自らを奮い立たせるようにそう言い聞かせた。

「坂崎七海は預かった。返してほしいければ坂崎俊輔の墓の前にひとりで来い」

「ちょっ……?!」

武蔵が電話の相手にとんでもないことを言い出した。

ソファに座っていた七海は驚いて突っかかろうとしたが、隣の遙に体ごと抱き込まれてしまう。おまけに口まで塞がれて声も出せない。どうにかして逃れようと足をばたつかせて身をよじるもののびくともしない。この細身のいったいどこにと思うほどの馬鹿力である。

真壁拓海を呼び出すから連絡先を、と遙に言われて拓海の携帯番号を教えたのだが、まさかこんな脅迫めいた方法をとるとは思わなかった。普通に事情を話して来てもらえばいいだけのことなのに、どうして。

「坂崎俊輔の死について真実を聞かせてもらう。公安のおまえに言うのも何だが、警察に通報なんてするなよ。おまえにとっても都合が悪いことになるだろうしな」

完全に誘拐だ——。

自分の軽率な行動のせいで拓海に心配と迷惑をかけてしまった。遙の口車に乗らず、自分ひとりで拓海と向き合って尋ねるべきだったのだ。くやしくて腹立たしくて情けなくて目の奥がじわりと熱くなる。

誘拐を装うことにしようと言い出したのはおそらく遙だ。電話をかける前、武蔵にこそこそと何か耳打ちしているのを目にしていた。ただ、彼も素直に頷いていたので特に反対はしていなかったのだろう。

「いいだろう」

武蔵は窓際の壁にもたれて電話を続けていたが、こちらに目を向けてそう言うと、すらりとした長い脚で機敏に歩いてきた。腰を屈め、ソファで拘束されている七海に携帯電話を向ける。

「七海、こいつに声を聞かせてやれ」

「拓海ごめん、僕は」

口を塞いでいた手が外された途端、可能なかぎりの早口で現状を伝えようとしたが、ほとんど喋れないまま再び口を塞がれてしまった。必死に抗うものの心がふがふがとなるだけで言葉にならない。

「ああ、じゃあ必ず来いよ」

武蔵は背を向けながら携帯電話を自分の耳に当てると、そう言って通話を切り、片手で折りたたんでジーンズのポケットにしまう。遙はそれを確認してから七海を拘束していた腕を外した。

「僕は誘拐されたわけじゃない！」

七海ははじかれたようにソファから飛び退いて遙から距離を取り、キッと睨みながら訴える。彼のそばにいるのは危険だとあらためて思い知らされた。くすぐられたり、口を塞がれたり、何をされるかわかったものじゃない。

しかし、当の本人は面白がるように薄い唇に笑みをのせた。

「七海を預かっているのは事実だし、嘘は言ってないよ」

「はあ?!」

誘拐したとは言っていないかもしれないが、人質として話を進めていたくせに、よくもそんなことが言えたものだ。武蔵も同じ考えなのかと、カッと頭に血をのぼらせながら後ろを振り返ると、彼は背を向けたままうつむき加減で立ちつくしていた。

遥もその何かありげな様子に気付いたようで、怪訝に眉を寄せる。

「武蔵、どうしたの？」

「ああ……あいつ何か落ち着きすぎのような気がしてな。何を言っても驚かないで終始淡々と話を進めてたし。もしかしたら状況を知っていたのかもしれない。つけられてる気配はなかったんだが……」

「どっちにしても来るしかないよ、七海が心配ならね」

遥の言葉に、七海はドキリとして顔をこわばらせる。もし七海を心配していなければ、助ける価値がないと判断すれば、拓海は来ないかもしれない。そのことに初めて気付かされた。

「もし来なかったら、僕、どうなるの？」

「……二度とあいつのところへ帰さない」

武蔵は強い意志を感じさせる口調で、静かに断言する。

これでは本当の本当に誘拐だ。要求どおりにならなかった場合、現実でもドラマでもたいてい人質が始末されている。ときには見せしめのように残酷に。七海もそうするつもりということだろうか。

「七海、そこバスルームだからシャワーを浴びてこい。体にも血がついてる。新しい服も用意してあるからそっちに着替えろ」

「……うん」

不安は募るが、いまとなっては待ち合わせ場所に向かうしかないし、そのためには血で汚れたままというわけにもいかない。胸にもやもやしたものを抱えつつも素直にバスルームに向かう。

そこに用意されていた着替えは七海が着ているものとよく似ていた。デニムのショートパンツに長袖Tシャツ、ブルゾン、靴下、それに下着まである。ただ、新しいからか質がいいからか手触りはまったくの別物だった。

服を脱ぐと体のあちこちに血がついているのがわかった。手や顔などは簡単に拭ってくれていたようだが、体の方には手をつけていなかったのだろう。頭から熱いシャワーを浴びてこすり落としていく。

これ、武蔵の血なんだ——。

ザー……シャワーの流れる音をぼんやりと聞きながら、排水溝に流れていく汚れた湯を見つめて眉を寄せる。そのまま動きを止めてじっと立ちつくしていたが、やがて我にかえり、湯の温度を上げて浴びなおしてからシャワーを止めた。

ホテルのものと同じようなふかふかのバスタオルで体を拭くと、用意された衣服を着てバスルームを出る。そこに遥の姿は見え、武蔵ひとりがゆったりとソファに身を預けていた。七海に気付くと手招きする。

「ドライヤーなかったのか？」

「さあ、見てないけど」

「ここに座って待ってろ」

促されるままソファに腰掛けていると、武蔵はバスルームからドライヤーとブラシを取って戻ってきた。隅のコンセントに挿し、強力な温風で七海の濡れたショートヘアを乾かし始める。

「自分でやるよ」

「いいから」

白い包帯の巻かれた手で、丁寧に七海の髪をとかしながら温風を当てていく。

その手が鼻先をかすめたときかすかに消毒液の匂いがした。痛そうにはしていないが、あれだけ切れて出血したのだから痛くないはずがない。手当てをしたとはいえ、普通にブラシを握って大丈夫なのかと心配になる。

「よし、乾いたな」

「……ありがと」

武蔵は満足そうに笑顔で応じて、手にしていたドライヤーとブラシを片付けに行った。バスルームからカタンと小さな物音が聞こえたかと思うと、すぐに戻ってきて隣に腰を下ろす。七海は緊張で表情を硬くしてうつむいた。

「ごめん」

「ん？」

「手……」

そう言いながら、横目でちらりと包帯の巻かれた左手を見る。ああ、と武蔵は得心したようにその包帯の手を軽く掲げた。

「七海が気にすることじゃない」

「だって僕のせいで怪我したんだし」

「ナイフを握ったのは俺の判断だ」

「僕は武蔵を殺そうとしたんだよ？」

「それ、悪いと思ってるか？」

自分の中の矛盾を突かれて言葉に詰まり、目を伏せる。

「悪いと思っていないなら謝らなくていいさ」

武蔵は軽い口調で流すと、包帯の巻かれていない方の手を七海の頭にぽんと置く。彼がどう思っているのかわからず戸惑うものの、置かれた手はあたたかく、七海はそれだけですこし不安がやわらぐのを感じた。

「あんまり時間がないから簡単なものだけど」

遥は大皿のサンドイッチと飲み物を用意して戻ってきた。実際にワゴンで運んできたのは執事の櫻井だ。ソファに座る七海たちの前にサンドイッチを置き、紅茶を淹れる。七海の前にはオレンジジュースを置いた。

櫻井が下がると、遥と武蔵はさっそくサンドイッチに手を伸ばした。

「七海も食べるよ」

「うん」

武蔵に促されておずおずと手を伸ばす。しかし、一口食べたら随分と空腹だったことに気づき、警戒も遠慮も忘れて次から次へと頬張っていく。隣で武蔵がくすりと笑っていたことには気づきもしなかった。

約束の時間が近づき、執事の櫻井が運転する車で墓地に向かう。

助手席には遙が、後部座席には武蔵と七海が並んで座っている。四人とも黙りこくったまま口を開こうとしない。車内は息の詰まりそうな沈黙に包まれていた。隣の武蔵をちらりと見ると、何か思案しているのか難しい顔をして腕を組んでいた。

「遙、おまえは櫻井さんとここで待っててくれ」

駐車場に着くなり、武蔵は後部座席から身を乗り出してそう言った。その表情からは自分で決着をつけるという覚悟が窺える。それゆえ遙も反対できなかったのだろう。不満そうにしながらも、十分に気をつけてとだけ言って送り出した。

七海は武蔵に同行している。人質として。

今朝と同じように、石造りの細い階段を上って小高い丘の上に出た。ひんやりとした風が頬をかすめる。灰色の雲の切れ間から覗く水平線は茜色に染まり、そろそろ日が沈もうとしていた。

整然と並んだ墓石のあいだを武蔵は迷いなく進んでいく。一度来ただけなのに場所を記憶しているようだ。七海はその後ろを歩きながら目的地に目を向ける。そこにはスーツ姿の男性がひとり墓の前で佇んでいた。

「パパっ！」

来てくれた、見捨てられなかったんだ——七海は歓喜の声を上げて走り出したが、すぐに武蔵に追いつかれた。片腕で肩を押さえつけるように抱き込まれてしまう。必死にじたばた暴れるものの脱出できる気配すらない。

「放せよ！」

「取り引きはまだ終わってない」

拓海が来たことで人質としての役割は果たしたと思ったのに、まだ利用するなんて。思いきり眉をひそめて背後の武蔵に振り返る。しかし、彼は七海など眼中にないかのように正面を見据えていた。

視線の先にいるのは拓海だ。彼の方もまた瞬ぎもせずに武蔵を見つめ返している。表情こそいつもと変わらないように見えるが、その瞳はゾッとするほど冷たい。まるで長年の仇敵を前にしているかのように。

「アンソニー＝ウィル＝ラグランジェ」

「……いまは武蔵だ」

武蔵が不快そうに顔をゆがめる。

どうやらアンソニーというのが本当の名前のようだ。この国の人間ではないと言っていたことを思い出す。そして、やはり二人には面識があったと考えるしかない。

「俺とおまえの中間地点に七海を立たせろ」

「いいだろう」

拓海の指示に、武蔵は迷うことなく同意した。七海の肩を押さえていた腕を外す。

「七海、あの黒い墓石のところまで行け」

すこし迷ったが、拓海の提案だから従った方がいいのだろう。一步一步ゆっくりと足を進め、中間地点と思われる黒い墓石の前で足を止めた。武蔵のそばでも拓海のそばでもないこの状態が、何かとても心細い。

あらためて拓海の方に目を向ける。彼は仕事に出かけたときと同じスーツのまま、小脇にイルカのぬいぐるみを抱えていた。そして隣には父親の墓があり、拓海が持ってきたと思われる花が供えられていた。

二人は親友だったと聞いている。

父親が生きていたころはときどき拓海が遊びに来ていた。あまり笑わない拓海だが、父親と話しているときだけは表情がやわらかくなる。父親も拓海と喋っているときはいつも嬉しそうだった。だから、彼が真犯人だなんてことは絶対にありえない――。

「えっ？」

ふいにイルカのぬいぐるみが投げてよこされた。コンクリートをはずむように転がり、七海の足にぶつかった。尾から横腹に当たる部分には黒い汚れがついている。七海がずっと大切にしてきたぬいぐるみに間違いない。

続いて、透明なビニール袋に入ったものが放り投げられた。地面をすこしすべってぬいぐるみの横で止まる。その中にはナイフと服が入っているように見えた。どちらもどす黒いものでひどく汚れている。

――血？

そろりと顔を上げ、答えを求めるように怪訝な視線を送る。

拓海はじっと無表情のまま見つめ返してきた。嫌な予感に、七海の心臓はうるさいくらいに早鐘を打ち始める。それでも目をそらすことなく正視していると、やがて彼の口から静かに言葉が紡がれた。

「七海の父親、坂崎俊輔を殺したのは、俺だ」

——坂崎俊輔を殺したのは、俺だ。

呆然とする七海の脳内で、そのセリフがこだまのように何度もリフレインする。言葉の意味はわかっているはずなのに何も考えられない。だんだんと息苦しくなり、胸元で白いTシャツを掻き寄せるように掴む。

「う……嘘だよ、パパ……」

「もうその呼び方はしなくていい」

視界に拓海を映しながらどうにか絞り出した問いに、彼は答えない。ただ淡々と突き放すだけである。嫌な予感にじわじわと生ぬるい汗がにじんできた。いろいろと問い詰めたいが、まるで金縛りにでも遭ったかのように声が出ない。

「詳しく話を聞かせてもらおうか」

七海の背後から苛立ちを含んだ声が聞こえてきた。振り向くと、武蔵が刺すような鋭いまなざしで拓海を睨めつけていた。それを受けて拓海も不快そうに眉を寄せて睨み返した。二人は七海を挟んだまま話し始める。

「おまえがそそのかしたせいで、俊輔はおまえの逃亡に手を貸して裏切り者になった。裏切り者の末路なんてろくなものじゃない。特に俺たちのような捨て駒はな」

「だから殺したっていうのか」

「俊輔は親友だ。他の誰かに痛めつけられて始末されるくらいなら、いっその手で葬ってやりたい。そう思うのはおかしいことじゃないだろう。俺だって本当は殺したくなんかなかった。そうせざるを得ない状況に迫りやったのはおまえだ、アンソニー＝ウィル＝ラグランジェ」

「……………」

拓海は怒りを押し殺したように言い放ち、武蔵はきまり悪そうに視線を落とす。

ここに来る前に聞いた話と矛盾がないし、武蔵も言い返さないので、事実関係については間違いないのだろう。つまり、俊輔が殺される原因を作ったのは武蔵で、実際に手を下したのは拓海だと。

「七海を引き取ったのは敵討ちをさせるためだ」

「俺を殺させ、そしておまえも殺させるのか？」

えっ——？

驚いて拓海に振り向くと、彼は目を細めてうっすらと微笑を浮かべていた。七海はぞわりと総毛立ち、体の芯が冷たくなっていくように感じた。頭は考えることを拒否しているかのように真っ白だ。

「そのナイフは、おまえが俊輔を殺したときのものなんだな？」

「そうだ。鑑定すれば俊輔の血だとわかるはずだ。七海におまえを殺させたあとで真実を話し、俺を殺させる。もともとはそういう筋書きだったからな。信じてもらうための証拠として保存しておいた」

拓海はそこまで淡々と話したあと、嘆息した。

「本当は、七海がもうすこし大きくなって実力をつけてから、おまえに辿り着けるように手がかりを与えるつもりだった。だが、おまえの似顔絵が大々的に報じられて予定が狂った」

表情を変えないまま声に忌々しさをにじませて言うと、七海に視線を移し、懐から取り出した黒い何かを投げてよこした。カラカラカラとコンクリートを滑り、七海の足に当たって止まる。それは拳銃だった。

「敵を討て、七海」

静かに脳内に染み渡る、麻薬のような声。

足元にあるのは、血で汚れたイルカのぬいぐるみ、血で錆びたナイフ、大量の返り血を浴びた服、そして拳銃——頭の中にラ・カンパネラのオルゴールが鳴り響き始めた。吐き気がするくらいの大音量で。七海は片手で側頭部を押さえながら奥歯を食いしぼる。

殺さなきゃ。

殺さなきゃ。

殺さなきゃ。

お父さんの敵を。

それは、誰？

誰を殺すの？

視界がぐにやりと歪んで焦点が合わなくなる。脳内ではいまだ打ちつけるようにオルゴールの音色が響き、頭がぐわんぐわん揺れているように感じた。それでも答えを探そうと必死に踏ん張って思考をめぐらせる。

「この距離なら七海の腕でも十分にあてられる。あいつと俺を殺せ。俊輔の亡骸の前で俺たちは約束したはずだ。お父さんを殺した男を七海の手で殺すんだと」

七海に復讐の道を示し導いてきたのは拓海だった。父親が死んだあの日からずっと。彼の示した道を正しいと信じきっていた。疑いもせずただひたむきに邁進してきた。けれど——。

「七海！！」

「動くな！」

武蔵が声を上げた瞬間、拓海はもうひとつの拳銃を懐から抜いて彼に向ける。予想していたのか無駄のない流れるような動きだった。駆け出そうとしていた武蔵の足がビクリと止まり、前傾姿勢で拓海を睨む。

「動けば撃つ。できれば七海に撃たせてやりたいからじっとしている」

拓海は銃口を向けたままそう命令すると、七海に視線を移す。

「七海、思い出せ。俊輔が血溜まりに横たわり、物言わぬ骸になっていたあの日のことを。おまえの感じた絶望と恐怖と怒りと悲しみを」

七海の目からぼろりと涙がこぼれた。

虚ろなまま操り人形のように地面に転がる拳銃を拾うと、銃口を下にしながらかえる両手でグリップを握り、引き金に指をかけ、ゆらりと体を揺らして背後の武蔵に向きなおる。

七海を捉えていた緊張したまなざしの中に、寂しそうな色、つらそうな色がにじんでいる。彼

を狙わなければならないのに銃口が上がらない。上げられない。まるで拒否するかのようには手が動かない。

父親の敵だと自分に言い聞かせても騙せないだろう。本当はもうわかっている。きっと彼には父親を死なせる意思などなかった。殺さなければならないのは父親を殺した男だ。だから――。

バツ、と身を翻して拓海に銃口を向ける。

一瞬、拓海は驚いたように目を丸くしたが、すぐさまいつもの冷静な表情に戻った。片手で拳銃を構えたまま、武蔵への警戒を解くことなく七海に視線を送り、空いた方の手で自身の眉間あたりを指さして言う。

「頭を狙え。そう教えてもらう」

そう、射撃場ではいつも頭を狙えと言われて練習してきた。けれど生身の人間を撃ったことは一度もないし、銃口を向けるのも初めてだ。それも恩人として慕っていた相手になんて。

狙いを定めようとするものの手の震えが止まらない。手だけでなく膝も足もどこもかしこも震えている。それでも撃たなければ終われない。いまだラ・カンパネラのオルゴールは大音量で鳴り響いている。

「やめろ七海、撃つな！」

背後から聞こえてくる武蔵の切羽詰まった必死な声。それを振り切ろうと、七海はあふれんばかりに潤んだ目をギュッとつむり、ついと一筋の涙が流れ落ちていくのを感じながら、拳銃を持つ手にグッと力をこめる。

「うわああああああッ！！！」

ババン――二つの銃声が重なり、七海は反動でコンクリートに尻もちをつく。

正面の拓海は拳銃を構えたまま身じろぎもせず立っていた。七海の銃弾は外れたらしくかすり傷ひとつ見当たらない。目をつむりながらなど当たるはずがないのだ。けれど、当たらなかったことに心底ほっとしていた。

「うっ……」

背後からかすかな呻き声が聞こえた。

振り返ると、武蔵が胸元を押さえながらうつぶせに倒れ込んでいた。拓海の銃弾が命中したのだろう。コンクリートにじわじわと血溜まりが広がっていくのが見えて、反比例するように七海の顔からは血の気が失せていく。

カツ、という靴音にビクリとして前を向くと、拓海が無表情で歩みを進めてくるのが見えた。背筋に冷たいものが走る。逃げたい衝動に駆られたが、手足が震えて立ち上がることすらできそうにない。

「七海、外れたぞ」

拓海は自分の拳銃を懐にしまいながらそう言うと、七海の前でしゃがんだ。そして七海の手を拳銃ごと掴み、その銃口を自らの眉間に誘導してピタリと押し当てさせる。

「これなら外しようがないだろう」

「嫌だ……やっぱりできない……」

七海は弱々しく声を震わせて訴えるが、拓海は聞く耳を持たない。生ぬるい涙があふれて頬を

濡らしていく。

「引き金を引け、七海」

必死に首を横に振る。拳銃から手を放したいが、彼にがっちりと握り込まれているためどうにもならない。引き金にかけた指を外すこともできない。下手に抵抗するとうっかり発砲してしまいそうだ。

「引き金を引けば終わるんだ」

「やだ……こんなのやだ……」

か細い涙声でうわごとのようにつぶやいても、やはり拓海は許してくれなかった。射るようなまなざしで七海を見据えて尋ねかける。

「俺たちは何のために生きてきた？」

七海はあふれる涙を止めることもできず、半開きの口を震わせた。父親の敵を取るため、殺すため、それがすべてだったことは理解している。けれどこんな結末を望んでいたわけではない。

「俺を殺さなければ終わらない」

彼は静かにそう言うと、七海と拳銃を握り込む手にグッと力をこめる。銃口は話のあいだもずっと眉間に押しつけられていた。いや、銃口に眉間を押しつけていたのかもしれない。

「殺せ……殺してくれ！！」

縋るような悲痛な叫びが七海の鼓膜を震わせる。彼の瞳は見たこともないほど潤んでいた。いつも冷静な彼がこんなにも感情的になるなんて。何もかもが怖くて、ギュッと目をつむり必死に首を横に振り続ける。

ガンッ——。

鈍い音がしたかと思うと、七海の手を握り込んでいた大きな手から力が抜け、脚の上にとどさり体ごと倒れ込んできた。驚いて目を開くと、彼は後頭部を押しえながら顔をしかめて呻いていた。

その背後では、左肩あたりから大量の血を流した武蔵が、血まみれのこぶしを握りしめて立っていた。出血のためか痛みのためか息が荒くて苦しげだ。それでも拓海の後ろ襟を掴むと、七海から引きはがして叩きつけるように地面に転がした。

「七海、大丈夫か」

「うっ……」

顔がゆがみ、熱い涙が止めどなくあふれて流れ落ちていく。武蔵は小さく微笑み、あまり血がついていない方の手をぽんと七海の頭に置いた。そしてまだ震えがおさまらない七海の手から慎重に拳銃を取ると、倒れた拓海の足元に放り投げる。

「おまえなんか七海が手を汚す価値もない。死にたければ勝手に死ね」

嫌悪感あらわに言い捨てると、泣きじゃくってしがみついた七海を抱き上げ、イルカのぬいぐるみを掴み、時折ふらつきながら墓地をあとにする。あたりはもうだいぶ薄暗い。空には重々しい鉛色の雲が垂れ込めていて、いまにも雨が降り出しそうだ。

ゴーン、ゴーン……。

教会だろうか。遠くで鳴り始めた重厚な鐘の音を、七海は武蔵の首にしがみついて泣きながら

、ただぼんやりと聞いていた。頭の中に、ラ・カンパネラのオルゴールはもう響いていなかった。

第13話 ただひとりの親友

「拓海っていい名前だね」

まだ肌寒さの残る四月上旬。入学式が終わり教室でホームルームを待つあいだ、決められた席で頬杖をついて窓の外の桜吹雪を眺めていると、ふいに同級生と思われる男子が隣から話しかけてきた。

何だこいつ、と怪訝に思いながら横目で睨むが、彼はニコニコと人なつこい笑顔を崩さない。名前に海が入ってるなんていいね、うらやましいな、などと聞いてもいないのに声ははずませる。

それが坂崎俊輔——後に七海の父親となる男だった。

拓海と俊輔はともに孤児だった。

すこしずつ話をするようになってわかったことだが、二人とも生まれてまもないころに捨てられ、養護施設で育てられていた。いまま各々の養護施設からこの公立高校に通っている。

拓海はこれまで生き立ちのことでからかわれたり、いじめまがいのことをされてきたため、自分からまわりと距離を置くようになっていた。おかげで友達と呼べる存在はひとりもない。

俊輔の方もやはりからかわれることは少なくなかったらしい。ただ、拓海と違ってまわりに溶け込もうと努力をしていたようだ。実際、この高校にも中学時代の友達が何人かいる。

それでも同じ境遇の存在というのはやはり特別なのだ。生き立ちや施設のことにも気兼ねなく話せ、変に憐れみの目を向けられる心配もなく、わかり合える。二人が親しくなるのに時間はかからなかった。

きっかけは境遇だが、もちろんそれだけではない。

気が合わなければ、共感はしても親友にはなれなかつただろう。寡黙で愛想のない拓海と、人なつこくお人好しな俊輔。正反対なのがかえってよかったのかもしれない。歯車が噛み合うように気負わず自然体でいられて、とても心地がよかった。

ただ、二人ともアルバイトをしていたので、いつも一緒というわけにはいかなかった。それでも互いに都合が合うときは、図書館で勉強したり、街を歩いたり、公園で話したりして同じ時間を過ごした。

「なあ、海を見に行かないか？」

ある夏の日、俊輔が何の脈絡もなくそう誘ってきた。拓海自身はそれほど海に興味はなかったが、俊輔が海を好んでいることを知っていたので同意した。彼が喜んでくれるならそれでよかったのだ。

俊輔に連れて来られたのは、海水浴のできるような砂浜ではなく、客船ターミナルもある埠頭の公園だった。特にここが好きなのではなく、単にいちばん近くて行きやすかったというだけの理由らしい。

全体的な風景としては遠くのビル群と海が調和していて悪くないが、海を覗き込んでみるとゴミが浮いていたりしてあまりきれいとは言いがたい。海が好きだという人間が好むようなところとは思えなかった。

「おまえ、こんな海でもいいのか？」

「海は海だよ」

俊輔は軽く笑ってそう答えると、柵に腕をのせて細波の立つ海原を眺める。

「自然のままのきれいな海はもちろん好きだけど、人の生活の中にある海も好きだよ。南国のエメラルドグリーンの海も、このきれいじゃない淀んだ海も、日本海の冷たく荒れた海も、マグロが捕れる遠洋の海も、どの海も全部ひとつに繋がってるんだって思うと不思議だよな」

やわらかく目を細めて海を見つめる横顔に、潮風が吹いた。茶色がかった柔らかな癖毛が揺れる。じっと見ていると、視線を感じたのか振り向いてニコッと笑った。

「拓海も好きだよ」

「……海扱いか」

あきれたような様子を見せながらも口もとが緩む。単なる冗談であることはわかっているが、彼が好きだという海の一部に挙げられたことは、特別な存在だと認められているようで嬉しかった。

結局、拓海には海の良さが今ひとつ理解できなかったが、それでも彼と海を見ることは素直に楽しいと思えた。海というより、それを眺めている彼を見るのが好きだったのかもしれない。

それからは、拓海の方からもたびたび海に誘うようになった。時間的な問題で同じ埠頭に行くことが多かったが、たまに遠出をして別の埠頭へ行ってみたり、砂浜の海岸に出かけたりもした。

二人にとって、海は特別な場所となっていた。

「真壁拓海君だね」

高校三年生の梅雨入り間近のある日、アルバイトを終えて施設へ帰る途中の路地で、スーツを着た見知らぬ男に呼び止められた。穏やかな表情に見えるが、底知れぬ威圧感のようなものを感じてゾクリとする。

「すこしだけ時間をもらえるかな」

「どうして俺の名前を……」

「君のことは調べさせてもらった」

「あなたは誰なんですか？」

怪訝に問いかけると、彼は思わせぶりにニッと口の端を上げた。

頭の中で警鐘が鳴り響く。しかし有無を言わさぬ雰囲気ので肩を抱かれてしまい、すぐにでも逃げ出したかったがそうする勇気もなく、促されるまま足を踏み出すしかなくなっていた。

連れて行かれた先にあったのは黒いセダンだった。車には詳しくないが、確かそれなりに高級な国産車ではないだろうか。運転席には、やはりスーツの若い青年が座っているのが見える。

「さあ座ってくれ。中で話をしよう」

「話なら他の場所でもできますよね」

「人目を避けたいのだよ」

こんな得体の知れない男の車に乗るなど危険すぎる。だからといって逃げ切れるとも思えない。おそらく名前だけでなく高校も住所も把握されている。たとえここで振り切ったとしても、待ち伏せされて強硬手段に出られたとしたら。

二進も三進もいかず立ちつくしているうちに、男に扉を開けられ、半ば強引に後部座席へ押し込まれてしまった。隣には男が座る。

行ってくれと重量感のある低い声で男が命じると、運転席の青年がエンジンをかけて車を走らせ始めた。車の中で話をするだけではなかったのか。拓海は顔からうっすらと血の気が引くのを感じた。

「どこへ行くんですか？」

「ドライブだよ」

「ふざけてるんですか」

「話が終わったら送ろう」

男は愉快そうに微笑を浮かべながら軽く受け流し、警戒する拓海の隣でゆったりとシートに身を預け、本題に入った。

警察庁の楠——街を走行する車の中でそう名乗ったこの男は、国のために働く気はないかと真面目な顔で尋ねてきた。公安部で潜入捜査や国家機密に関わる仕事をさせたいらしい。

拓海に目をつけたのは、成績や適性など様々な要因を考慮した結果らしいが、前提としてあるのは孤児という身の上のようだ。天涯孤独であれば使い捨てにしやすい。楠の口ぶりからそういうことなのだろうと理解した。

正直なところ国のためといわれても心は動かなかった。愛国心などない。ただ、将来の夢や希望といったものもないので、求められるところへ行くのもいいかもしれない。たとえ捨て駒だとしても。

考えさせてください。

このときはそう答えて持ち帰らせてもらったが、他言無用ということなのでひとりで考えるしかなかった。なかなか気持ちは固まらない。一か月後、再び接触してきた楠に流されるような形で了承の返事をした。

俊輔にはそういう打診は来ていないようだった。彼本人にそのことを尋ねたわけではないし、素振りがないだけで来ている可能性もあるが、たとえそうだと断っているだろう。

なぜなら、彼は高校卒業後に結婚するのだから。

相手は同じ養護施設で育った同年齢の子だと聞いている。紹介したいと言われているものの、あれこれ理由をつけてずるずると機会を延ばしていた。どういう子なのか知りたい気持ちはあるが、会いたくはなかった。

写真は何枚か見せてもらったことがある。目がくりっとした元気の良さそうな子だった。写真

の中で俊輔も彼女もいい笑顔を見せていて、きっとお似合いなのだろうと素直に思えた。

拓海が公安で働くことが内々に決まったころ、俊輔が就職活動を始めた。できれば海に関係する仕事がしたいと、民間の海洋調査会社の求人を見つけて願書を出し、採用試験を経て秋頃に内定をもらっていた。

結婚して二人で生活していくには、きちんと就職して働かないとね、などと幸せそうにはにかむ姿は、夢も希望もない拓海とは対照的である。友人として彼を祝福しながら、同時に一抹の寂しさを感じていた。

卒業式は、ちらちらと雪の舞う薄曇りの日だった。

ありきたりな形ばかりの式が終わると、教室で担任から卒業証書を受け取って解散する。名残惜しそうに校内にとどまる生徒が多い中、拓海と俊輔はすぐに高校をあとにした。

「雪降ってるけど行くよね？」

「ああ」

卒業式が終わったら海を見に行こうと約束していた。拓海としては吹雪だろうと豪雨だろうと行くつもりだった。幸い、傘が必要なほどでもないので問題はないだろう。俊輔もやめるつもりはさらさらなようだった。

雪のせいか埠頭の公園にはほとんど人影がなかった。まるで貸し切りのようだ。柵にもたれて愛おしげに海を眺める俊輔の横顔を見ながら、この季節外れの寒さと雪にひそかに感謝した。

「ありがとう、拓海」

「……………？」

俊輔の口から白い吐息まじりに紡がれた言葉を聞いて、怪訝に眉をひそめる。なぜ礼を言われたのかわからない。そんな疑問に答えるように、彼は横目を流したままくすりと笑って言葉を継いだ。

「おかげで高校生活が楽しかったから」

「それなら礼を言うのは俺の方だ」

「あ、最初に声をかけたのは僕だっけ」

「覚えてるのか？」

「うん、拓海の名前にも感謝しなきゃ」

俊輔は懐かしそうに目を細める。

つられるように、拓海の脳裏にこの三年間の出来事が次々とよみがえった。長かったようで短かったような三年。もっと早く出会えていればよかったのに、などと詮無いことを考えてしまう。

「僕さ」

その声で我にかえると、彼は顔ごと柵にもたれて微笑んでいた。

「子供が生まれたら名前に海を入れようと思うんだ。里奈に言ったら気が早すぎるって笑われたけど、賛成してくれた」

「おまえらしいよ」

里奈というのは結婚相手の名前だ。二人で幸せな未来について話している姿が目には浮かぶ。彼女のことは知らないが、俊輔にはそんなあたたかい幸せがよく似合うし、彼ならば間違いなく築いていけるだろうと思う。

「そういえば、住むところはまだ決まらない？」

「ああ……いま上司になる人が探してくれてる」

本当はすでに用意されているにもかかわらず、嘘をついた。慣れないことに表情が硬くなったのが自分でわかる。しかし、幸いにも俊輔はまったく気付かなかったようだ。

「じゃあ、僕の住所を教えとくよ」

そう声をはずませると、生徒手帳にさらさらと書き付けてそのページを破いた。

「きのう新居のアパートを決めてきたところなんだ。電話番号はまだ決まってないから住所だけなんだけど……拓海の連絡先が決まったら絶対に教えに来てよ。また一緒にどこか行ったり話したりしたいし、里奈も紹介したいし」

「わかった」

押しつけられた紙切れに目を落とす。そこには、彼らしいのびやかな字で隣の住所が書いてあった。アパート名から察するに昔ながらの古びたところのようだ。高卒の会社勤めではさほど給料も良くないのだから、仕方がないだろう。

「あと、これもらって」

「……………？」

今度は茶無地の紙袋が差し出された。もちろん紙袋だけでなく、中には何か重量感のあるものが入っているようだ。卒業式なのにやけに大荷物だなとは思っていたが——怪訝な顔をしていると、彼はくすりと小さく笑って付言する。

「オルゴールだよ。このまえ拓海が物欲しそうに見てたやつ」

拓海はハッと目を見張る。

俊輔と街中を歩いていたとき、どこかの店頭で鳴らしていたオルゴールに惹かれて足を止めたことがあった。深みのある音色でなめらかに奏でられるその旋律に、いつになく心が昂ぶっていく。オルゴールなんておもちゃという認識しかなかったのも、とても驚いたのを覚えている。

物欲はない方だが、そのオルゴールはめずらしく手に入れたと思った。しかし値札を見た瞬間にあきらめた。そして数週間後に来たときには店頭から消えていた。そのあたりのことは心に秘めたまま誰にも言っていない。ただ、一緒にいた俊輔なら察していても不思議ではないが——

。

「いや、だからってどうしてこんな……」

「拓海が何かに興味を示すって結構めずらしいからさ。卒業したら毎日は会えなくなるし、何か形に残るものをあげたかったっていうか……まあ僕のわがままだよ。もう買っちゃったんだからもらってくれないと困るけど」

俊輔はいたずらっぽく肩をすくめた。

「……大切にする」

拓海は目を伏せて静かに答える。自分自身にしかわからないくらいだが、声がかすかに震えて

いた。受け取った荷物の重みを感じながら、紙袋の紐を握る手にゆっくりと力をこめた。

「ごめん、じゃあまたね」

しばらく埠頭で過ごしたあと、俊輔は転居の準備があるからと申し訳なさそうに帰っていった。いつもなら一緒に帰るのだが、拓海はもうすこしここにいたかったので残ることにしたのだ。

気のせいかな、俊輔がいなくなってから鉛色の雲が厚くなり、冷え込みが厳しくなった気がする。風も幾分か強くなったのではないか。頬の熱がみるみる奪われていくのを感じながら、白い息をついた。

ずっと手に持ったままだった小さな紙を見下ろす。あまり見つめていると住所を覚えてしまいそうで、くしゃりと握りしめる。できることなら卒業してもずっと親友でいたかった。けれど。

ビリビリ、ビリビリ――。

無表情のまま、手の中の小さな紙をひたすら細かく破いていく。判読できなくなったその紙片を両手にのせて掲げると、風に煽られて空に舞い上がり、やがて細雪とともに海に消えていった。

拓海は柵の上に顔を伏せ、ひとり静かに涙をにじませた。

第14話 二度目のさよなら

高校を卒業してから約九年。

拓海は公安に所属して仕事を続けていた。危険な仕事でも、陰惨な仕事でも、地味な仕事でも、与えられるまま淡々とこなしていく。仕事以外は食事をして寝るだけの無味乾燥な日々。恋人どころか友人のひとりもない。

鏡の向こうの自分はひどく澀んだ目をしている。しかし、それを嘆くことさえできないほど心は摩耗していた。どうせ夢も希望も何もない。使い捨てにされて一生を終えるのがお似合いだとやさぐれる。

それでも、この世に生まれたことは後悔していない。

俊輔と過ごした高校時代の三年間には一生分の価値があった。まぶしいくらい鮮やかに色づいたその記憶と、彼からのプレゼントであるオルゴールだけが、心の拠り所となっていた。

霜が降りるほど冷え込んだある日、緊急指令が下された。

それはとある白人風の男を秘密裏に確保することである。不審な潜水艇を捕らえようとして半壊させたが、操縦者と思われるその男が海に逃れてしまい、行方がわからなくなったという。

長くはない鮮やかな金の髪、サファイアのような青い瞳、二メートル近くある長身、ブルゾンに濃い色のパンツ——男に関する情報はそれくらいで、名前どころか顔さえもわからないらしい。

詳しくは知らされていないが、その男は存在自体が秘匿されなければならない最重要機密ということで、なるべく一般市民の目に触れないよう、そして都道府県警察には先を越されないよう厳命されていた。

もし事情を知らない都道府県警察がこの男を確保すれば、かなり面倒なことになる。最悪でも記者発表だけは阻止しなければならない。マスコミに目をつけられると情報漏洩の危険性が高くなるのだ。

しかし、捜索の手は圧倒的に不足している。

公安部の動ける人員は全投入しているものの、そもそもが多くない。あとは自衛隊の少数精鋭が海上を捜索しているくらいだ。最重要機密ゆえ闇雲に動員するわけにはいかないのだろう。

ザザーン——。

波音を聞きながら、拓海は双眼鏡片手に割り当てられた砂浜を捜索する。潮の流れなどを考えると、漂着するならこのあたりではないかと推測し、公安は周辺一帯を厳重警戒していた。

真冬の海に何の装備もなく飛び込んだとなれば、海で力尽きる可能性が高い。それでもまずは生きて泳ぎ着くことを想定する必要がある。もちろん死んでいても遺体は回収しなければならない。

そろそろ着いてもおかしくない時間だ。

街に逃げ込まれては発見が困難になるため、文字通り水際で止めるしかない。幸い真冬という

こともあり砂浜にはほとんど人影がなく、不審な金髪碧眼の男がいればすぐにわかるだろう。

あれは……。

双眼鏡を覗いていると、遠方の波打ち際に何かが横たわっているのが目についた。倍率を上げて確認する。それは全身ずぶ濡れでうつぶせに倒れている金髪の男だった。長身かどうかはわからないが小柄ではなさそうだ。

間違いない。そう確信して、足元の悪い砂浜を全力で走り出す。

だが拓海がたどり着くより早く、作業着にブルズンを羽織った男性があたふたと駆け寄っていた。声をかけながら肩を揺さぶったり頬を叩いたりしているが、反応はないようだ。

やがてズボンのポケットから携帯電話を取り出して操作を始める。救急車を呼ぶつもりなのだろう。意識のない人間を発見したときの行動としては正しいが、この男が対象の人物なら非常にまずい。

「動くな、警察だ！！」

鋭い声でそう叫び、素早く懐から銃を取り出して作業着の男性に向ける。彼は反射的に振り向くと銃口を見て青ざめたが、目が合った瞬間、二人ともその目を見開いて息を飲んだ。

「拓海?!」

作業着の男性はかつての親友、坂崎俊輔だった。

そういえば彼の就職先はこのあたりだったと思い出す。高校生のときより幾分か男性らしさが増しているものの、あまり変化はない。男性にしては高めのやわらかい声も当時のままだ。

懐かしさが胸に押し寄せる。連絡を絶ったのは拓海自身であり、この再会もやっかいな事態ではあるが、それでも心はずっと俊輔を求めているのだろう。だが、今はその感情に流されている場合ではない。

「個人的な話はあとだ。その男を引き渡せ」

「でも、意識がないし救急車を呼ばないと」

「処置はこちらです」

「……わかった」

警察の言葉には逆らえないと思ったのか、あるいは旧友として信用してくれたのか、どちらにしても完全に納得したわけではなさそうだが、俊輔は携帯電話を畳んでポケットにしまってくれた。

「ここで見たことは他言無用だ」

そう彼に警告し、倒れた男に銃を突きつけて警戒しながら、懐から取り出した手錠を後ろ手に掛ける。遠くからではわからなかったがかなりの長身だ。二メートル近くあるだろう。まぶたを開いてみると瞳は青色だった。

心臓は動いており、息もあるので、心臓マッサージ等の応急処置は必要なさそうだが、しかし顔にはまるで血の気がなく、体も冷え切っている。効果のほどはわからないが自分のコートを男に掛けた。

電話で本部に報告すると、近くに待機しているワゴン車が男を收容することになった。そこには医療の心得のあるものも同行しているという。また、第一発見者を聴取するので留めておくよ

う命じられた。

「拓海……僕、ずっと心配してた」

電話を切ると、隣にいた俊輔がおずおずと声を掛けてきた。

「あのあと何か月待っても来ないから、心配になって拓海のいた施設に行ってみたけど、そこで教えてもらった転居先にもいなくてさ。警察で尋ねても教えられないって言われるし、もうお手上げで……僕のこと迷惑だった？」

彼は寂しげな微笑を浮かべ、肩をすくめる。

まさかそこまで必死に探してくれるなんて思いもしなかった。迷惑だから連絡を絶ったと誤解されるなんて考えもしなかった。こんなことなら手紙だけでも出しておけばよかったと、いまさらながら後悔する。

「悪い、職務上の都合で住所を教えられなかった」

「え、職務って……警察に就職したんじゃないの？」

「そうだが、一般の警察官でも警察職員でもない」

「どういうこと？」

「悪いがこれ以上は話せない」

それが拓海の見せられる精一杯の誠意だった。俊輔なら言いまわしから何となく察してくれるだろう。言えないような裏の仕事をしているのだと。実際、彼の眉間にはうっすらとしわが寄っていた。

「いまも連絡先は教えられない？」

「ああ」

その答えを聞き、彼はすぐに作業着のポケットから自分の名刺を出し、裏の余白にボールペンを走らせて拓海に差し出した。目を落とすと、そこには住所と携帯電話の番号が書かれていた。

「拓海から連絡するのは禁止されてないよね？ せっかく再会できたのに、このままさよならなんてしたくない。聞くなっていうことは聞かないようにする。ただ昔みたいに仲良くしたいだけなんだ。待ってるから今度こそ絶対に連絡して……絶対だよ」

怖いくらいの真顔で押しつけられて、思わず受け取ってしまう。

しかし彼と会うことはやはりもうないだろう。禁止されているわけではないが、いまの自分は彼と付き合うに値しない人間である。万が一、彼に危害が及ぶようなことになれば死んでも死にきれない。

「じゃあ、そろそろ昼休み終わるから」

「待て、第一発見者として聴取がある」

「そうなの？ うわ、まいったな……」

まもなく午後一時になる腕時計を見て、急いで帰ろうとしていた俊輔は、困り顔で頭をかいた。

「会社に遅れるって連絡していい？」

「ああ、警察に協力するとだけ言え」

「わかった」

彼はその場で上司に電話して遅れることを平謝りしていた。どうやら重要な会議があったらしい。申し訳なく思うが、こちらとしても国家機密に関係する以上、独断で融通をきかせるわけにはいかなかった。

ザザーン——。

静かになると波の音が耳につく。

こうやって俊輔と並んで海を見るのは高校生のおとき以来だ。隣に目を向けると、彼はあのことと同じようにじっと海原を見つめていた。いまでも海が大好きで、休憩時間などに飽きもせず眺めに来ているのだろう。

懐かしい波の音、懐かしい潮の香り、そして懐かしい親友。

意識すればするほど胸が詰まる。何か話をしなければと思うのに、何も言葉が出てこない。何を話せばいいのかわからない。早くしなければこの時間が終わってしまうというのに——。

「オルゴール、大切にしている」

ようやく絞り出したひとことに、彼は驚いたような顔をして振り向いたが、すぐによかったと屈託のない笑みを見せた。その一瞬で、高校生のころに引き戻されたように感じた。

直後、慌ただしいエンジン音が聞こえて振り向くと、ちょうどワゴン車二台が到着したところだった。ようやく話を始めたばかりなのに苦々しく思うが、仕方がない。車から降りてきた職員たちに手を上げて合図を送る。

「その男が対象者だ」

「了解した」

「彼が第一発見者だ」

「こちらへ」

俊輔が二人の職員に挟まれてワゴン車に連れて行かれる。不安そうにちらりと振り向いた彼に、拓海は大丈夫だという気持ちをこめて頷いた。

これで、さよならだ——。

遠ざかる後ろ姿を見送りながら、胸の内をつぶやく。

いくら彼が会いたがっても、こちらから連絡をしなければ会えはしない。もともともう永遠に会うつもりはなかったのだ。この奇跡のようなひとときだけで十分である。思い残すことは何もない。

彼の連絡先が書かれた名刺に手を掛けた。

その指がかすかに震えているのが自分でわかる。なかなか踏ん切りがつかずしばらくそのままだったが、やがて意を決して細かく破ると、くすんだ灰色の空に掲げて冷たい潮風にさらわせた。

。

第15話 不本意な命令

「坂崎俊輔を引き抜いてこい」

「……は？」

拓海は絶句し、口を半開きにしたまま硬直する。

上司である楠の命令に、こんな間の抜けた返事をしたのは初めてだった。表情を取り繕う余裕さえない。楠はふっと鼻先で笑い、執務机の上でゆったりと手を組み合わせて言葉を継ぐ。

「公安に転職させろということだよ」

「いったい、なぜ……」

「君の高校時代の友人なのだろう？」

彼の顔にニヤリと人の悪い笑みが浮かんだ。

誰にも話していなかったのに——おそらく俊輔のことは一通り調査済みなのだろう。考えてみれば身元調査をするのは当然だ。偶然とはいえ、最重要機密にひとりで接触してしまったのだから。

しかし、通常であれば動向に注意しておく程度で、引き抜くという話にはならない。第一発見者がたまたま拓海の親友だった、ということに、何か疑惑を持っているのかもしれない。それゆえ目の届くところで管理しようというのだろう。

あるいは拓海に対しての人質ではないかとも考えられる。俊輔が公安に所属しているかぎり、拓海は裏切ることも、辞めることも、歯向かうこともできない。たとえどんな扱いを受けようとも従順でいるしかないのだ。

彼をきな臭い世界に関わらせたくなくて繋がりを絶ったのに、最悪だ。

こんなことなら本部に連絡する前に逃がしておけばよかった。あの浜辺には防犯カメラが設置されていないので、逃がしても露見することはなかったはずだ。職務をこなすことしか頭になかったあのときの自分が恨めしい。

「そんな顔をするな」

笑いを含んだ面白がるような声。

本心を悟られないよう無表情を装ったつもりだが、隠せていなかったらしい。いや、楠が並はずれて鋭いだけかもしれない。それでも素知らぬふりをして受け流しながら、藁にもすがる思いで進言する。

「坂崎にこの仕事は務まりません」

「心配はいらん。何も危険な仕事をさせようというわけではない。例の男を監視する要員が不足していてな。増員を検討していたのでちょうどよかった。彼にとっても悪い話ではないと思うが」

そう言い、楠は黒色のファイルを差し出してきた。

怪訝に思いながら受け取り、ページを繰りながらざっと目を通していく。そこには俊輔に関する情報が事細かに記載されていた。拓海の知らなかった事実も少なくない。おかげで、さきほどの言葉の意味も否応なく理解させられた。

「よろしく頼んだぞ」

有無を言わさない威圧的な口調。

拓海は無言のまま一礼し、黒いファイルを抱えて楠の執務室をあとにする。その薄いはずのファイルがやけに重く感じられて、静かに奥歯を噛みしめた。

「来てくれて嬉しいよ」

古びた二階建てアパートの一階に、俊輔は住んでいた。

約束の時間ちょうどに訪ねると、彼は明るく声はずませて迎え入れてくれた。建物はかなり老朽化しているし、狭い台所は生活感にあふれているが、掃除は行き届いているように見える。

奥へ促そうとした俊輔のところへ、小さな女の子がトタトタと走ってきた。俊輔のズボンにしがみついてその陰に隠れながら、ひょっこりと顔を出し、くりっとした大きな目でじいっと拓海を見上げる。

「この子が娘の七海」

俊輔はそう言い、優しく慈しむように小さな頭に手をのせる。

「七つの海、って書いて七海だよ」

「本当に名前に海を入れたんだな」

「その話、覚えていてくれたんだ」

「ああ……いい名前だな」

「ありがとう」

俊輔は照れたようにはにかんだ。

彼はずっと男手ひとつで七海を育てている。妻は出産直後に出血性ショックで亡くなったのだ。すべて楠から渡された調査書で知ったことだが、その後、俊輔本人からも電話で打ち明けられていた。

「七海、この人はお父さんの親友の真壁拓海さん。七海と同じ海の入った名前だよ」

俊輔は嬉しそうに説明するが、こんな小さな子供に漢字の話をして理解できないだろう。ただ、父親の友人ということは何となくわかったようで、大きな目をぱちくりとさせて拓海を見上げる。

「おとうさんと、なかよし？」

「ああ、そうだ……よろしく」

「うん！」

目の前にしゃがんで挨拶すると、彼女は元気よく頷いた。

調査書の写真を見たときは妻の方に似ていると思ったが、動いているところを見ると俊輔に似ているようにも感じる。本当に彼の娘なのだと実感し、何ともいえない不思議で複雑な気持ちになった。

「たいしたおもてなしはできないけど」

丸い座卓の向かいに腰を下ろした俊輔は、緑茶の入った湯飲みを差し出しながら、申し訳なさ

そうに言った。しかし、知人の家に招かれた経験すらない拓海には、そもそも何が普通なのかもわからない。

七海はすぐそばで積み木遊びをしていた。まだこんなに幼いのに邪魔をしないよう静かにしている。それでもときどき父親の様子をちらちらと覗いているので、やはり構ってほしい気持ちはあるのだろう。

「拓海は結婚してないの？」

「ああ……ずっとひとりだ」

いきなりそんな話題が来るとは思いもしなかった。一瞬ドクリと心臓が跳ねたが、どうにか動揺を見せずにすんだ……はずだ。

「彼女は？」

「いない」

「そっか」

俊輔は曖昧に微笑み、湯飲みに指先を添えて目を落とした。

「仕事が忙しい？」

「そうだな」

仕事が忙しいのは本当だ。

しかし、彼女や友人がいないのは多忙だからというわけではない。この仕事をしているかぎり誰とも親しくしないと決めている。禁止されているわけではないが、不器用な自分には秘密を抱えながらの付き合いは難しい。相手に危害が及ぶかもしれないという懸念もある。

もっとも望んだところで手に入らないこともわかっている。自分つまらないとしかいいようのない空虚な人間だ。中身だけでなく愛想すらない。親しくしたいと思ってくれる人などいないだろう。ただひとり俊輔を除いては。

「そっちはどうなんだ」

「そんな気はないよ」

俊輔はうっすらと微笑を浮かべた。

現在、彼女も友人もないことは調査書でわかっていた。持ち前の人当たりのよさで良好な人間関係を築いているが、いずれもその場だけの付き合いで、個人的に遊びに行ったり家に招いたりすることはないらしい。

彼の発言から察するに、亡くなった妻への想いがまだ薄れていないのだろう。娘が幼いのでそれどころではないというのもありそうだ。けれど拓海だけはこうやって娘と暮らすアパートに招いてくれた。

俊輔の友人は自分ひとりだけ——そう思うと仄暗い喜びが胸にせり上がってくる。それがいかに身勝手な感情であるかは理解している。だから絶対に悟られないようにしなければならない。

「仕事は忙しいのか」

「昔は毎日のように残業してて忙しかったけど、今は七海がいるから配慮してもらってる。その分、他の人に負担をかけて申し訳ないっていうか、ちょっと気まずいんだけど……ってごめん、なんか愚痴っちゃって」

気恥ずかしそうに肩をすくめる俊輔に、構わないと告げる。職場に不満があるなら拓海としては都合がいい。これなら――。

「俊輔、おまえ転職する気はないか？」

「えっ？」

若干緊張しながら切り出すと、俊輔は一瞬きょとんとしたあと、すぐに我にかえって苦笑する。

「高卒で技能もない僕じゃ転職なんて上手くいきっこないよ。ちょっと愚痴ったけど、こんなに配慮してくれるところなんて他にそうないと思うし、十分すぎるくらい恵まれてるってことはわかってるんだ。心配させてごめん」

チクリと胸が痛む。友人として心配する気持ちはもちろんあるが、それと転職を切り出したこととは無関係なのだ。拓海にとっては上司に命じられた任務である。そしてそれを蔑ろにすることはできない。

「高卒可で条件のいい転職先があればどうだ」

「んー……でも、転職先を探す余裕はないから」

「探さなくてもあるといたら、どうする？」

「どういう意味？」

思わせぶりに続けられる転職の話に、俊輔の眉が寄る。

できれば転職したいという言葉質を取りたかったが、探り探り進めていくのはいいかげん限界のようだ。そう判断すると、小さく息を吐いてすっと背筋を伸ばし、真摯に彼を見つめながら告げる。

「俺は、おまえを引き抜くためにここへ来た」

「えっ……引き抜くって、その、警察に？」

「ああ、警察といっても公安警察だけだな。心配するな。おまえに与えられるのは危険な仕事じゃないし、朝九時から夜六時までの勤務で残業もないし、今よりも働きやすいはずだ。それに……」

「ちょっと待って、どういうこと？　なんで僕？」

俊輔が当惑するのも無理はない。

納得してもらうには理由を説明するしかなさそうだ。しかしながら拓海自身ほとんど何も聞かされていない。おそらくそうではないかと考える理由はあるが、憶測で話すわけにはいかない。

「上司の命令だ。人手不足を補うためだと聞いている」

「もしかして、僕が見てはいけないものを見たから？」

「……それがきっかけではある」

慎重に事実のみを伝える。

俊輔は目を伏せてじっと考え込んだ。歯切れの悪い言いまわしから何かを察したのだろう。もしかしたら、先日の聴取から不穏なものを感じていたのかもしれない。決して口外しないようにと、丁寧ながらも高圧的に言われたらうことは想像がつく。

「引き抜きてさ……強制？」

「いや、強制はできない」

その答えに、彼は袈裟なくらいほっと息をついた。

「だったら断るよ。やっぱり今の仕事が好きだから続けたいし、それに公安って何か怖そうて関わりたくないっていうか。拓海がそこで頑張ってるのはすごいと思うんだけど……」

「給料は今の倍以上出せる」

拓海が無表情で告げると、俊輔は息を詰めた。

「海に携わる今の仕事が好きだということはわかるし、公安を怖いと感じる気持ちも十分理解できるが、娘のことを思えば、もうすこし金銭的に余裕があった方がいいだろう」

彼の窮状は調査書で把握している。

妻が生きていたころは共働きだったため幾分か余裕もあったが、父子家庭となってからはかなり生活が厳しくなっていた。娘が小学生になれば、授業料はかからなくても何かと出費がかさむのが現実だ。

俊輔は口を引き結んだ。そして隣で積み木遊びをしていた七海に手を伸ばし、まんまるの目をぱちぱちと瞬かせる小さな彼女を、自分の膝にのせてやわらかく包み込むように抱きしめる。

思案をめぐらせているのか、深くうつむいたまま微動だにしなくなった。表情は窺えない。最初のうちは父親の膝にのせられてニコニコしていた七海も、父親の様子がおかしいことに気付いて不安そうな面持ちになる。

「……わかった」

長い沈黙のあと、俊輔は短くそれだけ答えて顔を上げた。

拓海と目が合うと複雑な笑みを浮かべて肩をすくめる。情けなさとおそらくと恥じる気持ちが縋り交ぜになったような表情だ。しかし、それを感じなければならぬのはむしろ拓海の方である。

本当は俊輔をこんな薄暗い世界に近づけたくなかった。なのに楠に逆らえず、弱みにつけ込んで転職を迫るといふ卑怯なまねをした。たったひとりの親友も守れないどうしようもない男だ。

そう自嘲する一方で、彼と同僚になれることに少なくない喜びを感じていた。これからは秘密を共有できる。もう遠ざける必要はなくなる。あのころのように親友に戻ることができるのだから。

俊輔と七海は、拓海が住むマンションの二階に越してきた。

上司の楠が用意した部屋で、間取りは一階の拓海のものとはほぼ同じである。これまで住んでいたアパートより格段に広く、きれいで、親子二人で住むにはもったいないくらいだと恐縮していた。

それからは、たびたび彼の部屋に遊びに行くようになった。

遊ぶといってもビールを飲んで何かつまみながら話をするくらいだ。娘の七海が一緒のこともあるが、たいていは寝ているので二人きりである。部外者には言えない仕事の話をすることも少なくなかった。

ただ、拓海の仕事についてはほとんど話していない。最初のうちは俊輔から興味津々にあれやこれやと尋ねられたが、たとえ同僚でも、任務に無関係の人物には情報を与えられないのだ。

必然的に、例の男についての話題が多くなる。

俊輔によると、そもそも監視要員として雇われたはずなのに、勤務初日には意思疎通を図ることも命じられたという。心配する拓海をよそに、彼は嬉しそうにその仕事について語り始めた。

とりあえず男が言葉を話すのは確認したが、未知の言語のようで、何を話しているのかはわからない。ただ英語と独語に類似した部分があるので、そこから理解していけるのではないかと。

それから会うたびに進捗を話してくれた。もちろん上手くいかないこともあるようだが、それでも決して落ち込むことなく、いきいきと前向きに頑張っている様子が伝わってきた。

彼の好きな仕事を奪ってしまったことに罪悪感があったが、なんだかんだでこの仕事にもやりがいを感じてくれている。そのことに、拓海は少なからず救われた気持ちになっていた。

「アンソニー、日本語だいぶ上達したよ」

俊輔はビール片手にポテトチップスをつまみながら、声をはずませた。

アンソニーというのは例の男の名前である。フルネームはアンソニー＝ウィル＝ラグランジェ。本人がそう名乗ったらしい。公安内ではATLAS-0129というコードネームで識別しているが、俊輔だけは名前と呼ぶようになった。

アンソニーに日本語を教えるというのは上の決定だ。彼にずば抜けた学習能力があることがわかり、彼の言語を理解するよりも早いと判断されたためである。俊輔の適性も考慮したうえのことだろう。

最初のうちは意思疎通もままならないので大変だったが、きっかけを掴むと順調に進んだ。懇切丁寧に教えたのは基礎となることくらいで、あとは段階に応じて書籍や映像などを与えていけば、彼が自分で学習していくのだという。

もちろん教材だけ与えて放置しているわけではない。邪魔にならない程度に彼と会話するようにしていた。俊輔自身もそれを楽しみにしているらしく、七海が喋り始めたころを思い出すなどと言っていた。

それから数か月。

俊輔の言ったとおり、アンソニーの日本語は驚くほど上達していた。ときどき不自然な言い方をしているし、知らない言葉もそれなりにあるようだが、会話は十分に成立する。そのことをどうして拓海が知っているかというところ——。

「俺もこのまえあいつと話してきた」

「え、そうなの？」

拓海は冷えたビールを一口流し込む。

俊輔と再会するまでほとんどアルコールを飲むことはなかったが、いまは彼に付き合っただけでときどきビールを飲むようになった。せいぜいグラス二杯程度だが、酔ったと自覚したことはないのだから弱くはないのだろう。

「アンソニーとどんな話をしたの？」

「命の恩人だと嫌味を言われた」

「それ、素直な気持ちじゃないかな」

俊輔はそう笑うが、話しているときの口調や表情を見ていけば、感謝しているわけでもないことは嫌でもわかる。もっとも言い争うつもりはないので反論はしない。

「日本語は確かに上手くなってたな」

「だろう？」

俊輔は得意気にそう言い、再びポテトチップスに手を伸ばす。

「アンソニーはああ見えて素直だし真面目なんだ。それでいて話しやすいからすごく楽しいよ。年齢も僕と同じくらいだから、こんな出会い方じゃなければ、いい友達になれたと思うんだけどね」

「……………」

無邪気に声をはずませながら語り、そしてほんのり眉尻を下げる彼に、拓海は苦々しい気持ちが湧き上がる。あの男に情を移すことは俊輔のためにならない。だが、いまとなってはどうすればいいのかわからない。

公安がアンソニーに日本語を教えることにしたのは、おそらく彼から情報を引き出すためだ。拷問に掛けてでも口を割らせるつもりだろう。言葉が通じるようになればこそ可能なことである。

そのことを俊輔が知れば、片棒を担いでしまった自分自身を責めるに違いない。アンソニーがどこでどうなろうと構わないし、むしろいなくなればいいとさえ思っているが、俊輔には知られないよう配慮してもらえないだろうか——。

「どうしたの、難しい顔して」

「考えごとをしていただけだ」

「もしかしてヤキモチ？」

「……そんなわけないだろう」

一瞬、ドクリと心臓が収縮して息が止まった。

思案をめぐらせていたのはそのことではなかった。なのにこれほど動揺したのは、そういう気持ちも心のどこかにあったからだろう。一応否定したが、俊輔はどういうわけか信じなかったよ

うだ。

「安心して、これからも拓海がいちばんの親友だから」

テーブルに頬杖をついてにっこりと笑う。

奥底の不安を見透かされたようできまりが悪い。無表情を装いつつ、グラスに半分ほど残っていたビールを一気に呷る。顔が熱くなっているのはアルコールのせいだ、そう自分に言い聞かせた。

「姪御さんのためにも彼を解放してあげたいんだ。拓海から頼めない？」

あの日以来、事態はますます良くない方へ傾いた。

俊輔がすっかりアンソニーの味方になってしまったのだ。この国に来たのは誘拐された姪を探すためだ、きっとまだどこかで生きているはず、一刻も早く助けに行きたい、という彼の話を素直に信じているらしい。

そして、その姪が七海と同じくらいの年頃ということで、なおさら同情的になっているのだろう。もし彼と同じ境遇に置かれたとしたら、もし七海を助けに行けなかったなら、などと想像してしまうようだ。

アンソニーの話が本当だという根拠は何ひとつない。たとえ本当だとしても、だからといって解放してやれるほど簡単な話ではない。存在自体が秘匿されるべき最重要機密なのだ。自由にするなどありえない。

あの牢獄には常に二人以上の監視役がいて、監視カメラもついている。つまり俊輔とアンソニーの会話は筒抜けである。拓海が話すまでもなく、上司の楠は報告を受けて承知しているだろう。

いまは俊輔を利用してアンソニーの話を引き出そうとしているのかもしれない。しかし、ここまでアンソニーに傾倒しているとわかればそれも終わる。俊輔は用済みになるのだ。

どうすれば状況をわかってもらえるのか。どう言えばあの男から引き離せるのか。拓海はダイニングテーブルに腕を置いてうつむき、視界の端でビールの泡がはじけるのを見ながら、ゆっくりと口を開く。

「あいつは国家機密だ。俺が意見したところでどうにもならない」

「でもさ、拓海はお偉いさんのお気に入りだって聞いたんだけど」

「……手駒として重宝されているだけだ」

まわりから楠のお気に入りだと思われることは承知しているし、実際にマンションや射撃場など別格ともいえる待遇を受けているが、だからといって拓海のお願いを何でも聞いてくれるわけではない。

俊輔はなぜあの男が機密扱いなのかを知らないのだろうが、機密という時点で簡単に解放できないことは察しがつきそうなものだ。たとえ公安という組織をよく知らなかったとしても。なのに。

「とりあえず、頼むだけ頼んでみてよ」

藁にもすがる思いなのか、理解すらしていないのか、こちらの事情など顧みもせず押しつけ

てくる。そんなにまであの男のことが大事なのか——拓海はうっすらと眉を寄せる。

「俊輔、おまえの仕事はあいつと仲良くすることじゃない。深入りするな。詳しい事情は別の人間が聞くことになるだろう」

「それ、拷問するってこと？」

ひどく冷やかな声音でそう問われて、思わず息を詰めた。まるで責められているかのように感じる。いや、実際に彼は責めているのかもしれない。

「やっぱりそうなんだね」

「俺は何も聞いていない」

「でもそう思うんだよね」

「……………」

いつになく鋭い追及に何も答えられなくなる。逃げるようにグラスに手を伸ばして、心持ちぬるくなったビールを煽り、小さく息をつく。

「なあ、あいつが本当のことを言っているとは限らないだろう。おまえの同情をひくために嘘をついているかもしれない。あまり肩入れすると、あとで裏切られてつらい思いをすることになるぞ」

「彼が嘘を言っているとは思えない」

俊輔の目は曇りなくまっすぐ前を見据えていた。自分の言葉が、心が、彼に届かないことがもどかしくてたまらない。空になったグラスを持つ手にグッと力がこもる。

「おまえはお人好しすぎるんだ」

「……そうかもな」

彼はわずかに眉を寄せたあと、ふっと笑う。

拓海はなぜだか無性に胸がざわつくのを感じた。

「悪いけど、もうお開きにしていい？」

「ああ、遅くまで悪かった」

掛け時計に目をやると、まもなく午前零時になろうとしていた。もうすこし遅くまでいることもあるが、そろそろ帰るべき時間なのは確かだ。なのに、拒絶されたように感じてしまうのは気のせいだろうか。

だからといって真意を尋ねるような勇気はない。空のグラスや食べかけのスナック菓子を放置して玄関に向かい、靴を履くと、見送りに来ていた背後の俊輔にちらりと振り返った。

「俺は、いまでもおまえのいちばんの親友なのか？」

「……そのつもりだけど」

俊輔は曖昧に微笑んで肩をすくめる。

拓海は何も言えず、背を向けたまま軽く片手を上げて部屋を出た。その扉が閉まるやいなやガチャリと鍵がかけられる。思わず白い息を吐くと、無機質に響く靴音を聞きながら階段を下りていった。

「脱走……?!」

俊輔と言い合いになってから数日後の夜。

別件で警察庁を訪れていた拓海は、上司の楠から例の男が脱走したという話を聞き、大きく息を飲んだ。まず頭をよぎったのは俊輔のことだ。嫌な予感にドクドクと鼓動が速くなるのを感じる。

「監視役はどうしたんですか」

「監視役二名と警備役三名はみな気絶させられていた。不意を衝かれて声も上げられなかったらしい。相当な手練れだな、あの男は。おかげで脱走に気付くのが遅れてしまった。いま捜索のために招集をかけているところだ」

楠は執務机で手を組み合わせながら、淡々と答えた。

拓海も常に冷静でいられるよう心がけてはいるものの、なかなか彼のようにはいかない。現にさきほどから心臓が早鐘のように打ち続けており、じわじわと嫌な汗までにじんできた。

「鍵やセキュリティは？」

「牢の鍵は壊されることなく開けられていた。各種セキュリティはなぜか切られていた。牢の監視カメラは今日の夕方に故障していた。いずれもあの男ひとりではできないことだ。内部に協力者がいたとしか考えられない」

俊輔にここまでできるだろうか。

そんな疑問が頭をもたげたものの、必要な情報さえ得られればそう難しくないかもしれない。持ち前の人なつこさで他の職員とも親しくなっていたので、警備について聞き出すことも可能なはずだ。

本来ならこのような背信行為に及ぶ人間ではないが、浅はかにもこれが正義だと思い込んでいるのなら、そして事の重大さを正しく理解していないのなら、実行することも十分にありうる。

「心当たりがあるのだな？」

「……確信はありませんが」

そうごまかしたものの、楠にはその心当たりが何なのか見当がついているのだろう。いつも拓海の思考など簡単に見透かしてしまうのだ。だからこそ、もはやこの事案から目をそむけるわけにはいかない。

「私に任せてもらえませんか」

「いいだろう」

楠は隙のないまなざしで見つめ返した。

「いまさら言わずともわかっているだろうが、この事案は、国家に対する反逆行為と見なされる。たとえ誰であろうと決して許されない。誰であろうとな……君は、私を失望させるなよ」

それは忠告であり、警告だ。

わかってはいたが、もう逃げ道がないのだとあらためて思い知らされた。背筋が凍りつくのを感じる。それでも表情を動かすことなく丁寧に一礼すると、無言で執務室をあとにした。

「その件なら聞いたよ」

俊輔の部屋を訪れ、例の男が脱走したことを告げると、彼は顔色も変えずに平然とそう応じた。いつものようにスリッパを出して拓海を招き入れ、リビングに向かいながら話を続ける。

「一時間ほどまえに電話が来てさ、彼が脱走したから緊急招集って言われたけど、七海をひとりにできないから断ったんだ。それで疑われたのか、すこし前に職員がふたり来てこの部屋を調べていったよ。もちろん誰も匿ってなんかいないけどね」

彼は饒舌だった。

おかげでおおよその状況は把握できた。公安は彼だけでなく関係者全員を調べているはずだ。階下にある拓海の部屋もすでに調べられているだろう。脱走した男を確保することが最優先なので、まずは匿っていないかだけを確認したのだ。犯人捜しはおそらく一段落してからになる。そうならば――。

「ビール飲む？」

「いや、工作中だ」

勧められたダイニングテーブルには向かわずに、リビングの中央で足を止めた。そしてゆっくりと体ごと振り向いて、こころなしか表情を硬くした俊輔に、真剣なまなざしを送る。

「おまえが、脱走に手を貸したのか？」

「……だったらどうする？」

彼はぎこちない微笑を浮かべた。

瞬間、全身の血が一気に逆流したように感じた。何の相談もなしにこんなことをしでかしたあげく、まるで敵対するように挑発的な態度を取るなんて。俺はおまえの親友じゃなかったのか――。

「アンソニーは世間に公表できない存在なんだろう？ だとすれば、僕を逮捕して裁判に掛けるわけにはいかない。せいぜいひっそりとクビにするのが関の山じゃないか？」

「おまえは、何もわかっていない」

静かに握ったこぶしが震える。

一般常識の通用しない世界であることは理解していても、実情は知らなかったのだろう。それゆえ見立ては甘い。失職という重大な覚悟を決めたつもりかもしれないが、その程度ではすまないのだ。

――彼を解放してあげたいんだ。拓海から頼めない？

そう持ちかけられた数日前のことが頭をよぎる。いま思えば、あのときにはすでに脱走計画を立てていたのだろう。それでも実行するにはためらいがあり、どうにか回避したくて別の方法にすがって見たのではないか。

それに気付いてさえいれば、思いとどまらせることは難しくなかったはずだ。裏切り者の末路がどうなるかを教えるだけでいい。信念があったとしても命まで懸けられはしない。彼には幼い娘がいるのだから。

あのとき、どうしてもっと真剣に彼と向き合わなかったのだろう。どうして議論を尽くさず曖昧なまま放置していたのだろう。おかげで気付けたはずの機会をみすみす逃してしまった。いまとなっては後悔するよりほかにない。

正面の俊輔は、反抗的なまなざしで拓海を見据えている。

もはや親友とは思われていないのかもしれない。アンソニーの方が大事なのかもしれない。それどころか敵と見なされているのかもしれない。それでも拓海にとってはただひとりの親友なのだ。

無表情のまま、俊輔から目をそらすことなく静かに距離を詰める。そして自分と背丈の変わらない身体を左手で抱き寄せると、その肩に顎をのせてもたれかかった。衣服越しに彼のほのかな体温を感じて吐息を落とす。

「拓海？」

俊輔の声はあきらかに戸惑っていた。

当然だろう。こんなふうに抱き合うことなんて一度もなかったのだから。それどころかふざけてじゃれ合うようなことさえなかった。せいぜい何かの拍子にぶつかったり触れたりするくらいだ。

ドクドクドクドク——心臓がいまにも破裂しそうなくらい激しく暴れている。意識的にゆっくりと呼吸をしても鎮まる気配がない。彼にもこの激しい動悸が伝わっているかもしれない。

「どうしたんだ、気分でも悪いのか？」

「もうすこしこのままでいさせてくれ」

「いいけど……」

自分の右手がかすかに震えているのがわかる。それでも引き下がるわけにはいかない。袖に忍ばせたナイフをひそかに手に取ると、そっと狙いを定めて奥歯を食いしばり——力いっぱい振り下ろす。

「っ……ぐあ……」

首筋に突き立てたナイフから、肉と骨の生々しい感触が伝わってきた。確実に動脈を切るようにグッと前後に動かし、一気に引き抜く。傷口から生温かい鮮血がドクドクとあふれ出した。

言葉にならない苦しげな呻き声は次第に弱まっていく。それとともに体からも徐々に力が抜けていくのがわかり、抱く手に力をこめる。二人の足元にはみるみる血溜まりが広がっていった。

やがてだらりと動かなくなった彼をそこに横たえると、瞼を閉じさせた。その手で頬に触れる。もうすっかり血の気が失せているようで白く見えるが、まだほんのりとぬくもりが感じられた。

俺は、おまえが好きだった——。

融けそうなほど目が熱くなり視界が歪む。やがてこらえきれずにあふれた涙が頬を伝い、俊輔の目元にぽたりと落ちる。しかし、彼はもうピクリとも動かなくなっていた。

第18話 身勝手な復讐劇

「まったく、面倒なことになったな」

上司の楠は椅子の背もたれに身を預けながら、正面に立つ拓海を見る。

その溜息まじりの声からも、じとりとした視線からも、失態に対する呆れがはっきりと感じ取れた。拓海はこれ以上ないほど深々と頭を下げて謝罪する。

「本当に申し訳ありませんでした」

「まあいい。あとは任せておけ」

楠が問題視したのは、俊輔を殺したことでなく、その後の対処を怠ったことだ。

本来、事を起こしたあとはすぐに楠の指示を仰がなければならない。しかしながら親友を手に掛けたことで平静を失ってしまい、連絡も忘れ、自分の部屋でぼんやりとシャワーを浴びていたのである。

どうやらその間にアンソニーが俊輔の部屋を訪れたようだ。脱走してまもないこのときに、なぜ協力者に接触するという危険を冒したのかはわからない。ただ、彼が俊輔の遺体を発見して110番通報したのは確からしい。

それゆえ殺人事件として捜査が始まってしまったのである。幸か不幸か、娘の七海がアンソニーを目撃していて、彼が重要参考人として手配されている。拓海はいまのところ捜査線上にも上がっていない。

楠はその事件ごと警察庁で引き取ろうというのだろう。俊輔は公安の所属なので、任務上の機密事項に抵触するなど理由はこじつけられる。納得はさせられなくても、それなりに筋が通ってさえすればいいのだ。

「連絡するまで自宅で待機している」

楠は事務的な口調でそう告げて、執務机に置かれた電話に手を伸ばすが、拓海はそれを遮るように声を上げる。

「お願いがあります」

「何だ」

隙のない視線で促され、緊張でじわりと汗がにじむのを感じた。それでも言わないという選択肢はない。ごくりと唾を飲み込んで口を開く。

「坂崎の娘も死んだことにしていただきたい」

「どういうつもりだ」

「私があの子を、坂崎七海を引き取ります」

「何も死んだことにする必要はないと思うが」

「……………」

何も答えられず硬い面持ちで視線を落とす。さすがに本当のことを話す勇気はない。あきらめるしかないと思ったそのとき——彼はわずかに口もとを上げて、挑むようなまなざしを投げかけてきた。

「高くつくぞ」

「承知しています」

拓海は姿勢を正して真摯に答える。

自分にまだ十分利用価値があることも、それなりに気に入られていることも、すべて計算の上で願い出ているのだ。何を求められたとしてもいまさら驚きはしない。これまでも、さんざん非道なことを命じられてきたのだから。

自宅マンションに戻るとすぐに、楠から電話がかかってきた。

七海を迎えに行けと言われて所轄の警察署に向かう。身寄りがないため警察署で保護されていた彼女を、ひとまず父親の友人として拓海が預かれるよう、楠が手配してくれたのだ。

「あちらです」

若い女性警察官に案内された先に、七海がいた。

彼女はおとなしく窓際のソファでジュースを飲んでいて、いつもよりぼんやりとはしているが、父親の惨殺現場を目にしたとは思えないほど落ち着いている。幼さゆえにまだ状況が理解できていないのかもしれない。

女性警察官に聞いたところ、通報を受けて駆けつけたときには意識を失くして倒れていたらしい。それも血溜まりの上に。そのせいで七海自身も衣服も血みどろになっていたため、署で身体を拭いて着替えさせたという。

目を覚ましたときは喋ることさえままならない状態だったが、着替えてから平静を取り戻したそう。職員の聴取に応じて目撃情報を話したというので、記憶はなくしていないのだろう。

「七海、大丈夫か？」

「おじさん？」

拓海の姿を認めると、七海はほっと安堵の息をついて表情を緩ませた。落ち着いたとはいえやはり心細さはあったようだ。事情もわからないまま、知らない大人たちに知らないところへ連れてこられたのだから無理もない。

拓海はローテーブルを挟んだ正面に腰を下ろし、前屈みで彼女を覗き込む。

「七海、これからは俺と暮らそう」

「お父さんが死んじゃったから？」

「.....そうだ」

七海はいまにも泣きそうな顔になりながら、こくりと頷いた。くりくりとした大きな目いっぱい涙をためているが、口をきゅっと引き結び、こぼさないよう必死にこらえている。

父親の死を理解していないのかと思ったが、そうではなさそう。

おそらくいつもどおり良い子でいようとしているのだろう。他人の邪魔にならないように過ごし、尋ねられたことには素直に答え、気に入らないことでも我慢する。彼女にそういう節があることは以前から気付いていた。

その頭に手を伸ばして、ぽんとのせる。

瞬間、堰を切ったようにぽろぽろと涙の粒をこぼし、顔をゆがめて息苦しげにしゃくり上げ始

めた。泣きたいだけ泣け——拓海は無表情でそう告げると、彼女の涙がおさまるまでじっと待ち続けた。

「七海、お父さんの敵を取ろう」

冷たい蛍光灯の下、拓海はやわらかい小さな手を握って言う。

ストレッチャーに寝かされた俊輔の遺体には布が掛けられ、顔だけしか見えない。血がきれいに拭き取られているためか、寝ているだけのようにも見えるが、首筋から覗く傷が惨劇を物語っている。

遺体安置所まで案内してくれた若い女性警察官は、気をきかせて外で待っている。それでも声が届いてしまう可能性はあるのだから、こんな話をするべきではないが、気持ちが昂ぶってどうしても抑えられなかった。

「かたき？」

「お父さんを殺した男を殺すんだ、七海のこの手で」

俊輔の遺体を見つめたまま、つないだ手にそっと力をこめながらそう言うと、彼女はこくりと頷き、そのやわらかい小さな手で健気に握り返してきた。彼女にはもう拓海の手しか頼るものがなかったのだ。

こうして、拓海は何も知らない幼い彼女を、身勝手な復讐劇に巻き込んでいった。

七海は素直だった。

日々、ラ・カンパネラのオルゴールを鳴らしながら、お父さんの敵を取ろうと言い聞かせるが、嫌がったことはただの一度もない。殺すという物騒なことも当然のように受け入れている。

拳銃の扱いを教えても素直なだけに飲み込みが早い。もちろん理解はしていても思うようにできないこともあるが、努力を惜しまず、できるようになるまで繰り返し練習を続けていた。

学校にも行けない境遇を嘆きもせず、わがままも言わず、言いつけをよく守り、ひたむきに努力し、目的に向かってまっしぐらに進んでいく。彼女のまっすぐな心には疑念など一切なかった。

。

一方、拓海の気持ちは次第に揺らぐようになった。

七海を復讐に利用することがいかに道理に反しているか、初めからわかっていたつもりだった。わかったうえで決意したつもりだった。けれど、その無垢なまなざしを向けられるたびに罪悪感に苛まれた。

本来なら拳銃など一度も手にすることなく、学校に通い、友達と遊び、子供らしく楽しい日常を送っているはずなのに。いまならまだ間に合う。取り返しがつかなくなる前に社会に戻すべきではないか。

しかし、復讐を完遂するにはやはり俊輔の娘が必要なのだ。簡単にあきらめられるくらいなら初めから巻き込んでいない。七海にしても、いまさらやめろと言われたところで納得はできないだろう。

そんな結論の出ない自問自答をするようになったころ、突然、あの男の似顔絵がテレビに映し出された。ごまかす間もなく七海は確信の声を上げる。いくらなんでもまだ早い——ひそかに動揺する拓海を置き去りにして、復讐の歯車は回り始めた。

どこで間違った。何を間違った——。

重く垂れ込めた鉛色の空から、ぽつぽつと雨が降り始める。

拓海は後頭部を殴られて倒れていたが、顔に冷たい雨粒が落ちるのを感じてうっすらと目を開く。最初に視界に映ったのは俊輔の墓石だった。何となく彼が泣いている気がして奥歯を噛みしめる。

体をよじると、わずかに動いた足先に何か硬いものが当たった。見なくても拳銃だとわかった。去りぎわにあの男が投げつけていったのを覚えている。死にたければ勝手に死ね、と——。

そうだ、最初からそうすれば良かったんだ。

拓海は重たい体を起こして拳銃を拾うと、自らのこめかみに銃口を当て、引き金にゆっくりと人差し指をかける。誰よりも死ななければならぬのは自分だ。あの男はともかく、七海を復讐劇に巻き込むべきではなかったのだ。

きっと、俊輔は許してくれないだろうな。

急に雨が強くなった。顔や首筋を幾筋もの雨水が伝い落ちていくのを感じながら、墓石を見上げて薄い自嘲の笑みを浮かべる。目を閉じ、気持ちを落ち着けるように小さく呼吸をすると、引き金にかけた指にゆっくりと力をこめる。

「ダメ！！！」

その声にビクリとして振り向くと、七海が雨を蹴散らしながら飛びかかってきた。拳銃を両手で掴み、思いきり引き上げて銃口を空に向けさせると、指をちぎらんばかりの勢いでもぎ取った。

彼女は降りしきる雨に打たれながら仁王立ちし、怒ったような泣きそうな顔で口を引き結び、啞然とする拓海を睨みつけていた。奪い取った拳銃を震えるほど強く握りしめ、口を開く。

「家族が死ぬのはもう嫌だ」

「……俺は、家族じゃない」

「パパって呼ばせたくせに」

彼女はいまにも泣き出しそうな顔で笑いながら、揶揄するように言った。声はすこし震えている。もしかしたらすでに泣いているのかもしれない。目が潤んでいるのは雨のせいではないだろう。

ザー……。

沈黙を覆い隠すように雨音が大きくなる。

二人とも髪から衣服まで全身ずぶ濡れになっていた。それでも時が止まったかのように動かない。夢か現実かも曖昧になる中で、打ちつける雨だけがかりうじて現実を伝えていた。

やがて、彼女は詰めていた息を吐いて背を向けた。拳銃を持っていない方の手を体の横でゆっ

くりと握り、ほんのすこしだけ俊輔の墓石の方に顔を向け、戸惑いがちにうつむく。

「お父さんならわかってくれると思う。拓海が苦しんだこと」

「……………」

雨に掻き消されそうな弱い声だったが、拓海の耳には届いた。

彼女はこぶしに力をこめると、振り返ることなくぴしゃぴしゃと水たまりを踏んで走り去っていく。その向かう先にうっすらと見える人影はあの男だろう。次第に小さくなり霞んでいく彼女の後ろ姿が、俊輔に重なって見えた。

土砂降りの雨の中、拓海は地面に突っ伏して慟哭した。

第19話 身寄りのない少女

ぐす……すん……。

七海は後部座席で武蔵にもたれながら、ずっとすすり泣いている。

二人とも血と雨でどろどろに濡れてひどい有り様だ。座席どころか足下まで大きく染みが広がっている。そこに転がっている父親の形見ともいえるイルカのぬいぐるみも、元の色がわからないくらいに汚れている。

武蔵の肩の傷にはタオルがあてがわれているが、まだ完全に血が止まっていないようで赤く染みてきている。顔はひどく青白く、息も苦しそうだ。それでも七海を守るように抱き寄せてくれている。

ただ、濡れているせいか出血のせいかわからないが、触れているにもかかわらず体温が感じられない。肩にまわされた腕も次第にぐったりとしていく。かすかに伝わる鼓動と呼吸だけが望みだった。

フロントワイパーがせわしなく往復する。

助手席の遙はちらちらと後部座席を覗いていたが、やがて急いでと声をひそめて隣に指示を出す。執事の櫻井は緊張した面持ちで頷き、信号を守りながらも脇道に入って速度を上げた。

「ん……う……」

七海が目覚めたのは、あたたかくやわらかいベッドの上だった。

隣には武蔵がいた。上半身は裸のようで、肩に巻かれた白い包帯が上掛けから覗いている。素肌に触れてみるとほんのりとあたたかく、静かに寝息を立てているのもわかる。生きてるんだとほっと息をついた。

もぞもぞと彼に身を寄せ、寝る前のことをぼんやりと思い返す。

橘の屋敷に帰るとすぐにシャワーを浴びるよう言われた。べっとりをついた血や泥の汚れを落とし、新しい衣服に着替えてバスルームを出ると、ソファにいた遙においでと手招きされて向かいに座った。武蔵は別室で傷の手当てを受けている、もうすぐ食事の準備ができるから食べよう——そんな話をされたことは覚えている。

しかし、そこから先の記憶がない。

おそらくソファに座ったまま眠ってしまったのだろう。そうであれば、誰かがベッドに運んでパジャマに着替えさせたことになる。武蔵だったらいいが、ひどい怪我をしているのだから違うような気がする。

そもそもどうして武蔵と一緒に寝ているのかもよくわからない。けれど、おかげで目を覚ましてすぐに彼が無事だとわかったし、彼のぬくもりを感じて安心できたのだから、七海としてはありがたいがたかった。

ふいに拓海のことを頭をよぎる。

死にたければ勝手に死ね——そう言い捨てた武蔵とともに一度はその場を去ったが、嫌な予感がして戻ったら本当に拳銃自殺しようとしていた。すんでのところで止めたものの、その後のこ

とはわからない。

父親を殺したのは拓海だと知って、ずっと自分を騙していたとわかって、言い表すことができないほどショックだった。彼なりの事情があったにしても許す気にはなれないし、一緒に暮らすのはもう無理だと思う。

だからといって死んでほしくはない。

四年半ほど一緒に暮らして、嬉しいことも楽しいこともたくさんあった。憎めたら楽なのかもしれないが憎みきれない。親友を手に掛けた痛みを感じながら生きてほしい、それが素直な気持ちだ。

ぐるぎゅるるるる——。

布団の中で盛大におなかが鳴った。

そのせいで思い出したように空腹を感じてしまう。頭を起こしてヘッドボードの時計を見ると、午後三時近くになっていた。ずっと寝ていたとはいえ、きのうの夕方から何も食べていないのだから、おなかが空くのも無理はない。

「七海の腹の虫はいつも騒がしいな」

かすかな笑いを含んだ声がすぐ隣から聞こえた。振り向くと、武蔵が口もとを上げてこちらに目を向けていた。恥ずかしさにカッと顔が熱くなるのを感じながら、口をとがらせる。

「いつから起きてたんだよ」

「その音で目が覚めたんだ」

「嘘だ」

いくらなんでもそこまで大きな音ではなかったはずだ。思いきり眉をひそめて抗議の意を示すと、彼は小さく笑い、もぞりと布団から手を出して七海の頭に置いた。その手にも白い包帯が巻かれている。

「俺も腹ペコだ。何か食べるものを用意してもらおうか」

「うん！」

腹を立てていたことも忘れて、七海は破顔した。

武蔵はすぐに体を起こしてヘッドボードの電話を取り、二人分の食事を頼む。相手の声は聞こえなかったがどうやら使用人のようだ。この部屋まで運んでくれることになったらしい。

そのあいだ、七海は横になったままじっと彼の上半身を見つめていた。傷は白い包帯で覆われていて血もにじんでいないが、きのうのひどい出血を思い出してしまい、自然と眉が寄る。

「心配するな。俺は相当頑丈にできてるらしい」

視線に気付いたのか、彼は受話器を置くと冗談めかしてそう言った。

確かに意識が朦朧としていたきのうよりは良くなったのだろうが、まだ動作は多少ぎこちなく見える。七海を不安にさせないよう無理をしているのかもしれない。そう思うと何を言えばいいのかわからなくなり、ただ小さく頷くしかなかった。

「食事が来るまえに着替えよう。七海の服はそこだ」

「うん」

武蔵が指さしたのはベッド脇の椅子だった。きのうシャワーのあとに着ていた服が無造作に投げ置かれている。彼がベッドから降りてシャツに袖を通しているのを見て、七海も急いで着替え始めた。

「おいしい！」

丸テーブルに用意された食事を一口食べるなり、七海は声を上げた。

ハンバーグがびっくりするくらいやわらかくてじゅわっとしている。コーンスープも濃厚で自然な甘みがあり、サラダもみずみずしくドレッシングが絶妙で、ごはんももちりふっくらとしている。

コンビニのハンバーグ弁当もおいしくて気に入っているが、まるで次元が違うように感じた。武蔵のところで食べたスパゲティといい、世の中にはそういったものがまだまだたくさんあるのかもしれない。

空腹だったこともあり、口のまわりにソースがつくのも厭わず頬張っていく。隣の武蔵がその様子を見ながらくすりと笑った。彼もおなか为空いていると言っていたが、がつつくことなく行儀よく食べている。

「あー、おなかいっぱい！」

ごはんもコーンスープもおかわりして、食後にはプリンも食べて、おなかはパンパンになっている。動くのも苦しいくらいだ。こんなにたくさん食べたのはいつ以来か思い出せない。

武蔵もおかわりこそしなかったものの完食していた。左手をナイフで切られているうえ肩も撃たれているが、食事をするのにさほど支障はなかったようだ。氷の入ったグラスの水を飲んで一息つく。

「七海は普段どんなものを食べてたんだ？」

「コンビニのお弁当とかお菓子とかだけだ」

「そうか……」

何気ない会話のあと、彼は急に表情を曇らせてうつむいた。

七海はどうしてそんな顔をするのかわからずきょとんとしたが、すぐに話題が変わり、かすかに浮かんだ疑問は意識する間もなく霧散してしまった。

「よかった、元気そうだね」

食事を終えてノートパソコンに向かっている武蔵の隣で、特にすることもなくソファに身を預けてうとうとしていると、遙が部屋に入ってきた。学校の制服らしきブレザーを身に着けている。

「学校、行ってるの？」

「今日は平日だからね」

「学生だったんだ」

「高校生。見えない？」

「うーん……」

言われてみればそのくらいの年齢に見えなくもないが、とても学生とは思えなかった。まじまじと観察して首をひねるものの、彼は気にする様子もなく向かいのソファに腰を下ろす。

「七海、これからのことだけど」

ドキリと鼓動が跳ねた。

拓海のところにはもう戻らないと決めていたが、それ以上のことは何も考えていなかった。どうしたらいいのかと不安でそわそわしながら、感情の読めない遥の顔を見つめて続きを待つ。

「まずは戸籍回復の手続きを取ろうと思う。死んだことになっている戸籍を復活させるんだ。そうすればもう隠れて暮らさなくてもよくなるし、他の子と同じように普通に生きられるよ。手続きはこっちでするから任せてほしい」

「うん」

そんなことができるなんて考えもしなかった。

隠れて暮らしていたのは死んだことになっていたからだ。買い物には出ることは許されていたが、許可された時間帯だけで、近所の店も避けなければならなかった。誰かと個人的に親しくなることも許されなかった。そういうことが全部自由になるならいいなと思う。

「それから、七海にはうちで暮らしてもらおうと思う」

「えっ……なんで……？」

「君のお父さんが亡くなったことに武蔵が関わっているのなら、うちの責任でもあるからね。成人するまで面倒をみようということになったんだ。学校にもきちんと通えるようにする」

そういえば、武蔵に遥との関係を尋ねたら親戚だと言っていた。うちの責任というのはつまりそういうことなのだろう。でも——硬い表情でうつむき、膝に置いた小さな手をゆっくりと握っていく。

「ここで暮らすなんて嫌だ」

「どうして？」

さらりと聞き返されるが、いろんな感情が絡み合って自分でもよくわからない。嫌なことはたくさんあるのにうまく説明できない。汗ばんだこぶしを握りしめて顔をうつむける。

「知らない人がいっぱいだし」

「心配しなくても、七海ならすぐにみんなと仲良くなれると思うよ。どうしても合わない人とは無理に仲良くしなくてもいいし、もし何かあったら、僕に言ってくれればできるかぎり対処するから」

思いのほか真摯に答えてくれたことに驚くものの、納得したわけではない。すぐに仲良くなれるなんて子供だましの気休めだ。それに——じとりと上目遣いで睨みつつ口をとがらせる。

「そもそも遥が怖いんだけど」

ぼそりと言うと、彼はおかしそうにくすりと笑った。

「そういえば七海との出会いは最悪だったね。でも、不審者相手じゃなければあんなことはしないよ。あんまり優しくはないかもしれないけど、話は聞かつもりだし、言いたいことがあれば遠慮なく言ってほしい」

「うん……」

まだここで暮らすことを了承したわけではないが、遥ならちゃんと話を聞いてくれるかもしれない、無理強いしないかもしれない、そんなふうに彼をすこし信頼する気になった。けれど――

「まだ嫌なことや心配なことがある？」

「……学校には行きたくない」

「残念だけどそれは聞き入れられない。七海は義務教育を受けるべき年齢なんだ。いままでは死んだことになってたから学校へ行けなかったけど、生きていることがわかったからには行かせないわけにはいかない」

淡い期待は打ち砕かれた。

七海としては、この屋敷で暮らすより学校へ行くほうが怖かった。父親がいたころは小学校に入学することを楽しみにしていたし、普通に入学していたら楽しい学校生活を送っていたかもしれないが、いまさら知らない集団に放り込まれるのは恐怖しか感じない。

「じゃあいいよ、ひとりで生きてくからほっといて」

「子供の君がどうやってひとりで生きていくの？」

「働いてお金を稼げばいいんだろ」

「働くにしてもまわりは知らない人ばかりだけどね」

「……………」

頭の中がまっしろになった。

遥は淡々と畳みかける。

「七海は長いあいだ二人きりの閉じた世界で暮らしてきたから、集団生活を怖がるのは当然かもしれない。でも克服しないことにはまともな社会生活を送れない。いまは子供だからいいけど、大人になったらそれでどうやって生きていくつもり？」

「おまえ、子供相手にそんな厳しいこと言うなよ」

それまで黙ってなりゆきを見守っていた武蔵が、我慢しきれなくなったのか、非難するように眉をひそめて口を挟んだ。しかし、遥はすこしも表情を変えずに反論する。

「厳しくても七海が知るべき現実だよ」

「でも言い方ってものがあるだろう」

「婉曲に言うと伝わらないんじゃない？」

「それは、そうかもしれないが……」

武蔵は渋い顔で言いよどみながら腕を組んだ。小首を傾げて考え込んでいたかと思うと、ふいに何か思いついたような顔をして、正面の遥に目を向ける。

「しばらく俺に七海を預らせてくれないか」

「……………」

遥がわずかながら目を見開いたのがわかった。それでも表面上の冷静さは失っていない。挑むような鋭いまなざしで見つめ返して言う。

「それで、学校はどうするつもり？」

「すぐに行かせなくてもいいだろう」

武蔵はそう答え、隣の七海をちらりと見やる。

「長いあいだ世間から切り離されてきたんだ。急激に環境が変わりすぎるのは良くないだろう。七海の気持ちもそんなすぐには追いつかないだろうし、徐々に慣らしていくのがいいんじゃないかと思う」

「僕もそれがいい、武蔵のところで暮らしたい！」

七海はローテーブルに手をついて身を乗り出し、必死に訴えた。

こんな知らない人だらけの大きな屋敷で暮らすより、あの山小屋の方がずっといい。武蔵と二人きりなら安心できる。武蔵の作ったごはんもまた食べたい。そして何より学校に行かなくていいと言ってくれた――。

遥はその思い詰めたまなざしから目をそらして、腕を組んだ。七海をどうするかについて真剣に考えているのだろう。迂闊に声を掛けられないくらい難しい顔をしている。やがて視線を上げ、身を乗り出したままの七海をじっと見つめて尋ねる。

「武蔵が原因でお父さんが殺されたって話だけど、いいの？」

「うん……それは武蔵が悪いわけじゃないし、恨んでないよ」

「わかった」

そう言うと、溜息をついて静かに切り出した。

「武蔵の言うことは確かに一理ある。僕はちょっと急ぎすぎてたのかもしれない。七海の状況と年齢をもうすこし考慮すべきだった。七海が希望するなら、しばらくはリハビリってことで武蔵に預かってもらおうと思う」

「本当?!」

七海は大きく目を見開いて顔をかがやかせた。勢いよくソファに腰を下ろして武蔵に寄りかかる。よかったな、と白い包帯を巻いた手で頭をなでられ、はじけるように満面の笑顔になって頷いた。

「武蔵、あんまり甘やかさないでよ」

「わかってる」

遥は胡乱な目を向けるが、武蔵は気にする様子もなくさらりと受け流していた。

七海には甘やかすということがよくわからなかったが、頭をなでたり笑いかけたりしてくれることなら、これからもずっと武蔵に甘やかされたいと思った。

その三日後、武蔵の山小屋で二人きりの生活が始まった。

第20話 夢の終わり

「ごちそうさまでした！」

七海は両手を合わせて元気よく声を弾ませた。

今日の昼食は、ごはん、ぶりの照り焼き、豚汁、ほうれん草のおひたしだった。空になった二人分の食器を手早く集めてシンクに運び、泡立てたスポンジで洗っていく。

「なに？ ちょっと邪魔なんだけど」

ふいに何かがずっしりと肩にのしかかるのを感じて、口をとがらせる。それが武蔵の仕業であることは見るまでもなくわかった。彼は七海の肩にもたれかかるように腕をのせたまま、若干言いつらそうに切り出す。

「このあと海に行きたいんだけど、駄目か？」

「あれ、今日は本屋に行くんじゃないか？」

「予定変更」

「それはいいんだけど、この真冬になんで海？」

「泳ぐわけじゃないぞ。眺めに行くだけだ」

「ん、わかった」

そう答えた七海に、武蔵はありがたうなと大きな手をぽんと置いた。どうして礼を言われたのかわからずきょとんとするが、彼は曖昧に微笑むだけで、のんびりとした足取りで日の当たるリビングへと戻っていく。

七海はシンクに向きなおると、泡のついた手で水道のレバーを上げ、食器をすすいでいった。

武蔵と山小屋で暮らすようになってから、一年半が過ぎた。

家にいるときの食事はいつも武蔵が手作りしてくれる。いままでずっとコンビニ弁当やお菓子ばかりだったと知り、うちではまともなものを食わせてやるからな、とやたら意気込んでいたのである。

七海も手伝っているが、食器の用意をしたり、材料を出したり、野菜を洗ったり、皮を剥いたりとその程度だ。武蔵とわいわい言いながら準備をするのは楽しいけれど、役に立っているとは言いがたい。

せめて、ということで後片付けだけは任せてもらっている。武蔵はそこまでしなくていいと言ってくれたが、七海が望んだのだ。拓海と暮らしていたときからしていたことなので、得意だという自負もあった。

しかし、以前は食器が少なくてずいぶん楽だったのだと、ここで後片付けをするようになって初めてわかった。今は食器が多いうえに鍋やフライパンもあってなかなか大変である。ガスコンロやレンジもきれいにしなければならない。それでも、続けていくうちにだいぶ手慣れてきたのではないかと思う。

「よしっ！」

きれいになったシンクやガスコンロを見て、腰に両手を当てて頷く。

武蔵はもう出かける準備をすませているようだった。七海も急いで準備をする。お気に入りのセーターとショートパンツに着替え、その上に厚手のブルゾンを重ねて真冬仕様にした。黒の靴下は膝上まであるので脚もあたたかい。

「準備できたか？」

「うん」

「じゃあ、行こう」

武蔵が投げてよこした小さめのヘルメットを、七海がキャッチする。いつものことなので慌てたりはしない。彼とともに山小屋を出ると、うきうきしながらバイク置き場に向かった。

こんなふうのんびり遊びに出かけられるのは、土曜日だからだ。

平日の午前中は屋内や屋外で体を動かすことになっている。軽いジョギング、腹筋や背筋、縄跳びなどをすることが多い。最近では、護身術や格闘術も武蔵に教えてもらうようになった。

そして午後はみっちり嫌になるくらい勉強させられている。それも橘の用意した男性家庭教師にずっと付かれたままで。教えるのは上手いが、冗談さえ通じない堅物なのでどうにも息苦しくて仕方がない。

しかし、土日は学校と同じように休みだ。

せっくなので、よほどの荒天でないかぎり遊びに出かけていた。武蔵と二人きりのこともあれば、遙と一緒にすることもある。そのときは、必ずといっていいほど武蔵の姪のメルローズもついてきた。

彼女は幼いころに拉致されて行方不明になっていたものの、二年ほどまえに武蔵に救出され、今は橘財閥会長で遙の祖父でもある橘剛三の養女となっている。こういう境遇のせいか、単に可愛いからか、みんな彼女にはすこぶる甘い。

実際、甘やかされるのがよく似合う綿菓子みたいな子だ。やわらかそうな白い肌、小さな唇、赤みがかった髪と瞳、細くすらりとした手足、どれをとってもお人形みたいである。七海のひとり年下とは思えないくらい外見も中身も幼い。

そんな彼女のことを七海はすこし苦手を感じていた。武蔵の姪だから仲良くしなければと思っていたが、彼女が甘えているのを見るとイライラするし、甘やかされているのを見るとモヤモヤしてしまう。

だから、こうやって武蔵と二人きりで出かけられるのがいちばん嬉しい。バイクに二人乗りをして、彼の大きな体に腕をまわしてしがみつき、その体温をひとりじめしていると、心から安心していられた。

「あれ、ここって……」

バイクの後部座席から降りてヘルメットを取り、潮風を感じながら正面の景色を目にすると、不思議と懐かしい気持ちになった。どこかで見たことがあるような気もするが、思い出せない。

「そうか、七海は来たことあるかもしれないな」

ふと、武蔵がフルフェイスのヘルメットを置きながらつぶやいた。しかし、少なくとも彼と一緒にここへ来たことはないはずだ。七海はわけがわからず怪訝に眉をひそめて振り向く。

「どういうこと？　なんで武蔵が知ってるわけ？」

「以前、この辺に住んでたって俊輔に聞いたんだ」

「そうだったんだ……」

おそらくマンションに転居する前のことだろう。

幼かったせいかそのころの記憶は曖昧である。薄汚れた狭いアパートにいたことはぼんやりと覚えているが、日々の出来事はあまり思い出せない。印象に残っているのは拓海が遊びに来たことくらいだ。

でも、この浜辺に連れてきてもらったことはあったのだろう。懐かしく感じるということはきっとそうなのだ。住んでいたアパートがどのあたりかはわからないが、近くなら何度も来ていたかもしれない。

武蔵が砂浜へ続くコンクリートの階段を下りていく。七海も小走りであとを追った。砂浜に入ると足がとられて途端に歩きづらくなるが、それでも遅れないように必死についていく。

武蔵の足が止まった。まっすぐ前を向いてわずかに目を細め、遙か彼方まで広がる海原を眺めている。いいのかな、と七海はすこし迷いを感じながらも、邪魔をしないようそろりと隣に立った。

こっそりと彼を見上げる。

七海の背丈はあれから15センチほど伸びているものの、彼にはまだ全然届かない。それでも顔はすこし近くなっているように感じる。遠くに向けられている青い瞳が、色彩のない薄曇りの中でやけに鮮やかに見えた。

ザザーン――。

周囲に人影はなく、寄せては返すゆったりとした波の音しか聞こえない。心が落ち着くようなどこか懐かしい音だ。ゆるやかな潮風に、昔よりすこし伸びたボブヘアがさらさらと揺れる。

「ここな、俊輔と初めて出会ったところなんだ」

「えっ？」

驚いて目をぱちくりさせた七海を見て、武蔵は薄く微笑む。

「俺は意識をなくしてたから覚えていないが、この海岸に漂着して倒れていたのを、最初に見つけたのが俊輔だったらしい。あいつは救急車を呼ぼうとしたけど、直後に来た真壁拓海が止めた。俺はそのときに捕らえられて監禁されたんだ」

具体的な話を聞いたのは初めてだった。

わざわざ他県の遠い海へ連れてきたのはこのためだろうか。いまさらどうしてこんなことをしようと思ったのかはわからないが、彼なりに考えがあるはずだ。とりあえず最後まで聞こうと無言のままじっと耳を傾ける。

「俺の監視係のひとりが俊輔だった」

武蔵は懐かしむようなまなざしで遠くを見やった。

「あいつだけは俺をひとりの人間として扱ってくれた。いつも俺を気遣ってくれた。俺に日本語

を教えてくれて、俺が日本語を理解するようになると、いろんなことを話してくれた。だいたい俺と同じ年齢だってこと、両親がいないってこと、結婚したけど妻を亡くしたこと、そして可愛い娘がいるってことも」

そう言うと、意味ありげな笑みを浮かべて振り向いた。七海はドキリとして頬が熱くなるのを感じたが、気が付かなかったのか気にしなかったのか、彼はすぐに表情を消して藍色の海に向きなおった。

「だから俺もいろいろ話した。ずっと向こうの海底にある国から来たこと、潜水艇で浮上すると待ち構えていたように爆撃されたこと、この国へはいなくなった姪を探しに来たこと、姪は多分この国の人間に拉致されたんじゃないかってこと」

「え……海底にある国……？」

「水中に住んでるわけじゃないぞ」

武蔵は苦笑まじりに言う。

「説明は難しいが人工的に空間を作ってるって感じだな。みんな地上とそんなに変わらない生活をしている。空も太陽もあるし、一般人は海底だなんてことは知らない。まあ、信じられない話だろうけど」

「信じるよ」

七海は迷わず答えた。

武蔵がいまさらそんな嘘をつくとは思えない。その国がどうなっているのかはまだ理解しきれていないが、実際にそんな未知の国があるのだとしたら、武蔵の存在自体が国家機密という話も何となくわかる気がする。

「ありがとうな」

武蔵はやわらかい笑みを浮かべて、話を進める。

「七海と同じように、俊輔もその荒唐無稽な話を真剣に聞いてくれてな。さらわれた俺の姪が自分の娘と同じくらいの年齢だと知ると、ますます同情してくれるようになった。頼んでもいないのに脱走計画を立ててくれて。俺は危ないからやめろと何度も言ったんだが、あいつは上手くやるから心配ないって」

うん、お父さんはそういう人だった——。

人懐こくて、優しくて、お人好しで、おせっかいで、困っている人がいれば懸命に助けようとする。たとえ何の得にならなかったとしても。

「で、俊輔の計画通りに脱走したのはいいが、あいつが大丈夫なのか心配になってな。明かりがついているかだけ確認しようと、マンションまで行ったんだ。でも明かりは消えていた。嫌な予感がして部屋まで行ってみると刺されていて……七海に見つかったのはそのときだ」

「うん……」

すこし涙ぐむと、ふいに優しく頭を引き寄せられた。

あのとき目にした光景はあまりにも鮮烈で、強烈で、いまでもときどき思い出してゾクリとするけれど、いまはもう武蔵が犯人じゃないと知っている。だから安心してそのぬくもりに身を預けていた。しかし——。

「七海……そろそろお別れだ」

「えっ？」

一瞬、何を言われたのかよくわからなかった。ゆらりと顔を上げて武蔵を見つめる。その視線の先で、彼は物寂しげにうっすらと微笑んでいた。

「来週から、七海は橘の家で暮らすことになる」

「そ、んな……」

ガツン、と鈍器で頭を殴られたような衝撃に襲われた。

ぐわんぐわんと気持ち悪いくらいに脳内が揺れている。とても何かを考えるところではない。目の焦点が合わずよろめきそうになりながら、それでも必死にふるふると首を横に振った。

「いやだ……武蔵が……武蔵と一緒にいい……」

震える声で継る七海に、彼は追い打ちをかけるように残酷な言葉を紡ぐ。

「春からは中学に通わないといけない」

「いやだっ！！」

わああああ、と大きな体にしがみついて火がついたように泣きじゃくった。何度も何度も固い胸板をこぶしで叩く。彼は黙ってそれを受け止め、気遣わしげに七海の頭に手を置きながらも、ごめんとしか言ってくれなかった。

すん……。

泣き疲れても、涙は止まることなく静かにあふれ続けている。武蔵の服を濡らしてしまったことを気にしながらも、ぐったり寄りかかっていると、頭に置かれていた手にすこし力がこもるのがわかった。

「七海、会えなくなるわけじゃないんだ。ときどき様子を見に行くし、何か困ったことがあったら俺に言ってくれてもいい。休日はまたどこか遊びに行ったりしよう、な？」

「……うん」

七海は力なく返事をする。

いつしかこの幸せな日々が永遠に続くかのように錯覚していたが、本当はわかっていた。武蔵との暮らしはあくまで一時的なもので、いずれ橘の家で暮らすことになるのだと。

嫌な現実を無意識に頭から追い出していたのかもしれない。あるいは夢を見ていたのかもしれない。だけど夢は夢でしかなかった。これからは現実と向き合っていかなければならない。

そのことを考えると怖くて苦しくてたまらなくなる。せめていまだけは何も考えずに武蔵に甘えていたい。彼に抱きついてほのかな体温を感じ、寄せては返す波の音を聞きながら、そっと涙に濡れた目を閉じた。

「おかえり」

日が沈みかけて薄暗くなってきたころ、武蔵と七海がバイクで帰ってくると、山道への分岐点で遙が待ち構えていた。傍らには黒いセダンが停まっている。その運転席には白い手袋をした男性が座っているようだ。

武蔵はバイクに跨がったままフルフェイスのシールドを上げ、驚いたように遙を見た。

「来るなら電話くれればよかったのに」

「邪魔するの悪いと思ってさ」

遙は軽く肩をすくめる。

いつから待っていたのかとすこし心配になったが、予定もわからないまま朝から来たりはしないだろう。武蔵はどこに出かけてもたいてい日沈前に帰ってくる。だから、待たずにすむようこの時間を狙って来たのかもしれない。

しかし、いままで連絡もなしに来たことは一度もなかった。まさか自分を連れて行くために、不意打ちで——七海は表情を硬くする。武蔵には来週からだと聞いていたので、まだ心の準備ができていない。

「で、何の用なんだ？」

「後部座席を見てよ」

遙は傍らの黒いセダンを示しながら答える。

武蔵はエンジンを止めると、七海とともにバイクから降りてヘルメットを外し、怪訝な面持ちで後部座席のほうに足を進めた。ガラスが黒っぽくて中がよく見えなかったが、近づくとゆっくりとそのガラスが下がっていく。

「……レオナルド！」

後部座席には三人の男性がいた。両端の二人はスーツを着た体格のいい男性で、中央は口にテープを貼られて拘束衣を着せられた金髪碧眼の男性だ。武蔵の視線はその中央の男性にそそがれている。

彼のほうも武蔵を目にして驚いたようだ。何か言いたそうに顔をしかめて体をよじるが、口にテープを貼られているので言葉にならない。隣のスーツを着た男性に腕を掴まれて動きを止めた。

「やっぱり知り合いだったんだ」

「どういうことだ？」

武蔵が眉をひそめて振り向くと、遙は助手席の扉に軽く寄りかかり、腕を組んだ。

「彼ね、小笠原沖で潜水艇に乗って出てきたところを公安に捕らえられたんだ。そのとき武蔵の写真をいくつか持っててさ。おまけに僕と滯の似顔絵まで持ってたもんだから、うちに話がまわってきたってわけ」

「なるほど、サイファさんのしわざか……」

武蔵は難しい顔でそうつぶやき、遙に目を向けた。

「こいつは親戚だ。話をさせてくれないか」

「もちろん、そのつもりでここに連れてきたからね。彼の言葉がわかるのは武蔵だけだろうし。ただし二人きりにはできない。公安が同席して、本部とビデオ通話をつなぐことになる」

「それで構わない」

七海は黙って二人の会話を聞いていた。

わからない話もたくさんあったが、この拘束衣の男性が武蔵の親戚であることだけは理解した。それほど顔は似ていない気がするが、瞳の色はよく似ている。髪も武蔵が染めるまえと同じ金髪だ。

そんなことをぼんやり考えているうちに、公安職員と思われるスーツを着た男性のひとりが、後部座席から降りて拘束衣の男性を肩に担いだ。武蔵の山小屋で話をすることに決まったようだ。

「悪い、七海はここで遥と一緒に待っていてくれないか。いや、ここじゃなくて喫茶店とかでゆっくりしてきてもいい。ちょっと込み入った話になりそうなんだ」

「うん、わかった……」

得体の知れない不安が胸に湧き上がるが、あまり困らせたくないのも素直に頷いた。あのひとは敵じゃなくて親戚だし、話をしてくるだけだから大丈夫なはず、と自分自身に言い聞かせる。

武蔵は真剣なまなざしを遥に向けた。

「じゃあ、七海を頼む」

「わかった」

その返事を聞いて頷くと、バイクを押して歩きつつ公安職員の二人を促した。一人は拘束衣の男性を肩に担ぎ、一人は大きな鞆を持っている。七海は冷たい風に吹かれながら、その一行が細道をたどり山へ消えていくのを見送った。

「七海、どこに行きたい？」

「僕はここで待ってる」

後ろから七海の両肩に手を置いて尋ねてきた遥に、前を向いたまま即答した。視線は山小屋の方を向いているが、いくら目を凝らしても見えないことは知っている。

「これからもっと寒くなるけどいいの？」

「遥は喫茶店に行ってくればいいじゃん」

「七海を置いていくわけにはいかないよ」

そう返されてムツとしたが、遥はこう見えて意外と律儀で面倒見が良かったりする。武蔵に頼まれたからには置いていくことはないだろう。たとえ七海自身がひとりになりたいと願ったとしても。

「それなら遥もここにいるしかないよね」

「しょうがないな」

七海の声には露骨な反発心がにじんでいたが、彼はすこしも不快そうな様子を見せず、軽く笑って肩をすくめた。

「はい」

冷たいガードパイプに腰掛けていた七海に、遥はあたたかいペットボトルのお茶を手渡してきた。その手がじんじんと温まっていくのを感じながら、七海はさっそく一口飲んでほっと息をつく。

遥も並んでガードパイプに寄りかかると、同じペットボトルのお茶を両手で持ち、山のほうに目を向けた。ちょうど日が落ちたところだろうか。空は急速に光を失い、山もひっそりと闇に包まれようとしている。

「武蔵から聞いた？ 来週からうちで暮らすって」

「うん……どうしてもそうしなきゃダメなの？」

「七海がこの国でまともに生きていくためにはね」

「……………」

遥はペットボトルのキャップを開けて一口飲むと、白い息を吐いた。まっすぐ山のほうを見つめたままわずかに目を細める。

「楽しいことだけで生きていけるほど、世の中甘くないよ」

それは、多分そのとおりなのだろう。

意地悪で言ったわけでないことくらいわかっている。いいかげん覚悟を決めなければと思うものの、どうしても嫌だと感じてしまう。橘の家で暮らすことも、学校に行くことも――。

「メルのこと嫌いな？」

「……苦手」

メルというのは、武蔵の姪のメルローズのことだ。

これまで遥にも誰にも言ったことはなかったはずだが、見透かされていたようだ。彼女とはあまり話そうとしなかったし、冷たい態度をとったこともあるので、傍目にわかりやすかったのかもしれない。

彼女は何も悪くない。七海が一方的に苦手意識を持っているだけなのだ。そのことを考えると、自分がとてつもなく嫌な人間になったような気がする。きっと遥にも懇々と説教されるのだろうと覚悟したが。

「じゃあ、学校で気の合う友達を見つけるといいよ」

さらりとそんな提案をされて、拍子抜けする。

メルローズのことをずいぶん可愛がっているのに、その彼女と仲良くできない七海に不満はないのだろうか。いつもは厳しくせに、ときどき変なところで寛大なのがよくわからない。

でも、学校で気の合う友達を見つけるのも難しい気がする。街で見かける同年代の女子はみんなまるで別の人種のようなのだ。ひとりならまだしもグループでいたら怖い。ペットボトルを持つ手に力がこもっていく。

「心配しなくても、七海ならすぐにできるんじゃないかな」

「……遥にもできるくらいだしね」

その嫌味を、遥はくすりと笑って受け流した。

彼が誰かと仲良くしているところなどあまり想像できないが、実際に友達はある。小学校からの同級生でいまも同じ大学に通っているらしい。おそろいの指輪をしているくらいだからかなり親しいようだ。

彼自身、友達がいて良かったと思っているからこそ、友達を作るように勧めているのだろう。しかし、七海にとってそれがどれほど難しいことか、まるきり境遇の異なる彼にわかるはずがない。

七海は両手の中にあるペットボトルのあたたかさを感じながら、口をとがらせた。

「あ、戻ってきた！」

日没から一時間ほどが過ぎてあたりがいつそう冷え込んできたころ、山道から出てくる武蔵たちの姿を見つけ、七海は腰掛けていたガードパイプからぴょんと飛び降りた。ほっとしながらも、気持ちがやはり急いで彼のもとへ駆けていく。

「話、終わった？」

「ああ……」

武蔵はだいぶ疲れているように見えた。その手を掴んで帰ろうとせがむものの、彼はちょっと待ってくれと動かない。後ろの公安職員に何かを告げて先に行かせると、七海の後ろにいた遙に向きなおった。

「事情はだいたいわかった。あいつ……レオナルドは外交特使として来たみたいだな。最近、俺らの国に侵入しようとしたりミサイルを撃ち込んできたり、何かと手出ししてくるやつらがいるから、こっちの政府と話し合いがしたいということらしい」

「公安は何て？」

「話し合いの場を持てるようにすると約束してくれた。日本政府にもすでに話が通っているらしい。本来なら、得体の知れない侵入者の言うことなんか聞き入れられないと思うが、橘財閥があいだに入ってくれたおかげで実現できそうだ。おまえがあらかじめ根回ししておいてくれたんだな、感謝する」

「僕はじいさんによろしく言っただけ。実際に動いたのはじいさんだよ」

「そうか……じゃあ、あのじいさんにも世話になったと伝えておいてくれ」

「わかった」

じいさんというのは遙の祖父である橘財閥会長のことだ。七海も一度会ったが、テレビで見るよりもさらに威厳があり、笑っていても目が鋭く、何となく油断のならない人だという印象だ。

遙はゆったりと腕を組んだ。

「それで、武蔵はこれからどうするの？」

「故郷に戻って手伝えと言われた。この国との橋渡しができるのは俺しかいないだろうし、故郷のためにもこの国のためにもそうすべきだと思ってる」

「え……戻る……？」

七海の口から思わず疑問がこぼれた。

瞬間、武蔵の表情がはっきりとこわばるのがわかった。しばらく眉間にしわを寄せて逡巡する

様子を見せていたが、意を決したように真剣な面持ちで七海に向きなおると、静かに告げる。

「俺は自分の故郷に帰る。この国には仕事で来ることもあるだろうが、決められたところ以外に行くことは許されなくなりそうだ。だから……七海とはもう会えなくなるかもしれない」

もう会えなくなる——？

ドクリ、七海の心臓はつぶれそうなほど激しく収縮した。じわりと気持ち悪い汗がにじむ。苦しくてまともに息もできない。彼に縋りついた手にぎゅっと力をこめて、そろりと見上げる。

「なんで……」

涙を含んだ声が詰まった。じわりと熱く融けるように目が潤んでいく。うつむいて奥歯を食いしばり、彼の服を破れんばかりに強く握りしめる。その震える手に生ぬるい雫がぽたりと落ちた。

。

「悪い……急にこんなことになって……」

「ふざけんな！　ときどき会いに来てくれるんじゃないのかよ！　困ったことを聞いてくれるんじゃないのかよ！　さっきそう言ったばかりなのに、なんで……うそつき!!!」

小さな肩をいからせて、涙を振りまきながら声のかぎり叫ぶと、その場に崩れ落ちて号泣した。大粒の涙がぼろぼろとこぼれて冷たい土に染み込んでいく。宵闇に七海の泣きわめく声だけがむなしく響き渡る。

そのときの武蔵がどんな顔をしていたか、七海が知ることはなかった。

「起きたか？」

七海が身じろぎしてぼんやりと目を開けると、真上から青い瞳に覗き込まれていた。起き抜けの頭でもすぐに武蔵だとわかる。見慣れたスウェットを着て、同じ布団の隣で肘をついて上半身を起こしていたようだ。

いつもの布団、いつもの天井——どうやらここは武蔵の山小屋らしい。

確か、故郷に帰るからお別れだと彼に告げられて、泣きじゃくっていたような気がするが、それからどうしたのかまったく記憶にない。泣き疲れて寝てしまったのだろうか。それとも——。

「あ……えっと、故郷に帰るとかって話は……」

「ああ、今日の夕方まで時間をもらったんだ」

もしかしたら夢だったのかもしれないという期待は、あっさりと打ち砕かれた。

寝ているあいだにいなくならなただけ良かったが、夕方になれば彼方の海底にあるという故郷に帰ってしまい、二度と会えなくなるのだ。そのことを考えるだけで胸が締めつけられる。

「いま何時？」

「十一時すぎ」

「えっ？」

バツと布団から飛び起きて枕元の時計に目をやると、本当にその時間を指していた。外が明るいのでもちろん昼だ。そういえばやたらと体が重い気がする。きのうの宵からずっと寝こけていたのなら、寝過ぎもいいところだ。

ぐううう——。

時間を意識するなり空腹を感じ、おなかが鳴った。

丸一日、何も食べていないのだから当然かもしれないが、だからってこんな急に鳴らなくてもいいのに。あまりの恥ずかしさに顔が熱くなるのを感じてうつむく。隣でくすりと笑う気配がした。

「起きるか？」

「うん」

「顔洗ってこい」

「うん」

洗面所で鏡に向かうと、思ったよりもひどい顔をした自分がそこにいた。さんざん泣いたせいか瞼が腫れぼったく、目もすこし充血し、かなり憔悴しているように見える。あわてて冷たい水でばしゃばしゃと顔を洗った。

——よし！

タオルで拭いたあと、パンと軽く両頬を叩いて気合いを入れる。瞼の腫れはそう簡単に引かないが、気持ちはスッキリしたし、すこしは良くなったように思う。鏡に向かったままにっこりと口角を上げてみた。

どうやっても故郷に帰ることを止められないのなら、せめて笑顔でお別れしよう。せっかく最

後にすこし時間をもらえたのだから、それを無駄にしないで、武蔵にとっていい思い出になれるように頑張ろう。

七海はそう決めて、しっかりとした足取りで部屋に戻っていった。

「こんな時間だから朝昼兼用な」

扉を開けると、武蔵が包丁を握ったまま台所から軽い調子で声を掛けてきた。まな板の上には、刻み終わったにんじんと刻みかけの玉ねぎが見える。

「僕も手伝うよ」

小走りで駆けていき、武蔵に聞きながら食材やフライパンなどを準備する。

湿っぽい雰囲気にならず、いつものように楽しく手伝うことができたのは、いつものように彼が接してくれたおかげだろう。意識的かどうかはわからないが、どちらにしてもありがたかったし嬉しかった。

出来上がったのは、ミートソーススパゲティ、ポタージュ、生野菜のサラダだ。

奇しくも武蔵が最初に作ってくれた手料理と同じメニューである。もしかしたらそれを意識してくれたのかなとちらりと思ったが、彼本人に尋ねる勇気はなかった。それでもひそかに想像するだけで胸がはずむ。

「いただきます！」

七海は両手を合わせて元気よくそう言い、頬張っていく。

武蔵の料理はとてもおいしい。洋食でも和食でもいつだって七海を幸せな気持ちにしてくれる。でも、もう食べられないんだと思うとしんみりしてしまった。もちろんそんな暗い気持ちを見せるつもりはないけれど。

「七海……、どこか行きたいところはあるか？」

すべてきれいに平らげたあと、水を飲んで一息ついていると、武蔵が遠慮がちに尋ねてきた。これで最後だから——言葉はなかったものの、彼のどこか寂しげな表情がそう語っている。

「時間的に遠くは無理だけどな」

「どこにも行かなくていいよ」

「……それでいいのか？」

「うん、武蔵とここにいたい」

それは、遠慮ではなく嘘偽りのない素直な気持ちである。最後だからこそ二人で暮らしたこの場所にいたい。その思いをこめて見つめると、わかってくれたのか彼はふっと表情を緩めた。

「じゃ、ここで何したい？」

「いつもどおりがいい」

「ジョギングでもするか？」

「うん！」

そうと決まればのんびりしてはいられない。すぐに食器を集めて洗い始める。武蔵は今日くらい自分がやると言ってくれたが、これは七海の仕事なのだ。いつものようにきちんと自分でこな

したかった。

後片付けが終わると、ジャージに着替えて武蔵と外に出た。

目をつむって胸いっぱい新鮮な空気を吸い込む。木々の合間から見上げた水色の空は穏やかに晴れわたり、気温は低いものの、降りそそぐ陽射しでほんのりとあたたかく感じられた。

準備運動をしてから、木々のあいだの細道を軽い足取りで駆けていく。ふもとに近いとはいえ山なので傾斜がついているし、足下も悪いが、家の中で走っているよりよっぽど楽しい。

草や小枝を踏みしめる感触、足を取られそうなでこぼこ道、進むにつれて変わりゆく景色、頬を撫でる心地のいい風——どれも好きだが、何より先に走る武蔵の背中を追いかけるのが好きだった。

視界の開けた小高いところで武蔵が足を止めると、七海も隣に並んだ。荒い息を整えながら眼下に広がる田舎町を眺める。いつもと変わらない景色だが、これが最後なんだと思うと胸がきゅうとなる。

ちらりと横目を流すと、武蔵もやはり物思いに耽っているように見えた。せつなげに目を細めてどこか遠くを眺めている。しかし七海の視線に気付くと、ごまかすようにパッと笑顔になって振り向いた。

「走ったあとはどうする？」

「ん……どうしようかな」

「いつもなら勉強だけだな」

「え、勉強は嫌だ」

いつもどおりがいいとはいえ、さすがにひとりで黙々と勉強をしてお別れというのはあんまりだ。思わず苦虫をかみつぶしたような渋い顔を見ると、武蔵はおかしそうにくすりと笑った。

「じゃ、格闘術でもやるか」

「うん！」

その提案に安堵して大きく頷く。

格闘術もそんなに好きなわけではないが、残りわずかな時間を有意義に過ごすには、勉強よりずっといいはずだ。武蔵につきっきりでいてもらえるのだから。

ジョギングをしながら山小屋に戻ったあと、武蔵に格闘術を教えてもらう。

いつもながら、教えられたとおりに体を動かすのは難しい。自分ではできたつもりでも、構えがおかしかったり、受け身がとれていなかったり、反応が遅かったりするようだ。

普通の子供ならこんなものだろうとは言われているが、やはり面白くない。だが、頑張ったところで急にできるようにはならない。今日もあまり進歩のないまま終わるしかなかった。

「これからも続ける気があるなら、遥に教えてもらえ」

汗だくで足を投げ出して座る七海に、武蔵はスポーツドリンクのペットボトルを手渡すと、隣にゆったりと腰を下ろしながらそう言った。

「遥に？」

「あれで意外とやるんだぜ」

「格闘術を？」

「ああ、俺といい勝負だ」

「へえ」

鍛えてるようには見えなかったのが驚いたが、そういえばやけに力は強かったなと思い出す。細身でも意外と筋肉はついているのかもしれない。

「でも、僕は向いてないみたいだし、あんまり気が進まないかな」

「本格的にはやらなくても、護身術程度はやっというて損はないぞ」

「うん……じゃあ、考えとく」

曖昧に答えを濁すと、ペットボトルの蓋を開けて喉に流し込む。

格闘術がそんなに好きではないというのもあるが、正直、あまり遥に教わりたいと思えない。悪い人ではないだろうし、嫌いなわけでもないけれど、先生としては容赦がなさそうですこし怖い。

遥のほうにしても暇ではないだろうし、面倒だろうし、そもそもそこまでの義理はない。七海の境遇に責任があるといっても間接的なものでしかなく、住ませるだけでも十分なはずである。

お互いあまり関わらないほうがいいのかと思いつつ、そのことをすこし寂しく感じ、ペットボトルの蓋を無意識にきつく締めてうつむいた。

ピンポン——。

お風呂のあと、武蔵に髪を乾かしてもらったところでチャイムが鳴った。

開いてる、と武蔵がドライヤーのコンセントを抜きながら声を張ると、玄関が開き、濃紺のスーツを着た男性二人を従えて遥が入ってきた。床にあぐらをかいている武蔵を見下ろして尋ねる。

「準備はできた？」

「……ああ」

武蔵は目を伏せたまま硬い声で答えた。

その様子から、これで本当にお別れなのだということを思い知らされ、わかっていたはずなのに胸が押しつぶされそうになる。しかし、もう泣きわめくようなみっともない真似はしない。

「七海もいい？」

遥は腰を屈めて、武蔵の隣でぺたりと座っている七海を覗き込んだ。

「うん……あのさ、これ持ってっていい？」

「もちろん、何でも持っていけばいいよ」

七海が掴んで見せたのは、父親の形見ともいえるイルカのぬいぐるみだ。

父親が殺されたときの血がこびりついていたうえ、武蔵が撃たれたときにもべっとりと血で汚れてしまったが、遥がクリーニングを頼んでくれたおかげで、完全ではないもののいまはかなり汚れが落ちている。

ただ、いいかげんぼろぼろでみすぼらしく見えるので、あの立派な屋敷に持ち込むのは反対されるかもしれないと心配していた。しかし、彼が不快に感じている素振りはなかったのでほっとする。

「じゃあ、行こうか」

まるで散歩にでも誘うかのような軽い調子で、遥が言う。

すこし戸惑ったものの、やたらと深刻そうにされるよりはいいかもしれない。イルカのぬいぐるみを抱いて立ち上がると、先に出ていく遥たちを追い、武蔵とともに住み慣れた山小屋をあとにした。

「武蔵はその公安の車に乗って。七海はうちの車で連れて行く」

山小屋から夕暮れの細道をたどって車道まで出ると、二台の車が停まっていた。両方とも黒いセダンである。遥の話していた内容から察するに、前方が公安の車で、後方が橘の車なのだろう。

「武蔵とはここでお別れになるね」

「ああ、いろいろ世話になった」

武蔵は気持ちのこもった声でそう告げて、山小屋の鍵を遥に手渡した。そして真剣な顔になり七海と向かい合う。

「……七海」

「うん」

別れのときが迫りくるのを感じて緊張が高まる。すこしも目をそらしたくなくて、その姿を脳裏に焼き付けておきたくて、何を言えばいいのかわからないまま、ただじっと武蔵を見つめた。

彼もまた無言で七海を見つめ返した。しばらく時間が止まったかのようにそうしていたが、やがて体の横でゆっくりとこぶしを握りしめると、固く引きむすんでいた薄い唇を開く。

「俺は、故郷に帰らなきゃいけない。だが向こうで望まれた役目を果たして、いつかここに来ることを許されたなら、そのときはまた——」

「言うな！」

そんなことを聞いてしまえば、何の確証もないのにきっといつまでも待ち続けてしまう。不安に駆られて思わず大声で叫んだが、武蔵が啞然としていることに気付くと、あわてて笑顔を作った。

「武蔵がいなくたって僕は平気だから」

「……そうか、だったら安心だ」

武蔵はすこしのあいだ探るように怪訝な目を向けていたが、やがて静かにそう言い、イルカのぬいぐるみごと七海を包み込むように抱きしめた。

「じゃあ、元気でな」

「うん、武蔵も元気で」

手がふさがっているため抱きつけないことがもどかしい。そのかわりに甘えるように頭を寄せて、彼の体温と匂いを感じ取った。

武蔵はスーツの男性二人に挟まれて後部座席に乗り、どこかに連れられて行った。

その車を見送ったあと、七海と遥はもうひとつの車の後部座席に乗った。運転席には白い手袋をした年配の男性が座っていた。家までよろしくと遥に声を掛けられると、ゆっくりとなめらかに車を走らせ始める。

静かな走行音しか聞こえない車内で、七海はイルカのぬいぐるみを抱きかかえたまま、シートに寄りかからず背筋を伸ばして前を向き、口を引きむすんでいた。しかし――。

「もう我慢しなくてもいいんじゃない？」

そう言われ、ハッと隣に振り向いた。

遥はこちらに横目を流してうっすらと微笑んでいた。それを目にした瞬間、堰を切ったようにぶわりと大量の涙があふれ出す。あわてて止めようとするがどうにもならない。

「うっ……せっかく我慢してたのに……ばかあ……」

涙は止めどなく流れ落ち、イルカのぬいぐるみに染み込んでいく。

遥は何も言わなかった。ただそっと七海の頭を抱いて自分に寄りかからせる。七海はイルカのぬいぐるみを抱きしめたまま彼に身を預けて、泣き疲れるまでずっとすすり泣いていた。

うららかな春の陽気の中、散り始めた桜の花びらが吹雪のように舞う。

七海はふくらんだスカートをあわてて手と学生鞆で押さえた。

セーラー服はどうにも風通しが良すぎて心許ない。普段はショートパンツで外出しているので、脚を露出することには慣れているものの、下着が守られていないようで不安に感じる。いっそスカートの下にショートパンツをはこうかと思ったが、遥に止められた。

橘の屋敷に移って三か月とすこし。

今日は七海が通うことになった私立中学校の入学式だった。もう学校へ行きたくないなどと駄々をこねたりはしていない。式と写真撮影を終えて、保護者の代理として来ていた遥と帰るところである。

屋敷での生活は、特に嫌なこともなくそれなりに快適だ。

橘の家族や親類の他によくわからない居候もいるが、屋敷が広いうえ、みんな好き勝手に生活しているのでそんなに会うこともない。頻繁に顔を合わすのは使用人と遥とメルローズくらいである。

最初は使用人なんて冷たくて落ち着かなくて嫌だと思っていたが、屋敷で暮らすようになってすぐにそういう感情はなくなった。みんな七海に良くしてくれるのだ。特に、執事の櫻井はまるで家族のように目をかけてくれている。

ただ、遥の祖父である橘財閥会長とは数えるほどしか会っていない。彼が七海の里親ということになっているらしいが、実質的には遥や櫻井、そして会長秘書の楠という男性に任せているようだ。

「あしたから七海ひとりだけど、通えそう？」

「バカにしてんのか。道なんかもう覚えたし」

「それならよかった」

桜並木の下を並んで歩きながら、遥は軽く笑った。

中学校までは電車と徒歩で通うのだが、電車は乗り換えがないのでさほど難しくないし、駅からの道筋も簡単なので迷うことはないだろう。定期券も購入済みなので何の心配もない。

「今日だって僕ひとりで平気だったのに」

「ここの入学式は親子で行くものらしいよ」

「親じゃないじゃん。すごい浮いてたし」

そう言いながら、先ほどまでの騒動を思い出して口をとがらせる。

他の保護者と変わらない地味なスーツ姿のはずだが、保護者にしては若すぎるうえに容姿だけは無駄にいいので、保護者席に座っているだけでひととき目立っていた。女子たちが誰のお父さんなのかときゃあきゃあ騒ぐ始末だ。

七海はその様子を横目で見ながら素知らぬふりを決め込んでいた。なのに、遥が声を掛けてきたせいで自分の保護者だとばれてしまった。空気読め、と恨めしげに睨みつけるものの後の祭りである。

お父さん若いね、などと言われて釈明せざるを得ない状況に迫りやられた。親ではなく知り合いだと答えると関係を迫りされ、一緒に住んでいると答えるとさらに詮索され、曖昧にごまかすしかなくなった。

あしたも何か言われるかもしれないと思うと気が重い。どうしてこんなことになったのだろう。すべて遥のせいだとまで言うつもりはないけれど、元凶には違いない。彼が来なければこんなことにはならなかったのだから。

「大学生なんだから大学に行けよな」

「七海の晴れ姿を見るためなら休むよ」

「……落第しても知らないぞ」

微妙な面持ちで捨て台詞を吐き、口をとがらせると、隣で小さく笑う気配がした。

「じゃ、そうならないように協力してくれる？」

「協力？」

「なるべく問題を起こさないでねってこと。学校に呼びつけられると、そのたびに講義を休まなきゃいけないからさ。あんまり頻繁だと、七海の言うように進級できなくなるかもしれない」

遥の話からすると、学校で問題を起こすと保護者が呼びつけられるらしい。七海としても彼の負担にならないようにしたいし、そもそも問題なんて起こしたくないが——。

「あのさ……今日、さっそく怒られたんだけど……」

おずおずと窺うような視線を向けてそう告げると、遥はすこし驚いたように振り向いた。それでもいつもの冷静さはなくしていないようだ。

「どうして？」

「自分のことを僕って言ってたらさ、女の子なんだから僕はやめなさい、私と言いなさいってお説教されたんだ。でも、昔からずっと僕だしすぐに変えるのは難しくて……なんか変な感じだし……」

遥のためには、素直に先生の言うとおりにすべきなのだろう。けれど——言葉に詰まりうつむくと、彼は真面目な顔でなるほどねと相槌を打った。

「普段はそれでいいんじゃない？」

「え、いいの？」

「普段は僕、かしこまった場では私、と使い分けられるようになればいい。僕もそうしてるし。最初は難しいだろうけどすこしずつね。先生にはあとで僕から話しておくよ」

七海はほっとして頷いた。

かしこまった場というのがよくわからないし、きちんと使い分けられるか自信はないが、すこしずつということなら焦らなくてもいいのだろう。とりあえず、先生と話すときだけでも私と言うようにしようと思う。

「あ、ごめんちょっと待って」

遥は足を止めると、上着の内ポケットから震える携帯電話を取り出し、歩道の脇に寄りながら通話を始める。

「はい……うん……そう……わかった。あとで折り返す……じゃあ」

七海は彼の隣に立ち、薄紅色の花びらが舞い落ちるのを眺めつつ待っていたが、一方的に報告を聞いただけのようですぐに通話は終わった。しかしながら彼は携帯電話をしまおうとせず、手に持ったまま振り向く。

「七海、真壁拓海に会いたい？」

「えっ？」

七海は目をぱちくりさせて聞き返した。あまりにも予想外の名前を耳にしたせいで、一瞬、何を言っているのか理解できなかった。そこへ、さらに畳みかけるように問われる。

「いまから彼に会いに行かない？」

「えっ……え……なんで……？」

「彼のことずっと気にしてたよね」

凶星を指されて息を飲んだ。はっきりと口にしたことはなかったはずなのに、どうして。何となくいたたまれなさを感じて黙り込むが、彼は気にする素振りもなく話を続ける。

「中学生になったら会わせてもいいかなって考えてたんだ。公安の知人に聞いたら、明日からしばらくは外の任務に出るけど、今日なら夜まで警察庁にいるってさ。もちろん会いたくなければ会わなくていいし、心の準備ができてないなら後日でもいい。ただし会うときは僕も同席させてもらうけど。どうする？」

「……今日、会わせて」

いきなり言われて心の準備などできているはずがない。それでもせっかくの機会を逃したくない。ドクドクと痛いくらいに心臓が早鐘を打つのを感じながら、まっすぐ彼を見つめてそう告げた。

「二人とも掛けたまえ」

楠警察庁長官に促されて、遥と七海は革張りのソファに並んで腰を下ろした。遥は普段と変わらない落ち着いた様子を見せているが、七海は場の雰囲気気後れして緊張を隠せない。背筋を伸ばしながらも遠慮がちにきょろきょろとあたりを窺う。

ここは警察庁長官の執務室である。

警察庁長官というのは警察庁でいちばん偉い人だと聞いた。この執務室もそれにふさわしい威厳のある作りになっている。ただ、奥の広い執務机でひとり書類に目を通してその人は、威厳というより鋭利なナイフのような冷ややかさを感じさせた。

七海たちは彼の意向ということでこの執務室に連れてこられた。じきに拓海も来るらしいが、どうしてこんなところで会わなければならないのかわからない。不安に思いながらも、遥が当たり前のよう受け入れているので従うしかなかった。

コンコン——。

七海たちがおとなしく待っていたところへ、ノックの音が響いた。

ゆったりと椅子にもたれていた楠長官が、入れ、と低めながらもよく通る声で応答する。七海は緊張で体をこわばらせて音のほうに目を向けた。年季の入った木製の扉がゆっくりと開いていくのが見える。そして——。

ハッとして、はじかれたように立ち上がった。

扉の向こうにいたのは思ったとおり拓海だった。最後に見たときと外見はほとんど変わっていない。こちらが目を見開いて立ちつくしているのと同じように、彼の方も七海を見たまま目を見開いて動きを止めていた。

「座ったらどうだ」

執務機のほうから存在感のある声が聞こえて、我にかえった。七海に言ったのか拓海に言ったのかはわからないが、隣の遙にぽんと肩を叩かれて一緒に腰を下ろす。拓海も無言のまま歩を進めて二人の正面に座った。

「七海……元気そうでよかった。大きくなったな」

「拓海は変わらないね」

昔と変わらない調子で声を掛けられたことにほっとし、笑顔で応じる。

しかし、次の瞬間——彼の表情があからさまに険しくなった。思わずビクリとしたが、それが七海でなく遙に対するものだという事は、その射るような視線をたどればすぐにわかる。

「警戒のつもりか牽制のつもりかは知らないが、その殺気をおさめてくれないか。さすがにこんなところで事を起こす気はない」

「油断はしない主義なので」

遙が身じろぎもせず受け流すと、拓海は眉を寄せた。

殺気といわれても七海にはよくわからないが、二人のあいだには確かに緊迫したものを感じる。困惑して執務機のほうに目を向けると、楠長官はゆったりと椅子にもたれたまま面白がるように口元を上げていた。

「七海」

ふいに名を呼ばれ、七海はドキリとして正面の拓海に向きなおる。彼は再びこちらに目を向けていた。もう遙のことを気にするのはやめにしたらしい。

「橘家で暮らしていると聞いたが」

「うん、良くしてもらってるよ」

「学校にも行ってるんだな」

「今日が中学の入学式だったんだ」

「そうか」

彼は七海の着ている濃紺のセーラー服を見つめて、曖昧な笑みを浮かべる。そこには自責の念がにじんでいるように感じられた。七海を騙して学校にも行かせなかったことを、すこしは申し訳ないと思っているのかもしれない。

「……えっと、拓海はどうしてる？」

会話が途切れてしんと静まりかえると、今度は七海から尋ねた。拓海は目を伏せて答える。

「俺にはもう仕事しか残っていない」

「今もあのマンションに住んでるの？」

「ああ……七海の部屋もそのままだ」

「片付けていいのに」

思わずそう言ったが、七海に遠慮してそのままにしていたわけではないだろう。仕事が忙しくて時間がなかったか、面倒で放置していたか、あるいは——寂しくて片付けられなかったのかもしれない。感傷と困惑の入りまじった微妙な気持ちが湧き上がる。

「ねえ……もう、死のうとかしてない？」

「ああ、七海が死ねと言わないかぎりには」

彼は温度のない平坦な声で答えて七海を見つめた。まるで本心を探るかのよう。一瞬たじろいだものの、目をそらすことなく負けじと強気に見つめ返す。彼のペースに飲まれるわけにはいかない。

「僕、ずっと考えてたんだけどさ」

そう前置きをし、ゆっくりと呼吸をしてから続ける。

「お父さんが勝手に武蔵を逃がしたんだとしたら、拓海はすごく頭にきたんじゃないかな。親友の自分を裏切ってまで武蔵を助けたんだもんね。お父さんのこと殺したくなかったって言ってたけど、本当は憎らしくなって、それで……」

話を進めるにつれてドクドクと鼓動が強くなり、ついには言葉を紡ぐことができなくなった。プリーツスカートの上にのせた手をグッと握る。重い静寂に息が詰まりそうになったころ、拓海が口を開いた。

「殺したくなかったのは本当だ。俺は最後まで親友のつもりだった……が、俊輔の気持ちはいつのまにか俺から離れていた。あの男に同情し、そのことを注意した俺を敵視するようになった。だから憎らしい気持ちもなかったわけじゃない。ただ、殺した理由は本当にあのとき言ったとおりだ。他の誰かに痛めつけられて始末されるくらいなら、いっそこの手で葬ってやりたい……そこに一ミリたりとも憎しみがなかったとは言い切れないが」

淡々と語ったあと、無表情のまま七海をじっと見つめる。

「七海が許せないなら、死んで償う」

「……死なれたら寝覚めが悪いよ」

七海はぎこちなく笑って肩をすくめた。

聞きたかったのは嘘偽りのない本当のことだ。それがどんなものでも受け入れるつもりでいたし、いまさら償ってもらおうなんて思っていない。ただ、父親の言い分を聞けないのはやはり残念に思う。

ひそかに横目で隣を窺うと、遥は隙のないまなざしで拓海を見据えていた。いまだ警戒を解かず、いつでも飛び出せるように身構えている。それでも七海たちの邪魔をする気はなさそうだ。

「もうひとつ、気になったことがあるんだけど」

「ああ」

七海が話を続けると、拓海は静かに相槌を打った。

きっといまなら何を尋ねても正直に答えてくれる気がする。たとえ自分にとってつらい話になるとしても聞いておきたい。緊張で喉が張りつくのを感じながら、表情の変わらない拓海を見つめて唾を飲み、本題をぶつける。

「お父さんの敵を取ったあとのことは、何か考えてた？」

「……自分が死んだあとのことなんかどうでもよかった」

「僕のことも？」

「ああ、将来を案じるなら死んだことにはしないだろう」

「そっか……そうだね……」

拓海がひそかに考えていた敵討ちの計画は、七海に武蔵を殺させ、そして拓海自身を殺させるというものだった。そうすると七海はひとりぼっちになってしまう。死んだことになっているので誰も七海の存在さえ知らない。

そんな状態で、どうやって生きていけばいいのかわからない。

もしかしたら拓海が何か考えてくれていたのかもと思ったが、そうではなかったらしい。彼にとっては本当に復讐の道具でしかなかったということだ。奥底から何かがかみ上げてくるのを感じてうつむいた。

「……もう聞きたいことは聞いたから、帰ろう？」

一拍の間のあと、どうにか普段どおりの声をよそおって遥に声を掛けた。彼は小さく頷いてわかったと答えると、ソファから立ち上がり、奥の執務机にいる楠長官のほうに体を向ける。

「私たちはこれで失礼します」

「ああ、橘会長によろしくな」

「伝えておきます」

遥が一礼するのを見て、七海もあわてて立ち上がりぺこりと頭を下げた。

そのあとソファに座ったままの拓海をちらりと見たが、遥に肩を抱かれ、急ぎ立てられるように学生鞆を掴んで歩き出した。しかし扉を開こうとした彼の手を無言で押しとどめると、ちらりと振り返り、ソファに座る拓海の後ろ姿を見てわずかに目を細める。

「じゃあね……もう会うことはないと思う」

「ああ……七海、おまえは真っ当に生きる」

「勝手だね」

すこし上擦った声でそう言い捨てるなり前に向きなおり、グッと奥歯を食いしばる。そして一呼吸おくと、乱暴ともいえる勢いで叩きつけるように扉を開け、スカートをひらめかせながら執務室をあとにした。

「よく我慢したね」

エレベーターの前まで来ると、遥が隣からハンカチを差し出してきた。

それを目にした途端、堪えていた涙がぶわっと一気にあふれた。あわててハンカチを受け取り

目元に押し当てる。こんなところでみっともなく泣きたくはないが、一度こうなってしまっはなかなか止められない。

「あんなやつに涙を見せずにすんでよかったよ。もったいないし」

「うっ……もったいないって何だよ……っ……意味不明すぎ……」

しゃくり上げながらつかかかのように言い返すが、遥はうっすらと口元に笑みを浮かべるだけだった。結局、七海が落ち着くまでエレベーターのボタンも押さず、そのままただ黙って待っていてくれた。

二人は警察庁をあとにする。

外は風が強くなっていた。セーラー服の風通しの良さに慣れたわけではないが、いまはスカートが風をはらむのを心地良く感じる。うららかな春の陽射しを顔いっぱい浴びながら、大きく伸びをし、さっぱりとした笑みとともに隣の遥に振り向いた。

「連れてきてくれてありがとう。おかげでふっきれたや」

「そう」

すこし無理をしていることに、鋭い彼なら気付いているに違いない。それでも余計なことは何も言わず、たださりりと受け止めてくれた。それがどれだけ七海の救いになったか、きっと彼は知らない。

ぐううう——。

気が緩んだ途端におなかが鳴った。

七海はゆでだこのように顔を赤らめながらあたふたする。どうしていつも変なタイミングで鳴るんだろう。隣を見ると、遥がおかしそうにくすくすと笑っていた。恥ずかしさと腹立たしさを感じてますます顔が熱くなる。

「お昼の時間だいぶ過ぎたからね。どこかで食べて帰ろう」

「うん、パフェも食べたい！」

明るく声をはずませると、くるりと身を翻して階段を駆け下りていく。その足取りは、自分でも驚くほど軽やかになっていた。

第24話 プレゼント（最終話）

「げっ」

校門を出た瞬間、七海は思わず変な声を上げた。

まばゆいくらいの白い陽射しの下、歩道に横付けされた深紅のスポーツセダンに遥が寄りかかっていた。白シャツに紺パンツというシンプルな格好でありながら、スタイルがいいからか腹立たいほど様になっている。まるで車の広告みたいに。

当然のように、帰宅途中の生徒たちがチラチラと目を向けている。中には頬を染めて色めき立つ女子グループもいるが、気に留める様子はない。注目を集めることには慣れきっているのだ。

「二階堂、悪いけどここで」

「先約ってあの人ののか？」

「……まあね」

二階堂は中学のときのクラスメイトだ。同じ中学出身者は二人だけということもあり、高校に進学してクラスが分かれた今でも仲良くしている。遥のことは中学の三者面談や卒業式などで見ているはずだ。いつだったか、父でも兄でもなく居候先の息子だと話した記憶もある。

じゃ、と軽く片手を上げると、物言いたげな顔をしている二階堂を残して、短いポニーテールを揺らしながら駆けていく。遥はこちらに視線を流してうっすらと笑みを浮かべていた。また何かおかしなことを考えているのかもしれない。七海は眉をひそめて口をとがらせる。

「迎えに来なくていいって言ったじゃん」

「このほうが時間の節約になるだろう？」

今日は七海の十六歳の誕生日で、ちょうど期末試験の最終日ということもあり、一緒にお昼を食べようという話になっていた。ただ、学校まで迎えに行くという申し出は断固拒否した。遥がいるだけでやたらと目立つから嫌なのだ。なのに——嫌がらせのように校門の前で待っているなんて。

「せめて車の中で待っててくれよな」

「さっきの彼、二階堂君だっけ」

「……同中の同級生ってだけだよ」

「向こうはそうでもなさそうだけどね」

遥の視線をたどると、校門前で立ちつくしたままの二階堂が、微妙な面持ちでこちらを見ていた。目が合うと、きまり悪そうにそそくさと立ち去っていく。野球部のがっちりしている背中がやけに縮こまって見えた。

遥の推測は正しい。

実際に中学生のときに一度告白されているのだ。そのとき付き合えないとはっきり断ったが、彼がまだあきらめていないことは何となく感じていた。あきらめたくてもあきらめられない気持ちはよくわかるので、無下にもできない。

「牽制が必要かな」

「ぎゃっ！」

遥が甘ったるい笑みを浮かべて手を伸ばしてきたので、七海はあわてて後ろに飛び退いた。

遠巻きに見ていた生徒たちは、不思議そうな顔をしたり囁き合ったりしている。その中には同じクラスの女子もいるので、下手すればあつというまにおかしな噂が広まりかねない。

中学のときみたいに騒がれるのは勘弁してほしいのに。恨めしげに遥を睨むが、こんなところで抗議をしては余計に目立ってしまう。グツとこらえて無言で車の助手席に乗り込んだ。

「変な噂を立てられたらお互い困るだろ。軽率なことすんなよ」

車内で二人になると、腹立ちまぎれに乱暴な手つきでシートベルトを締めながら文句を言う。

彼の左手薬指には何年も前から指輪がはめられている。女が寄ってくるのが面倒で、牽制のために幼なじみの男友達とペアリングをしているのだ。同性愛者ではないかと取り沙汰されるのも計算の上で。

その状況で七海と噂になればまずいことくらいわかるだろう。ペアリングがただの牽制でしかないと露見するかもしれない。あるいは二股をかけるクズ野郎だと誤解されるかもしれない。

七海としても平穏な高校生活を送りたいので目立つことは避けたい。ただでさえ橘財閥会長の里子ということで注目されているのに、そこの御曹司と噂になれば騒がれることは間違いない。

「なあ、わかってんのか？」

「確かにすこし先走ったな」

遥は曖昧な笑みを浮かべてシンプルな指輪に目を落とす。しかしすぐに気を取り直したように顔を上げると、シートベルトを締め、エンジンを掛けてゆっくりと車を走らせ始めた。

「今日の試験はどうだった？」

ふいに振られたその話題に、七海は思わず苦虫を噛み潰したような顔になった。ズタボロとまではいかないが、頭を抱えたくなるような出来である。遥はハンドルを握ったままこちらを一瞥し、くすりと笑う。

「まあ、今度頑張ればいいよ」

「誰のせいだと思ってんだよ」

「そうだね、ごめん」

ホントに悪いと思ってんのかな——軽く笑いながら謝罪した彼にじとりと視線を流す。自分としては真面目に勉強するつもりでいたのだが、彼に邪魔をされたのだ。試験期間に部屋に来るなんてこれまでなかったのに。

「ねえ、きのう言ってたアレさ、やっぱ冗談だよな？」

「本気だよ」

ちょうど赤信号で止まると、足下の鞆から取り出した白い紙を手渡してきた。二つ折りになっており外側には何も書かれていない。何だろうと怪訝に思いながらぺらりと開くと——。

「婚姻届?! なんで、無理って言ったじゃん!」

「気が変わったらすぐ出せるようにね」

きのうはすぐにうやむやになってしまったので、冗談か思いつきで口にただけではないかと思ったが、ここまで用意しているなら本当に本気かもしれない。七海はすうっと血の気が引く

のを感じた。

「ちょっと待って、僕、まだ高校生だよ?!」

「結婚しても高校に通えるから安心していい」

「そうじゃなくて!」

もちろん高校のことも大事ではあるが、それ以前の問題だ。

「まだ、そんな……考えられないよ」

結婚なんて意識したこともなかったのに、急にそんな話をされても戸惑うばかりで、どうすればいいのかわからない。白紙の婚姻届を胸元に押しつけるようにして突き返す。

遥は苦笑を浮かべながらも素直に引き取り、元の場所に戻した。

「もしかして、まだ武蔵を待ってる?」

「……武蔵は関係ない」

七海はふいと視線をそらした。

多分、武蔵が初恋だった——当時はまだ幼すぎて自覚していなかったが、離ればなれになってから気が付いた。そのことは遥も承知している。そしていまだに気持ちを残していることも、わざわざ告げてはいないが察しているはずだ。

だからといって武蔵が戻ってくることなど期待してない。そう決めている。もし戻ってきたところで、以前のように一緒に暮らすことはできないし、異性として好きになってもらえるとも思えない。

そもそも、七海を引き受けてくれたのも贖罪でしかないのだろう。本音では早く解放されたいと思っていたかもしれない。もし好きな人がいても、七海の面倒を見ては会うことすらままならないのだ。

溜息をつき、ゆっくりと流れ始めた街の景色を眺めつつ目を細める。

当時、武蔵に好きな人がいたかどうかは知らない。遥なら知っているかもしれないが尋ねる勇氣はない。当時はいなくても、故郷に帰ってから恋人ができたかもしれないし、もしかしたら結婚しているかもしれない。

こんなこと考えても仕方がないのに——。

苦しいくらい胸がざわつくのを感じながら、あえて意識しないようにして平静を装う。それでも遥には簡単に見透かされてしまいそうで、駐車場に着くまでずっと窓のほうに顔を向けていた。

「おいしい!」

一口食べるなり、七海は目を丸くして感嘆の声を上げた。

先ほどまでの澀んだ気分が一気に吹き飛んでしまう。我ながら単純だという自覚はおおいにあるし、向かいで笑う遥もそう思っているのだろうが、実際おいしい食事で幸せになれるのだから仕方がない。

今日、遥が連れてきてくれたのはひつまぶしのお店である。いつだったか雑誌の特集を興味津々に見ていたことを覚えていたらしい。忙しいはずなのに何かと気をきかせてくれるのだ。

説明された食べ方に従い、一膳目はそのまま、二膳目は薬味を加え、三膳目はお茶漬けにしてください。どれもおいしかったが、さくっふわっとしたうなぎの食感、薬味で引き立てられた味わい、その両方が楽しめる二膳目が特に気に入った。

「遙もひつまぶし初めてだよ。どうだった？」

「おいしかったよ。うなぎの焼き加減と味付けが絶妙で食感もいいし、ごはんもふっくらしていてつやと甘みがあるし、お茶漬けのだしも上品でよく合う。うな重と違って変化が楽しめるのもいい」

そう言うと、遙はきれいな所作でお茶を飲んだ。

食べている様子からして、気に入っているのだろうとは思っていたが、予想以上の高評価を聞けてほっとする。せっかく一緒に来たのだから、七海だけでなく彼にも楽しんでもらいたかったのだ。

「いいお店でよかったね」

「ここのひつまぶしは本場の味らしいよ」

「お店によってそんなに違いがあるの？」

「焼き方やたれに特徴があるみたいだね」

「他の店のもおいしいのかなあ」

「気になるなら、今度どこか行ってみようか」

「うん！」

短いポニーテールをはずませる七海を見て、遙は淡い微笑を浮かべた。再びゆったりとお茶を口に運んで一息つく。

「僕も料理を始めてみようかな」

「え、急にどうしたの？」

「七海を餌付けしようと思って」

「そんな人をペットみたいに……」

「餌付けは野生動物にするんだよ」

「悪かったな、野生で」

七海がむうっと頬を膨らませると、彼は声を上げて笑った。

その表情がふいに武蔵と重なりドキリとする。顔の系統は似ていてもそっくりというほどではないのだが、笑ったときや眉を寄せているときの表情を見ていると、つい武蔵が思い浮かんでしまうのだ。

重症だなあ。

こんなことを遙に知られるわけにはいかない。彼に失礼だということも十分承知している。それなのにいつまでも武蔵への執着を捨てられない自分に、心の中でひそかに嘆息するしかなかった。

昼食後は、二人で街中をあてもなくぶらぶらと歩いた。

遙はたいてい次の目的地を決めてから行動するため、こういうことはめずらしい。目についた

雑貨屋さんを見てまわったり、通りがかりの喫茶店でパフェを食べたり、デパートの地下でケーキを眺めたりする。

途中で欲しいものがあれば買ってあげると言われたが、遠慮した。誕生日プレゼントは家に用意してあると聞いていたし、毎月お小遣いももらっているので、そこまで甘えるわけにはいかない。

ただ、その誕生日プレゼントが何なのか気になって聞き出そうとしたが、なかなかガードが堅くてヒントさえもらえなかった。もったいつけられるとなおさら期待してしまうのに――。

ファッションビルを出ると、空の一部が鮮やかな茜色に染まっていた。

そのときふと隣からバイブの振動音が聞こえてきた。遙は後ろのポケットから携帯電話を取り出して画面に目を落とすと、何事もなかったかのように戻す。しかしながらまだ振動は続いているようだ。

「ケータイ、出なくていいの？」

「馬に蹴られて死ねばいい」

まるで呪詛を吐くかのごとく言うので吹き出した。

いつもは七海と一緒にいてもかかってきた電話には出ているので、遠慮しているわけではないだろう。出たくないほど嫌な相手か、どうでもいい話か、そんなところではないかと思う。

「でも、そろそろ帰る時間だよ」

ビル群を彩る茜色の夕焼けを眺めてそう言うが、返事はなかった。代わりにそっと包み込むように手を握られる。一瞬ギョツとして振り向いたものの、気のせいかわ物寂しげに見えて振り払えなかった。

「やっぱり帰したくないな」

「帰るの一緒の家じゃん」

「どこか泊まっていこうか」

「あした学校あるんだけど」

「……仕方ないか」

そう言うと、七海の手を引いて歩き出す。

どうしたんだろう――今日は、というかきのうから遙の様子がおかしい。試験前日に七海の部屋へ来たり、婚姻届持参で結婚を迫ったり、帰したくないなどと言ったり、いままでになかったことばかりだ。

戸惑うくらい固く手をつながれたまま歩きつつ、ちらりと隣を見るが、その横顔からは何も窺い知ることができなかった。ただ、彼にしてはめずらしく手のひらがすこし汗ばんでいた。

駐車場から車を出すときには、もう夜の帷が降りていた。

気のせいかわ車内の空気がやけに重苦しく感じる。遙は真顔で運転していて、何となく話しかけられる雰囲気ではなかった。

「着いたよ」

遥は橘の敷地内で車のエンジンを止めると、助手席に振り向いて言う。

そのとき、またしても携帯電話の震える音が聞こえた。彼はシートベルトを外してポケットから取り出し、画面を一瞥してあからさまに嫌な顔をしたが、今度は無視しなかった。親指で通話ボタンを押して耳に当てる。

「はい……うるさいな、こっちにだって都合があるんだから……それが人にものを頼む態度？逃げたりしないから黙って待ってろ……そう、だからおとなしくそこにいればいい……じゃあね」

彼らしくない感情的な物言いだった。怒鳴ったり叫んだりしているわけではないが、その語調からむきだしの苛立ちが伝わってくる。啞然としていると、彼は乱暴な手つきで携帯電話を戻し、ハンドルに突っ伏して深く溜息をついた。

「逃げ回っていても仕方ないからね」

そう自らに言い聞かせるようにつぶやき、顔を上げる。

「七海、目を閉じて」

「なんで？」

「サプライズだから」

怪訝に思いながらもしぶしぶ目を閉じると、上から布のようなものを巻かれて後頭部で結ばれた。外そうと思えば簡単に外せそうではあるが、ただの目隠しのようなのでそのままおとなしくしていた。

彼の大きな両手がそっと七海の頬を包み込み、何かがこつんと額に当たる。彼が額を合わせてきたのかもしれない。そう思ったとき、すぐ近くでかすかな息遣いを感じて確信した。

「本当は行かせたくない。でも僕の一存でそうする権利はないし、七海のためには行かせるしかない。このままじゃ、きっといつまでも七海の気持ちは宙ぶらりんだ。七海が自分自身でけじめをつけないといけない。たとえ君がどんな結論を出したとしても、僕は君の味方である」

「……何の話？」

混乱して尋ねるが答えは返ってこなかった。その代わりに、あたたかくやわらかい何かがかすかに唇に触れた。一瞬のことだったので確信は持てないが、おそらく遥の唇ではないかと思う。

「あのさ」

「行こう」

助手席側の扉が開き、目隠しのまま軽々と横抱きにされる。

遥のことはそれなりに信頼しているつもりだ。しかしながら何もわからないまま目隠しをされたあげく、思わせぶりなことばかり言われては、どうしても不安を感じずにはいられなかった。

「下ろすよ」

屋敷内の廊下と思われるところでそっと足から下ろされて、すこしよろけながらも地面に立った。そのときは手を掴んでくれていたが、すぐにドアノブと思われるところへ誘導されてしまう。

「遥……えっと、これどうすればいいの？」

「扉を開けて中に入って、目隠しを外して」

「わかった」

プレゼントが用意されているのだろうか、あるいはパーティが始まるのだろうか。サプライズという言葉からすると他に考えられない。ただ、そうであれば行かせたくないなんて言うはずがない。

考えていても仕方がないので、言われたとおりに扉を開けてそろりと足を進めた。この屋敷にはもう三年半ほど住んでいて、同じ形状のドアノブを頻繁に触っているのだから、視界が遮られていても開閉くらい簡単にできる。

中はひっそりとしていた。

目隠しをしていても廊下より暗いことは何となくわかる。頬にはすこしひんやりとした空気がかすめた。誰もいないのではないかと不安になりながら、目隠しを強引に頭から抜き取って目を開けた。

電灯はすべて消されていたが、正面の大きな窓にはカーテンが引かれておらず、ガラス越しの月明かりがあたりを照らしていた。その淡い光に浮かび上がるのは、肩幅の広い体躯、煌びやかな金髪、鮮やかな青の瞳の――。

「七海なのか？」

「うそ……」

目を丸くしてこちらを見ているのは、まぎれもなく心の奥底で求め続けた人だった。顔も声も記憶のまますこしも変わらない。見慣れた黒髪ではないものの、初めて見たときと同じ鮮やかな金髪である。

しばらく呆然としたまま無言で見つめ合っていたが、さきに我にかえったのは彼のほうだった。ふっと慈しむように優しく目を細めて言う。

「大きくなったな、見違えた」

「な、んで……」

涙があふれ、止めどなく頬を伝い落ちる。

話したいことはたくさんあるはずなのに、何も言葉にならない。ただいま、と彼が照れくさそうに言うのを見た瞬間、小さな子供のように声を上げて泣きながら、思いきり地面を蹴って彼の胸に飛び込んでいった。